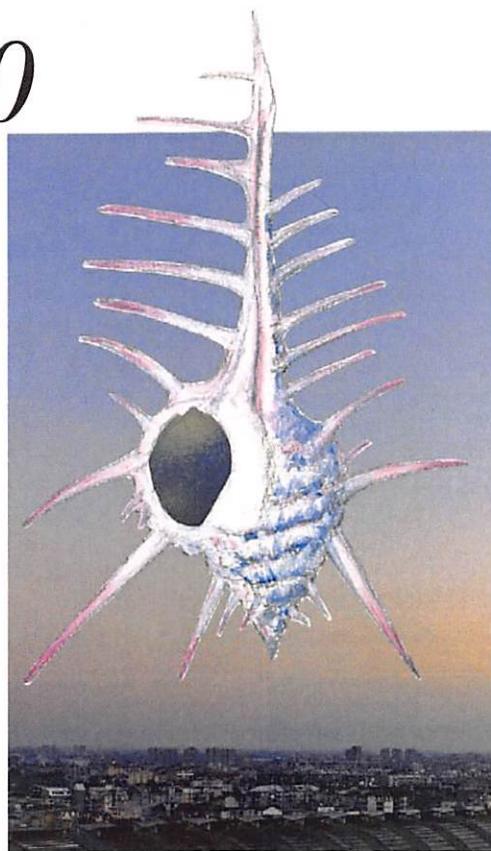


# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020.10



令和2年10月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第10号

No.749

## 創刊理念

文化としての地中海、こうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきました大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持である。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。



## 入 梅

近藤 芳仙

ウイルスのパンデミックに自粛せよもう葉桜の季節きてゐる

籠もる日へわきくるもののささやかに夕餉の膳をととのへてゐる

帽子かぶりマスクつけたる我にして人知れずゆく野の道ひろし

コロナとて人にあはねば夕ぐれの道のべにみる花のしたしさ

かな<sub>むがら</sub>葎詠みし秋<sub>てうくう</sub>逍空 夕道に聽こえきたるは如何なることか

しわしわと黄にやはらかき胡瓜<sub>うり</sub>の花齒切れよき実をけふも給はる

強くおせばくづれてしまふ球形のレタスやぶきてシャキシャキと食む

赤玉葱うすくきざむを酢につけて吾が体調の明日にそなへる

昭和十九年生まれ。

俳諧社長。

歌集に「花恋」「柳は緑花は紅」がある。

「昭和十九年の会」会員

外出の先に生きるむウイルスを意識してゆく郊外の道

このタベポリフェノールの赤ワイン体のために飲むのみならず  
江戸期よりたちゐるといふ土蔵つちぐらをひとり片しぬ自分がせねば  
曾祖母の嘉永びなとふ五人囃子箱にならべて陽にさらしめる  
この家の厨をつなぐいたりの女キミナをりしよ我のあとさき  
実家の空もはや見えない急にきて土砂降りとなるこの頃雨は  
酸素もて燃えることわり 土の上に枯れ枝もやし燃え殻を見る  
山路きて風にさざめく半夏生たれにみせるといふにあらずや  
招かれてのうぜんかづらの花の下 紋色まことに命の色す  
木に花咲き風そよぐ日の夕ぐれにかすかに聴こゆる「オールドブラックジヨー」  
水の神九頭竜権現まつります「岳の穢」のまぢかに迫る  
男神岳と女神岳とに見守られこここの平らに雨降り沈む

# 作品 A

船田清子

ねむの花

・天

うす紅(べに)のあまた雄蕊をそよがせて何を祈るやねむの花々  
立秋と聞きて咲くべき百日紅梅雨のさなかにくれなるゆらす  
梅雨明けもまだきに蟬は生れ出でて朝の晴れ間をのがさじと鳴く  
梅雨と夏・秋の三季が長雨にかき回さるるコロナ禍の中  
つひにして天界までをもコロナ菌犯したるにや雨も熱帯び  
コロナ禍に外出制限を嘆く人多しと聞くも私は喜ぶ  
立ち居せず一日机上に読み書きし時々テレビ最高の幸

福田庸子

石菖

・今

満天星を刈り込むレバー止めしどき今年はじめての蜩の声  
季ごとにとけこむ暮らし去りゆけり遠くにしめる鶯の声  
コロナ禍を二月遅れの登校に新中学生の自転車やらぐ  
日本中が息をひそめて過ごす日日季にとけこむ暮らし失くせり  
水の湧く凹地おほへる石菖の倍に伸び立つ勢ひの色  
コロナ対策避けたる内閣早々に国会閉めて夏休みとや  
私利私欲押し進めたる八年間アベノマスクに幼稚さ極む

藤田美智子

梅雨空

・新

まだ走れることに気づきぬ子どもらと水鉄砲を撃ち合ひながら  
氣弱なる男児に勢ひつけくるる水鉄砲の放つ直線  
たうもろこしが苦手と食べぬ二年生コーナースープのおかはりをする  
謝らぬ理由がこの児にきっとあるブルーハワイに舌を染めつつ  
冗談のつもりが傷つけてしまひたり梅雨空に硬きからたちの実は  
思ひあがりに気づかずにきてしまひたり夕立の雨に足止めさるる  
わざとかと思ふふるまひ多かりき母に叱られたかりしよ父は

藤森巳行

ライダー

・銀

梅雨時もバイクは楽し雨粒を顔面に受けハンドル握る  
暑い日もバイクを飛ばす風を切り125CC俺はライダー  
バイクに乗る妻は50我125排気量では俺が勝つてる  
スピードを控へ児童の帰宅するスクールゾーンをバイク走らす  
愛妻と悪妻とは一字違ひどちらにもなる妻を見てゐる  
コロナ禍で不要のお出かけ控へよとお達しが出る短歌は如何  
近年は異常気象が当たり前通常気象になりたる脅威

# 白子れい

ひと年

・洛

# 浜本英美

まほろしの蝶

・夢

青々と青き零の樹下に佇つわが家の梅は今年生り年  
光と影乱舞なす樹下枝ひき寄せ腕伸ばすも梅に届かず  
丸椅子に立ちて去年はもぎたるも今年丸椅子に立ち上がり得ず  
四角椅子持ちてきたるも足もとの不安定にて利用のならず  
ひと年にて斯くも身体の衰うか日々の生活に気付かざれども  
とことんまで去年はもぎしもあちこちに残せるままに今年は終る  
これ程に体力退化知らざる僅かひと年されど一年

# ぱぱりょうこ

三角関係

・鹿

フェンシングまがいにすっぽり固められ脳腫瘍に挑むピンポイント照射  
三Fから見おろせば電車は天蓋を顎わに晒して行き交いおりぬ  
草いきれ香りすがしくただよわせ梅雨やすみの野は刈られてゆきぬ  
逝きし男五十年を経て今もなお三十五歳 凛々しきお顔  
テレビ電話の如くはしゃぎて相語るY・M夫妻との三角関係  
梅雨という優しきひびきをもぢながら暴力的な雨のいくにち  
きょうひとひ佳き事づくめありがとうひとりひとりにありがとう」と

# 浜谷久子

未来

・地

I・Hコンロ切り替え決めかねる保証年数八年、十年

新製品使いこなせるうちに買うI・Hコンロの明るいフラット  
必需品のタイマー焦げ付き頻繁をなくせる見通し未来は明るく

炊飯器の替えどき玄米やわらかく炊けるを味わう咀嚼を味わう  
あれもこれも買い換えどきの重なれば新生活のスタートのよう

もう一度やり直す気もない齡買うをためらうシルクブラウス  
幾年が待ちいるだろうブラウスのベージュに黒の縫柄を選ぶ

国蝶のオオムラサキを桜の枝に見し日は遙かまほろしの蝶  
央子さんの届けられたる旅の苞英國の茶葉味わいており  
曇り日の入り江の潮くろぐろしづわが体内をみてることし  
梅雨明けの伝えられたり「楊貴妃」とうメタカの映像見つつ楽しむ  
節子さん的心づくしの鉢植えの鷺草咲きて春から夏へ  
外出少なき吾楽しめと心づくしの鷺草ひと花今朝ひらきたり  
鉢植えの鷺草一輪が三輪となり嬉しそうなり梅雨のあけたり

# 檜垣美保子

晏天

・昴

いっせいに生まれたること朝の蟬藤棚まるごと鳴き始めたり  
「睡蓮の花がひとつひらいています」午後のおやつのような報告  
ぱってりとぶつからと濃き白みえて泰山木のつぼみでしようか  
晏天の胎内をはする雷鳴 執着に似て低き音這う  
姫芙蓉ヒメダカ翡翠ヒメスイレンことばあつめて七月の午後  
黒土の烟と南田洋子の家香川家の門夢にたしかむ  
真夜中のこむらがえりの不意打ちとつけっぱなしの韓国ドラマ

# 牧雄彦

忘れ物

・大

風の音空にとよもす夜の道を忘れ物せし思ひに歩む  
何に苦しむ大き鮎よ町川の流れに逆らひ身をよぢりるる

京の町外つ國びとの影なくて哲学の道雨にしづけし

愛らしき小花模様のマスクなり道に落ちて雨が打ちそむ  
まなざしの美しきをみなこマスクして顔を隠せりウイルスのため  
今日もまた感染者過去最多といふ梅雨空ひくづばめ飛びかふ  
のぱりくる錆色の月見つづるてけふ言ひしこと呑みこむにがし

## 松浦禎子 夏の夜の夢

・羊

中千本ひと夜の宿に手をとりて迎えしはばた尾のあるひとか  
葛の里より届きたるくずの餅 猛暑の昼をぶるぶる食ぶ  
ボーランドよりの客人ご夫妻とお茶を一服烟足庵に  
待ち席に腰かけてひとり静かなり見上ぐる大樹のさやぎの中に  
鈍翁の草履に踏みし飛び石も歩むに難しわれのこの夏  
手枕の釈迦涅槃像この夏に岡寺いでてわが目の前に  
岡寺も橘寺も巡りたりねもごろなりし師にかこまれて

## 松永智子 空

・嵐

このままのねむりに入らむをうべなひてのち月の出を待つとなく待つ  
ものいはぬひとひの終りみてあるにとぼしはるけにんげんのこゑ  
にもなくなにもなく聞しんとして葉月二十日の月空になく  
こゑをあげなに呼ばむとすや雲のなく月のなく空ただだだとほし  
まむかひに待つといふこゑ夜のこゑひとりゆく道なほとほくして  
窓ありてねむりうべなふに待つとなく待つらし望の月の出を待つ  
待つことを待たず過ぎ来しこと多し九十歳を越えし夜の月

## 三浦好博 遅い夏

・銚

暴れ梅雨なほ九州を虐めるか安穂と生きる我にこそ來い  
菊地とは呼び捨て同士の同期生片や精悍こなたよばよば  
運命は私の手にあり追ひ詰めてゴキブリは殺す蜘蛛なら逃がす  
産む前の乙女のごとき子の嫁は肝つ玉があさんとなりて戻りき  
籠もあるなら螢ぶくろに父の日に子より貰ひし酒持ち込んで  
サクランボ枇杷にキウイに食べし種みな時く南瓜だけが発芽す  
夏来れば暑さは蟬が涼しさは風鈴が告ぐどちらも好きぞ

## 宮本靖彦 長梅雨

・凌

しまらくの静けさのあと屋根叩く音さまざまに雨通りゆく  
戸をすこし開けて入りくる朝の氣を今日の生命の源と吸ふ  
さみだれの最上川いまゆく水をあつめて鉄橋崩さんとする  
朝ななコロナ撃退の岡田博士おばさんドレスの日替り染し  
家族づれ父親闊歩す我也又かくもありしか半世紀前  
棕梠の葉をゆらし降りつぐ梅雨前線災害の地に思ひを馳せる  
梅雨明けの残り浮雲流れゆく史上最長前線のあと

## 三好聖三 田舎日常

・伊

たたまれし蒲団が春の猫だまり尻も頭もなく眠りおり  
校庭のけやき若葉の下あたり素振りしている少年がいる  
死してなお供華に桜を所望する男の名をば西行という  
足病みし男が涉る海のこと紅海・エズ・地中海まで  
「海上の道」をたよりに沖縄の始原への旅、ゆるりの旅路  
みどりまだ浅き草原駆けてゆく北のキツネは一頭にして  
すすめらは〈元気〉すなわちはちきれる翼をもちて飛び立つ

## 御代田澄江 敗戦日

・茨

敗戦日音を聴き拳握り畳に伏して慟哭<sup>ハラハラ</sup>るし人ら  
疎開中の横浜叔母の声もあり近隣の人集ひし中に  
暑さなど記憶より抜け幼な我ただ畠のにはひ心に著く  
仏桑華ハイビスカスの花白く甦りくる昔日杏し  
若葉輝り風に戦ぐを眺めつつ今日も少し乗るルームウォーカー  
コロナ禍は第二段階に入りしならむ東京患者連日三桁  
遺伝子の一部を人工加工為しワクチン開発と人智待むべし

茂木 炎

高尾山古墳

・埼

高尾山古墳なるあり高尾山と同名なれば好奇渦巻く

高尾山古墳は沼津が最寄駅なれど東田子浦まで買ひ置く  
赤人のうたを知らぬや窓口の女子に東田子浦の読みを聞かるる

沼津駅まづは観光案内所マップとパンフあれこれ貰ふ  
白隱の寺口にすれば「寺巡り私も大好き」とガイドの小母さん

古墳より帰る道辺に咲きてゐるハマユウは沼津の市の花にして  
市の花のはまゆふなればばて鳥はグーグルにきくカモメと出たり

もとむらしげと

自転生活

・そ

感情のもつれ合うさま露わなり都知事が言え巴國が否定す  
旅に出る旅に出るなの両の声最適解は神のみぞ知る

ただの風邪パンデミックの間<sup>はざま</sup>にて蟹のことに横歩きする  
東京の駅の群衆マスクせぬ人ひとりのみカメラが捕らう  
自粛する日々といえども籠もりつつ本を読みいて交わらぬ日常  
ウイルスの混じらぬ風の中をゆく八月の田に稻穂が光り  
モチベーション保てぬ日々を悩む子ら断続的に休校づく

八乙女由朗

白鳥事件(4)

・柴

山下雅子

あじさい

・習

つやけき変化巧みのあじさいは葉間に果てぬいろなきいろに  
伯母や母の気配だよう菩提寺に昭和の続く今がありたり  
語らいは灯となりて二十余年偲ぶにたまゆらひびく声あり  
ジレットの剃り味替めき唯一の舶来品の愛用なりし  
ゆくゆくは白髪ならむと思ひしが篤運悪しき病に逝けり  
なつかしく思ふ場面のひろがりに深夜のまなうらなんと眠わう  
失礼と座すや一服うまそうに文さん紫煙にまかれてしまひぬ

山野幸司

君

・沖

わくらばに君と結ばれ三人娘の孫と群れ合う夏の夕暮れ  
はつはつに出会い君の横顔の愁いとしき恋の始まる  
いつわらざる心直球わが胸にぶつかって来る教師の悩み  
どんよりと心重き日常を吹き飛ばしたり田んぼのかわづ  
ひたぶるに君は毎日病院の我がベッドに寄り添い帰る  
ひしひしと迫る機械に逃げ惑うスッポン君よ天のお使い  
新型のコロナウイルスこの地球間の帝王ならずや土竜

横田敏子

梅雨明け

・福

明治二年春に玉蔵捕らえられ入牢打首ありて終わんぬ  
明治維新に破れし仙台藩士たち開拓民となりて渡道す  
北の地を拓きて生きんと渡りたる仙台藩士の家族、ともがら  
都市の名に意を伝えたり北海道伊達市、札幌の白石区あり  
忠実に仕えん心深くして東北の情消ゆることなし  
六十二万石から二十八万石となりし仙台藩吾が生まれたる六十年前  
文久二年武士の子生まれのわが祖父が寺に入りたる理由にあらずや

人々に棚の奥より出すこけし梅雨明けの陽に目を細めたり  
梅雨明けを待ちおりしとや来春の市長選挙の依頼の電話  
長雨をたっぷり吸いし秋明菊酷暑の日々に苦ふくらむ  
照りつける太陽の下バラバラと機関銃のようにわか雨過ぐ  
行きづまる作歌の時間切り上げて食うふくしまの桃の旨さよ  
洗濯ばさみ外すにバチンと壊れたり「暑かつたのだ二十五度は」  
玄関を開ければひらり御歯黒蜻蛉今年の盆は子等帰り来ず

吉永惟昭 妻の被爆日

・熊

市原志郎 テレビの中

・萬

改めて思う程より風化せる長崎がある妻の被爆日  
 「起きたよ。早よ坐りたいポータブル」無言通話の伝いくる壁  
 被爆日だからあれかしと願うのみ何とか乗れた朝車椅子  
 頬拭けど見えぬうしろの寝ぐせ髪撫り戻すよに手櫛してやる  
 「もう寝ろよ。」きっと六時に起こしてよ、明日はデイケアお風呂の日です  
 被爆後 数多台風 大水害 震度7高く 今ウイルス禍  
 忘却はさせじと力むもかにかくに退方にゆらぐ妻の被爆日

朝井恭子

・森

大浪美雪

花のやぶ

・森

石垣の残るのみなる城跡に命繼がんと蝉啼きしきる  
 兵糧を断たれ滅びし城跡に怨嗟の声か蝉時雨充つ  
 城跡に残る石垣なれば崩えカタコンベのこと翳りをもてり  
 人影のなき城址にひそか群れおはぐる螢螢光を散らす  
 蝶の翅押し立て蟻の列すむ意氣揚々は虫にもあらん  
 姫娑羅の葉うらに蚕虫さがりいて有りや無しやの風にゆれいる  
 葉の裏に揺るる蓑虫鏽しるき風鐸のごと風とたわむる

磯田ひさ子

・蓮池

奥田陽子

ピーマンふたつ

・羊

コロナ禍の不安を抱き来し池に蓮の広葉の風に騒がず  
 蓼の葉の競ふあしたの梅雨のひま胸の高さにみどり広ぐる  
 口閉ざす乙女に似たり蓮の葉のあひに潛める蕾尖りて  
 蓼池はせめき合ふ葉を均しつつ台連ねてみどりの浄土  
 連日のコロナ報道 父母すでに世にあらざれば心の軽し  
 令和二年大石田町の最上川 茂吉の見る川氾濫す  
 コロナ禍も豪雨被害もつみ込み陽は蓮池の間に沈みぬ

蝶一匹行きつ戻りつ庭の隅やがて何処へか消えて行きたり  
 テレビにて放送されることあまたコロナウイルスの事ばかりなり  
 外に出ぬ我にも怖いコロナの事うがい手洗い強制さる  
 何パーセント病を移す確率を言いて静まるテレビの中は  
 身近な人の健康を案じつつテレビ聞くなりここ何日も  
 ウイルスに関係のなき報道をのんびり聞く昼過ぎのテレビ  
 妻の手のゆっくり動くテーブルに二人の皿が並び行くなり

## 小野雅子七月

・羊

一片の望みもあらず雲がこめ令和二年の七夕すぎぬ

なくしたと思つた手帳があつたこと話す場がなし外出自粛

人はなせ話したいのかなくしたと思つた手帳があつたことなど

雲切れて空の一部が明るめり地には朝顔、木槿のひらく

気がつけば四年、十年、三十年事件から経つ月日の早さ

交際費バースデーカードだけでしたお中元にも行かぬ七月

今日かぎり使へなくなる保険証 夜の更くるまで卓上におく

## 神田鈴子

天災

・大

「天災は忘れた頃に」は過去のこと再々襲ひて日常奪ふ

みどり渡き山、村、町を襲ふ豪雨防ぐすべなき人間を打つ

コロナ禍にボランティアの数集まらず片付け進まぬ被災地に雨

長引ける梅雨の晴れまの今朝の空高く透り来うぐひすのこゑ

コロナ禍に負けじと歩く散歩道うぐひすの声エールとなりて

野球なら二回表の攻撃とふコロナの終息いよよ遠のく  
梅雨明けを待ちかねるしや初蝉の声揃へつつ朝をにぎはふ

## 菊地栄子

枇杷の実

・湾

時を急ぎ空回りせし時代だったと不意にひらめく苦々しくも

眠られぬ今宵はグラスを八分目満たして待てり閉ざす目蓋を  
深夜二時何を語らう少年ら 庭のいんげん莢太りゆく

昨年に増して実りぬ梅干の漬物容器洗つて待とう

六月の丘に登ればトラノオは昭和を引き摺ることき群生  
剪定のしすぎと独り泣きちて過ぐみのる枇杷の実見つけ出せずに

肺年齢「九十五歳」を聞き質す今日と明日とに逝く心地なく

## 木村文子しつば

・羊

霧雨の一夜が去りて仄白くあけゆく空に真向かいており

祖父・祖母のいます仏間を整えて父をまちおり 空を見上げる

仄白い空はどうんと脈を打つ涙ひとつもこぼせぬままに

はじめての出会いのように見つめいる太陽はいま地に射し込みて

家庭では静かに命がつむがれてレースのよう風に揺れおり

目を洗いまた洗うたび父の死を見つめるまえのまなこ恋しく

父の死を知らぬしつばが揺れている露にぬれたる庭草のなか

## 草刈十郎

父の日

・世

生きるには付き合ふものと思ひをり梅雨もコロナも現世のあれこれ

娘のくれし酒は何かと思ひしにけふは父の日ああさうなのか

世を嘆き怒りを晴らす術もなく老いは一日ひとひ生くのみ

やみくもにミサイル発射せし國の民は耳目を閉ざされ飢うる

生くることの辛さ慘さ示すがになめくぢひと夜の軌跡を残す

また一軒昭和が解体されてゆく淋しさばかり我が家も昭和

わが身体蚊に刺さるは健康の証しと思へば腹も立たざり

## 國井節子

春日奥山

・春

この夏はかなしみの夏 長雨の豪雨禍コロナ禍耳鳴りの禍

もう雨は充分と云ひ仰ぐ空まだ降り足らぬと空ひとりごつ

蝶ふたづ組んづほぐれ飛んでゆく晴れて又降る梅雨明けの空

にいに蝶羽をふるはせ鳴くことにすべてをかけて悔やむことなし

思ひ出はおぼろとなりぬ二上山大津皇子とその姉あはれ

磐之媛の御陵に入り来れば風の清しさ河骨の花

たちのぼる春日奥山霧ふかし晴れたら行かましわが師に逢ひに

河野繁子 誕生の月

・雁

近藤芳仙 ミラノ

・信

つゆ雨に豆粒ほどの実を落とし柚子の踏まれて香りを放つ  
電線をすうっと横に一羽との距離をあけたる鳥のおさまる  
萱草の灯りのともる散歩道亡きひと一人の誕生の月  
コロナ禍もいつかは過ぎんユクの木の花風に乗り雪降る」とく  
大木のユクの木何を見て来し梅雨のさ中に樹下の積雪  
旅人の見上げて腰を伸ばす影舗装となりて車す通る  
この先をゆっくり行けば迷い入る黄泉路に呼ぶや若き日の君

小林能子 「アマビエだるま」

・羊

耐性に限界はあり冷蔵庫のパッキングなど気にかけずきて  
壊れたる血圧計と同じ機種求めぬ「沈黙の殺人者」との縁

メール接続不能メッセージの繰り返しそれぞ被害妄想ならずや  
パソコンの次はプリンターFAXも動かすなれば疑ふ「認知」  
メール接続復旧ならずこんなはずないと幽かにひろがる不安  
「アマビエだるま」と五輪音頭を踊りたり漂ふことく夏の夜の夢  
ゴミの日をまたも逃しぬそれもいいさ忘るるなけれ「八月六日」

近藤栄昭 マスク

・虹

コロナ禍が来た、見た、勝った／元気だといつか告げたい緑の山に

足りないと騒ぎ支給のマスクまつ心疲れてマスク思わず  
どこまでが使い捨てとの線引きか舗道のマスク梅雨にぬれゆく  
正論で必死の人人が残りいる去る人多きメディアのおもて  
対応の遅い箇所を目詰まりと働きアリは穴を広げる

逃れえずコロナに捕まる人々よタキオンのエンジンつけて逃れう  
Withという言葉使うなコロナの禍決意と敵意言葉が違う

おりたちしミラノ空港ローマ字に我が名をかざす現地人を探せり  
この旅のハイライト「最後の晩餐」に対ふも時間限られてをり  
キリストの最後の教へ使徒に分かつパンとワインは痛みともなふ  
「たがひに愛し合ひなさい」地球はまるく治まるだらうか  
ノミ痕も粗きピエタの立つ部屋に近づきゆきてまじまじと観る  
ミケランジェロ八十八歳の未完の作追へど終はりのなき旅なりや  
美術館に迷子となりし「日本の老婆」我のことなり氣落ちしてゐる

坂上直美 夏の風景

・天

裏庭に小さき薔薇咲く故郷の家時折に夢に出でけり

夫病みて少しへどもに近づくかことあることに吾の名を呼ぶ  
病院の真昼静けき待合に夫の結果の出するを待てり  
私はアーリーバードアライグマ天気の好い日はヴェランダに出る  
この家はすでに人は住まぬとう凌霄花咲き誇れども  
姉君は指して教えき園の花「アガパンサス」と淡きむらさき  
カナン燃ゆ人の命をはかなきと言うを許さず血の色に燃ゆ

坂出裕子 小雀

・洛

しあはせと思はざりけりあの頃はマスクかけずに街を歩きし  
防寒のはずのマスクを暑き日にかけて日なたを歩くコロナ禍  
マスクして足早にひと行き過ぐるどこまでつづくコロナ街道  
月を見て星眺めてねむるのはコロナなき夜と同じなれども  
ワクチンが出来てコロナの止む日まで生きてゐるのだらうか私は  
ちひさなる生ればかりの小雀が土をついばむコロナの庭で  
砂浴びをする鳥を見てあぢさるの雨に濡るを見てひと日過ぐ

佐久間 晟

日乗（三七）

・湾

関根榮子 長梅雨

・埼

懐かしき人幾人も浮かびては消えゆくあわれわが終末に  
生きることに疲れしゆえかこの頃は死をのみ思う死ぬも出来ず  
誰彼の声が聞こえるあの頃の友も若かり皆楽しげに  
おーい三好よ片山よ足立も居たつて喧嘩も繁く  
思うだにつまらぬ事に言挙げて喧嘩も楽しいひとときなりき  
学者面した片山に何かしら刃向かうことが出会いのはじめ  
もう誰もこの世には居ない寂しさに独り漂う思い出のなか

佐藤道子 空し

・甲

関根和美 るなばあく

・埼

見せうと見て見せる人無きこの世にてもあまし居り季ことの服  
山姥となりしに少し紅を引く女の性の残るかなしさ  
何事も思はず遠くの温泉にさらりと行きし夫在るときは  
日帰りの琵琶湖一周運転も苦にならざりし家族の旅行  
夫と行きし温泉今は遙けくてちがふ地球と思へる程に  
耳なりを大切にして暮す日々そばに夫在ることの証しと  
終活の物を捨つるも大儀にて一日一日無為に過ごせる

鈴木結志

邦楽の祭典

・福

高尾恭子 五月闇

・大

越天楽の三弦奏の鳴りひびき紅葉を散らす程いさぎよし  
尺八と三味の合奏メロディにすすき郊野の光景浮かぶ  
三弦の奏曲しらべ花嫁をおくる祝いのさみしき旋律  
自らの三味線奏者あいや節唄う美声にひき込まれゆく  
三味線をひく撥さばきいさきよく津輕波音重なりてきぬ  
野の花に群れてたわむる蝶のごと舞い踊らせる二上がりの曲  
「六段の調べ」身内に沁み入りて心の弦も鳴りはじめたり

うたた寝のわれを覚ましラジオより「るなばあく」の名聞きしばかりに  
ああやはり朔太郎の詩より命名とわがひらめきもおろそかならず  
わが生れし年に開ける前橋の遊園は愛されいまも稼働す  
現役の木馬館木馬十円で乗ると有形文化財なるに  
はつりの回転木馬に大泣きの写真のころもからかいの種  
「かすみちゃん」とちゃんと付けに呼ぶ叔父三人弥生卯月文月に喪う  
われよりもさらにかなしみ深めゆくこの身ばかりが長らうと母  
永遠にしゃべる女をとめられずルージュ赤々と地球はまわる  
読点をここにつけたか油断した息がかされる音訳初日  
「前方よし」新人車掌の声たかく各駅電車は銀河をめざす  
五月雨の友の便りは滲みたり悪性リンパ腫見舞いは不要と  
縊られし男のように濡れそぼつ干しつばなしのシャツ長々し  
三日目の雨ぶりやまず岡井遜きぬと朝刊のインクが匂う  
五月闇を柚子の実あおく太りきて折れそうに真っ直ぐな青年の笑み

# 高津砂千子 花

・風

花のきらいな人はいないとつぶやいて詩人は花を描き始める  
照りながら降る雨はしき星下がり梅雨明け宣言聞きしばかりに  
電車ならばスイッチバックで息をつく とりあえず私は鉛筆削る  
赤色にぱっぽと咲くほうせんか悩みなど捨て私を見てよと  
フラフープくるくるまわし三回固定観念払われゆくや  
モチノキにしがみつつまま息絶えし蟬の日かなし雨にぬれいる  
夕つかたまだ咲いているあさがおは色を保てり雨の一日

滝田靖子 芳年

・新

真珠湾攻撃といふ本のあり買つてしまふただ反射のやうに

芳年の描く暮末血まみれの彰義隊士の一途ひたむき

朝から暗き雨降る休日を自肅引きこもり芳年と過ごす

ひたむきも一途もすでに過去のものライトでチープなわれらの一生

色褪せしものに心は動かざりどうせ忘れる物と思へば  
真昼間の浅き眠りの中にきてあなたは何を悲しむのだらう  
戸惑ひも蚊遣りの煙も揺らし行く夏の隙間を入れきし風は

竹下妙子 優しさ

・霧

突然の豪雨災害家・車・線状降水コロナと死すか

百日紅の花も吹かれて散りしける暗き夜空に風鳴りひびく  
闇ばかり見ることき日の続くなり寝室の絵をヒマワリに替ふ  
たが胸を刺さむかわれのペン先に文字凍らせて真夜に文書く  
カサブランカ白き七つの花咲くに病もども夢つづりをり

人界にあらざるもののが優しさを見せて里山夕陽をまとふ

# 田土成彦

暗褐色

・宙

枕辺の時計リモコン書籍メモなければないですむものばかり  
まよひつゝ処分してゆく文庫本目標百冊まだまだ遠い  
甘酒を豆乳で割りたつぶりの生姜を入れる夏の醸翻味  
どこを見てもコロナ報道怖がらせ脅してなんぼのテレビ切りたり  
熱中症とコロナだけにはかかるまじ意味内容は異なるけれど  
湾口に並ぶキリンの一つだけ首曲ぐるあり午前五時半  
信州にもとめし蕎麦の花蜜の暗褐色は冬の夕空

田土才恵 青きかけら

・宙

轡々と雨降り続く日のなかに見つけし空の青きかけらを  
公園に来鳴く鳥を真似る子のコロナ自肅の轡晴らすべし  
唐突に入院告ぐる人ありてゆうべ別れし改札が見ゆ  
軽症にあるべし入院告げてこし人と歳の差たったのひとつ  
まっすぐに生きている人のこの先を照らすものあれ退院後にも  
自転車も無用となりし人の押す手押し車はゆっくりと行く  
目薬の残る一滴に救われて無事書き終えし宵の原稿

玉井綾子 浮き出る

・羊

授業中も休み時間も口ふさぐマスクの内側破れほころぶ

「せんそくです」リュックに活字の札を提げ見晴らし台に座る少年  
クラシック型に腰の曲がったひまわりを少年は蹴り幼児は撫でる  
ホームドアに映る足あし銀色の車両入りて列の浮き出る  
再びの休業となればあれこれをせんと目論むラッシュの車内  
はつきりと映らぬ鏡 自己」を信じられなくなる東部図書館  
大通りの先に夕焼け 長針が今夏は咲かぬ花火連れ去る

## 虎谷信子 八朔

・伴

## 永塚節子 緑

・銀

コロナ禍のなかりし岩手にも被災者出づ。遠野に遊びし想ひ出しきり

銀杏落葉ふみしめ 歩みし遠野なり。なつかしきかな郷の風景  
からまつの黄葉 散りしなか行きて、曲り家今もつがなきかな

八朔の行事もすたれ 草もちをふかしし釜の 残りてありぬ  
八朔を祝ふ行事もすたれしよ。今年の長梅雨やうやく明けぬ  
八朔に 母の手づくり草餅を、近所に配る 楽しさもあり

長梅雨の明けて八朔 猫らにも ごちそうだよとアレコレあたふ

## 中島央子 四肢のばす

・森

わが場所とばかりに仰向き四肢のばすソファーに眠る「ハナ」は保護犬  
保護犬の性ぬけぬらしすれ違ふ自転車めがけ全身で吠ゆ  
やはらかき夏草分けてふり向けるねばたまに似るハナの眼よ  
ミニバラはフェンスに絡み蓄増す賜はりしきみのその後を知らず  
長引ける梅雨空の下しきり鳴くミンミン蝉の出た所勝負  
墓参り行かずじまひに盆は過ぎわれにまだある此の世の勤め  
羽田へと下降の飛行機五分置きGO・TO除外の江戸川の宵

## 中島義雄 夏越祭

・岡

亡き母が茅の輪ぐりてわが武運祈りし遠き夏越祭めぐる

少年兵我の武運を祈りしと母よりの護符翼下に抱きき

戦ひの世代はるけき夏越祭友の遣兒さへすでに老いたり

オリンピックも祭りの脳はひも成り立たず人さむざむと茅の輪を潜る  
しはぶきつつ太祝詞読みくだす神官はわが戦友の遣兒なり

消毒のアルコール匂ふ夏越祭終へて僅かな賽錢数ふ  
賽錢を集めて数へし指匂ひコロナに淋しき夏越祭終はる

路肩にはやまゆり揺れてどこまでも緑ひと色咲を目指す

乙女峠篠坂峠ふたつ越え緑の中を走るよ走る  
クレヨンの緑色がもう足りない走りてもなお青葉の続く

湖の岸に寄り来る鯉の群れあきとう姿いや遅しき  
遠ざかりまた近よりて小さな飼を捕まえる確かなる口  
寄りて来る鯉と遊べり七ヶ月続くコロナ禍今日は忘れて  
梅雨明けは今日かも知れぬ穂積という言葉知りたる八月朔日

## 久我田鶴子 たちろぐ

・羊

にんげんのはかり知れなさにたぢろぐは六十五年生きても同じ  
にんげんができるませんですみませんばやくちを常習とする  
久我田でも久質でもどうぞお好きなやうに变幻自在といふことにして  
どこにでもなんだかなあは転がつてこの素晴らしき世界を笑へ  
ハリモグラが湊提灯を出すところ漫画にあらずほんたうに出す  
老いてなほ産まるとするは血まみれの短き夢に股をひろぐる  
欲望を隠さずに来る正直者 目を合はすなくやりすこさねば



## 子どもの頃

土井 敬子

短歌の世界

# 今月の二人

爪黒き子等の放てるビー玉の青のころがり 夕光に透く  
 ビー玉を転がしメンコを打ちつけて大地に育ちし昭和のわれは  
 地に描きし陣とり合いて遊びたる腕白どもは今何処に  
 叱られて子猫とともにに入れられし押入れの中に寝入りし安らぎ  
 いつの間にか道に惑いて巡りいるわが胸奥の昏き樹林よ  
 咲き満ちて盛りあがりたるイヌフグリの緑踏みしめし足裏豊けし  
 小仏壇の母慰めんと供えしは咲きそろいたる白梅の枝  
 引き出しの奥に忘れし携帯の記憶は取り出せぬタイムカプセル  
 柔らかき窓の縁にとめどなく落ちる雪に心揺れし刻  
 その翼ちぎれる程に振るわせて雲雀は翔べりイカロスのこと  
 天翔けるケンタウルスよその矢もて遠方台風の眼をば射よ  
 良寛と子らの遊びし夢を見る 色糸あせし手毬は今も眠れり  
 セルロイドのお面は妖しくわらいたり夜店の奥の棚の闇より

小学生の時、通学路に広瀬川からつながる七郷堀が流れおりました。その脇に染物工場や造り酒屋があり、その廃液で川面は絶えず白や紺や茶色が筋になつたり濁つたりお日様が乳色に浮いて不思議な文様を作つておりました。学校の行き帰り橋の上から眺めるのが好きで、時を忘れたもので。橋の欄干の下にランドセルや傘を忘れることは度々で、そのボンヤリ眺める癖は七十歳近くの今も相変わらず、蟻の行列を追つたり蝸牛の這いあと銀色に見とれたりと直りません。

友人のお誘いから思いがけず歌会にご縁をいただき「地中海の会」に入会して八ヶ月になります。新聞の歌壇を読むのがさやかな楽しみですが、自分が短歌をよむとは思つてもみませんでした。知れば知る程短歌の世界は深遠でたじろぐばかりです。それでも、私の中に小さな触角が芽生え、見るから覗る、聞くから聴く、言葉を探すようになると、このボンヤリ眺めていた世界が際立つて不思議です。

今、素晴らしい佐久間尾先生と歌友との巡り合いをしみじみ嬉しく思っております。

## 日々の想い

風早 公恵

よき縁に恵まれて

子の巣立ち安堵の気持ちもつかの間に心配つきぬ母親われは  
紙代わりのスマホメモ帳へ一首書くどこまで続く短歌の隊列  
子供への気持ちを書いた投稿が新聞に載り息子が照れる  
短歌には想い楽しむ世界あり夢追うわれに心膨らむ

被災地の現状を知る驚きと体呑み込む恐怖の高波

いにしえの京の景色に溶け込むは一期一会の銀閣寺の庭  
丸メガネ藤田嗣治をものまねてチョビ髭もつけボーズとる我  
愛犬を茶毘に付す間に寺参り紅葉鮮やか時<sup>もみじ</sup>雨る心

里帰りの在来線に駅が増え家路と過去が遠くはるかに

息子から絵巻のようなライン来て日々の暮らしが彩り添える

巫女の舞清め授かる御守りに城南宮の垂れ梅咲く

連山にひときわ高く靈仙山雲の帽子をひとりかぶりて

蝉時雨緑鮮やか早稻<sup>わさ</sup>の穂は命繋ぎて夏風渡る

高校の授業で短歌をつくる時間があり、私は色々と思いを書きつづった。十首以上詠んだと思いますが、提出した時に先生は陸に読むこともされず「こんなにだらだら書くもんじゃない。」と返されたのです。それまでも良い先生には縁がなかったので心が折れてしまい、その様な事をこの度のご依頼を受けて思いだしました。

あれから数十年が過ぎ、息子の大学祭で知り合った中村博子様から連グループとのよき縁をいただきました。内田様、久保様、中村志津様、伊島様、間野様、菊岡様。皆様は広くあたたかな目で短歌を詠まれ、ご指導して下さります。回を重ねることに私の心は解きほぐされてゆきました。一步進んで二歩退る時もありますが、新しい知識と歌を愛てる心で新たな自分が生まれてくるようでとても嬉しいです。

まだまだ日先の事しか詠めないけれど、五感で受け止め心で表現していくたら思います。

私を育み成長させて下さる連グループの皆様に、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

◆今月の二人・土井敬子作品評◆  
夜店の奥の棚の闇より

土井さんは、仙台市在住。学校帰りに橋の上から川面の文様を眺めたりするのが好きな子どもだったと言う。

- ・爪黒き子等の放てるビー玉の青のころがり 夕光に透く  
子どもの頃を詠った一連の初めの一曲。夕方の光に透ける、ビー玉の青。実に、美しい。だが、そこにビー玉を放ったのは「爪黒き」子等であること。そこに子等が置かれている境遇が垣間見える。さらには、背景となっている時代も。
- ・ビー玉を転がしメンコを打ちつけて大地に育ちし昭和のわれは 前の歌に続く一首。昭和の時代に育った自らを「大地に育ちし」と顧みる。それにしても、ビー玉とかメンコとか。きっと男の子達に混じって活発に遊んだ子どもだったのだろう。
- ・小仏壇の母慰めんと供えしは咲きそいたる白梅の枝 この歌は、子どもの頃ではなく現在を詠ったものか。「亡き母に供える白梅の枝。いち早く咲く梅の花の、凜とした清らかさは、母のイメージにつながるものであろうか。「小仏壇の」という一語がもつ霧閑気。「仏壇の」とは明らかに違う。「亡き母であっても、今なお身近なところにいるような。  
・柔らかき恋の線にとめどなく落ちる暁に心揺れし刻 雨の日に窓から外を眺めているのか。柔らかい緑、とめどなく落ちる雪。見飽きることなく眺める姿は子どもの頃に重なる。

・セルロイドのお面は妖しくわらいたり夜店の奥の棚の闇より この歌も昭和を思わせる。下の句の、「の」で繋がれた言葉の順にぞくぞくする。最後に「闇より」としたのが味噌だらう。

◆今月の二人・風早公恵作品評◆  
絵巻のようなライン来て 評者・久我田鶴子

風早さんは、岡山市在住。高校の授業で短歌をつくった時から数十年、作歌につながる良き縁に恵まれたようだ。

- ・子の巣立ち安堵の気持ちもつかの間に心配つきぬ母親わは 子が独り立ちし、ホッとしたのも束の間、その後も母親としての心配は尽きることがないと詠う。子が幾つになっても心配させられる喜びというもの、一方にはあるのだろう。
- ・紙代わりのスマホメモ帳へ一首書くどこまで続く短歌の隊列 スマホのメモ帳に一首」というのが現代である。文明の利器を使いこなしながらの短歌作り。「短歌の隊列」としたところ、整然と並ぶ一首一首が立ち上がってくる。
- ・子供への気持ちを書いた投稿が新聞に載り息子が照れる 散文的ではあるが、素直な気持ちがそのまま伝わってくる。読んだ息子が照れているのだから、投稿内容の具体が分からなくともおおよその想像はつく。「息子が照れる」と事実だけを言ったところが、ベタつかない親子関係を思わせる。
- ・丸メガネ藤田嗣治をものまねてチヨビ腰もつけポーズとする我 これは、どんな場面なんだろう。いずれにしても、心を許した人たちの中での寛いだ様子が目に浮かぶ。丸メガネにチヨビ腰姿が藤田嗣治につながるというところに、風早さん的一面が窺えるようだ。
- ・息子から絵巻のようなライン来て日々の暮らしに彩り添える 息子さんとスマホのラインで繋がっている暮らし。写真や互いの言葉が連なるラインは、言われてみれば確かに絵巻のようだ。日々の暮らしの喜びを息子が与えてくれる喜び。

短歌との出会いは、戦後の六三制最初の高校を卒業後、京都の藤川女子専門学院へ行っていた頃のことです。その頃大津にも「歌樹」という短歌結社があり、近所にお住まいの指導者の方からお誘いを受けました。少しは興味がありましたので二年くらいでしようか歌会に参加しましたが結婚などで長続きはしませんでした。

その結社に出た短歌の記録も残ってなくてただ私の頭にだけある一首〈早春の平城京を下みて黙してにぎる熱き掌〉当時は熱き掌なんてぬけぬけとよく言うわとう時代でどこへも出していませんでした。またケ・セラ・セラという歌がはやりそれを詠つたこともありましたが書いたものは見当たりません。家業、子育てが長く続いた歌とは無縁でしたが、父を平成六年に見送り、子供も親元から離れて学生生活をしていて、少し時間にゆとりの出来た平成八年ごろ、山村金三郎先生の指導を受けないかとのお誘いを受けました。短歌には長い空白があったので、ついていけるか心配でした。滋賀県歌人協会会長の高名は聞いていましたので喜んで入れて頂きました。月一回の勉強会には前夜に詠んだ急接えの五首ほどを、冷や冷やしながら持つて行きました。当時はパソコンもなく黒板に書き

かれた歌をノートに写し、解説を聞いてとくこと覚えていたのですが、もっと肝心なことも沢山伺ったのではと、今更ながらつあるから点々は離して書くのだと言われいでしょか歌会に参加しましたが結婚なで長続きはしませんでした。

この入会を勧めていただき今は至っています。毎月五首を提出していました。

## 私と短歌との出会い

白子先生は年齢を感じさせないバイタリティーのあるお方で自分に厳しくを念頭に行動しておられます。一年を通して朝六時近くの毘沙門さんに詣で、各社をお参りし、ラジオ体操をして七時に帰り、それから短歌、茶道の指導に出かけられます。化

学、数学の教師を五十年つとめられ、山村先生と同じ洛東高校の教師だったご縁で短歌の道に入られそうです。茶道も淡交会の役員で毎月忙しく活躍されています。

そのような先生のご指導のもとに若い歌手の方々と仲良く楽しく参加させていただいている。これからも彼等に負けず、白子先生を目標に、元気で作歌に頑張ります。



平成十五年五月、山村先生の突然の訃報

都ホテルで地中海全国大会が開催され、私は参加できませんでしたが、急逝された山村先生に代わって白子先生が大会会長の大役を果たされたそうです。

その後、大津の結社は衰微していき無くなることなく思っています。少しして「地中海」への入会を勧めていただき今は至っています。毎月五首を提出していました。

白子先生を通じて柏原宗一先生と久我田鶴子編集長のお許しをいただき今日に至っています。

白子先生は年齢を感じさせないバイタリティーのあるお方で自分に厳しくを念頭に行動しておられます。一年を通して朝六時近くの毘沙門さんに詣で、各社をお参りし、ラジオ体操をして七時に帰り、それから短歌、茶道の指導に出かけられます。化

学、数学の教師を五十年つとめられ、山村先生と同じ洛東高校の教師だったご縁で短歌の道に入られそうです。茶道も淡交会の役員で毎月忙しく活躍されています。

そのような先生のご指導のもとに若い歌手の方々と仲良く楽しく参加させていただいている。これからも彼等に負けず、白子先生を目標に、元気で作歌に頑張ります。

# 作品 A (八行歌)

浜脇景子 長雨

・夢

窓のそと雲に覆われうす暗く人を籠らす梅雨の長雨  
しぶきあげ間をはしれる雨音と風のいよいよ激しくなりぬ  
非常時の懐中電灯ラジオなど身近におきて再び眠る  
ようやくに梅雨の晴れ間に蝉のなき夏の季節に近づくけはい  
梅雨のあけ陽射しのなかの蝉しぐれ今年の夏はいつもと違う  
外出は背中あわせのコロナ禍の怖さを思い早めの帰宅  
窓をあけ朝の換気に暫くの自然の風の通り道あり

林 清江 東京湾の蛸

・朱

あるなしの風に揺れいる吊りしのぶ静もる町に夏たちにけり  
釣りあげし東京湾の蛸届ける吾子の顔にはマスクの跡が  
ぬるぬるの蛸の手足を塩でもみ赤く茹でたり今日は父の日  
梅雨最中百日紅の花咲きいでし見上げる空の曇重きかな  
花終えし紫陽花を今日剪定す来年の芽芽しかと確かむ

日々憂うコロナ感染者の数増しぬひたひたと迫る我が街近くに  
次々と三人の知人の訃報聞く家族葬にてお別れせしと

原田元子

アヤソフィア

・鳩

アヤソフィア遥かに遠い名を耳に今朝の新聞背伸びして待つ  
アヤソフィア夫との想い深き地よ新聞かえ仏間に坐る  
アヤソフィア夫との終の旅の地ぞモスク見上げて巡りし日想う  
愛しみて植えにし茄子の苗三つ育てる女の老を越しゆく  
九十二越えて庭の畑打ちし隣人今は窓辺に寄り立つ  
老いと云う厳しさの内に立ちつくす隣人思い己の手を見る  
“老いる”とはわがめぐり又皆老いて寂しさもあり安堵もありき

萩原嘉津子 欠伸

・宙

中高年はコロナに弱いと医者の言うどうすればいいのとテレビにつぶやく  
一日に四回うがいがいいらしくパビドンヨードを素早く買おう  
一日中家に籠もれる私はマスクも薬も不用物かも  
ガラス越し大きな欠伸を二度する今日のこの時二度とはこない  
隣家の猫を見つけて語りかけるきみもコロナにかかるかもよと  
テレビにて信号渡る人写るマスク無き人一人もいない  
日曜九時テレビのドラマ見る度に〇し時代の記憶蘇る

## 八田暁美

晴れ間

・羊

「氣を付けて」言い聞かせつつ踏み台に南部風鈴今年もつるす  
軒すぐる風をまといて一つ音の南部風鈴余韻かそけく  
久びさの晴れ間に並ぶ屋根かわら銀<sup>しゃがな</sup>反し車窓の眩し  
わずかなる雲の切れ間に東寺の塔相輪高だか青き天笑く  
町囲む晴れ間に山に千切れ雲ぼうとかかりて湯けむりたたす  
「明朝が採りごろならん」一夜明けトマトはすでに鳥のモーニング  
花茎の凜と立ちたりわが庭に祇園会彩る絢扇の群れ

## 日吉睦子

雨

・伊

かなかなどセミの声するつかの間の雨の晴れまを遙うが如くに  
何するも心虚ろな雨の日は黒のブラウスピックに替える  
一面に伸びゆく草の見事さに刈る氣も失せて立ちつくす夏  
大輪の白ゆりひらく朝ありて突然のベル母の死告げる  
弟も母も召されて故郷はますます遠く今日も雨降る  
母逝きて蝉時雨降る夕暮に涙ひとつ白ゆりに散る  
降りやまぬ雨のポストに絵手紙の署中見舞の届く嬉しさ

## 深井喜久代

良き風

・信

庭の草取りて過ごせる範もり居の日日もよきかな良き風とほる  
パンデミック、ロックダウン、クラスター疫病の世の言葉するどし  
ペスト禍に籠もりしニュートン偉業なすコロナ禍のいま何か果実を  
ガス灯にけぶりしローマかのミラノ闇散としてニュースに映る  
カーテンを開ける閉めるまた開ける自粛の日日にも緑ふかまる  
美容師の娘に空きの時間できけふも手作りのケーキが届く  
コロナ禍のかくのごときの有様をしき父母知らず幸ひにして

## 深山嘉代子

梅雨あけ

・昂

朝なさな電柱にとまる鳥二羽きょうはこどもを連れてきており  
鶯のこえも聞かずはつなつを籠りて梅雨のただなかとなる  
梅雨あけを告ぐる雷神走りぬけ犬はおどろきとびあがりくる  
あいまいな記憶たどれど語り得ぬ八月六日黙しておりぬ  
唯一のあの夏の記憶わが足のあまたの傷跡消えゆきしこと  
梅雨あけの黄金山の濃きみどり吐き出すごとく水蒸気たつ  
夏の夜の月満ちみちて黄色なり南東の空ぼっかりうかぶ

## 福岡和子

老いの不安

・洛

標記さる九十二歳三か月悲喜交々の三代の世に  
梅雨入りを待て早々夏日なり夾竹桃は紅に染む  
コロナには感染せずも心病み日毎のニュースに老いの深まる  
足萎えて久に外出の野の道の青田を渡る風に癪さる  
百日紅赤々と燃え暑き日々心して生きむ頂く余生  
夕餉どきいつのまに来る小蟻なり小さき虫にも神祕なる知恵  
雨降れば大雨となり災禍あり如何になりゆく地球の異変

## 福島三重子

山

・習

原っぱに線香花火する子らの浴衣くら間に白くうごきぬ  
打ちあぐるその一瞬に思ひこめ花火師の手腕やみに光りぬ  
いつしかに太鼓の音の消え去るを月も見をらむ祭の始終  
それぞれに上り下りの段ありて人は試練と高きを上の  
人はみな見えざる山を上るがに生きゆくものぞ自分の山を  
咲きのこりの花さへ愛しと終活にひたすら励む西日さすな  
玄関のドア閉める時ふと気づく忘れものあり今日は三度目

ふじとよひこ 思念

・そ

本元由美子

令和二年 夏

・岡

煙草やめて二十数年写真見つ痕跡ありと医師の告げけり  
丑の日に娘買い来し鹿児島の餌を妻と夕餉に食す

コロナ禍に集中豪雨列島に助け合いあり分断のあり  
コロナ禍に無理を通せば立ちゆかずととのつまりは生命に至る

明け方に負けて帰れる猫のアン負いし傷癒えず終に逝きけり  
同窓の名簿の整理友の名を亡き人の欄に入力しけり

いつまでも隠しとおせるはずのなき政治家の虚偽答弁止ます

藤川淳子

梅雨晴れの庭

・習

足もとの蚊遣り頼りに這いつくばり茗荷はどこか汗のしたたる  
しその葉はざわざわ繁るも穴だらけおんぶバッタのおこぼれももう

梅雨晴れの三日見ぬ間の庭先は草 草草の樂園となり  
久しぶりに母の淹れたる茶の甘さ手もとまねるも遠く及ばず

白という固定観念なんのその街はカラフルなマスク美人たち  
立枯れのミニトマトに生る赤き実を心していただく一粒なれど  
先へ先へ花芽のびゆくデュランタを心鬼にしてハサミ動かす

筆谷幸子

初蝉

・習

梅雨明けを告げる雷か遠近にとどろき渡る夜の静寂に

林道の敷のうぐいす軽やかに鳴きて我が背を押しくる」と  
初蝉の「ミー・ン・ミー・ン」に氣の揚がり太極拳の動きの彈む

一面の雨雲おおう道の辺に生き生きとして紫陽花鮮やぐ  
新型のコロナウイルス感染のひろがりニュースに戸惑う日々よ

窓おおうゴーヤの緑涼やかに香りを放つ八月近し  
雨続き体の重さ増えゆくに飲む点滴という甘酒好む

本田昌子

本田昌子 川

・福

未来より令和二年のこの星を覗きみて人は頑張ったのか  
日常を失ひて知る大切な家族の集ふ質素な食卓

灼熱の巷に人はマスク着けコロナの終息ひたすら願ふ  
梅雨明けの杉の秀群に霧昇り短き一生の油蟬鳴く

梅雨明けの八朔の山に秀群立ち祖の植ゑたる杉の耀ふ  
山里の夫の友賜びし自家製の番茶香りぬ微雨の厨に  
代満とて來し湯の宿の窓の下鴨の親子がシンクロをする

本田良一

・熊

氾濫の球磨川阿武隈川と重なりてからだ狂おし震え止まらず  
見つかりし衣装ケースのブラウスの洗えど洗えど汚水臭消えぬ  
四階の配食をなす今朝のスタッフ食器の音のやたら響きぬ  
説得のことば銳し背負い來し傷の深処をぐさり突き刺す  
尻取りのことばを拾うその間合い膝の裏側くすぐるを見る

マシュマロのお菓子のような感情の抑えがたくて一人でころがす  
頭を垂れてありがとうを言い身を低く笑顔を重ねて一日暮れゆく  
七夕に色も形も様々に妻のタンザク天の川まで  
水無月の雨乞い歌は雲隠れ天の采配ああ無情なる  
瓜食めば子供思ほゆ憶良歌吾いにしえの金瓜の味  
打ちたたく雨音なげに狂いしか令和のみ世の水無月なのに  
ひさかたの蓮葉の雨に菩薩花みつめる心般若心経  
思いかけぬバケツ返しの大霖に蓮花折れて流れ出したり  
誰が植えし野辺のかたえの白ゆりをふり向き見つめまた振り返る

牧野君代 洪水

・習

せせらぎを聞きつつ歩みゆくほとり水芭蕉の白濡れて際立つ  
木道に振り返り見る至仏山雪なお被く水無月なれば  
こもりいてハモニカを手に我を忘る何時しか「夏の思い出」に酔う  
コロナ禍に追い打ちとなる大雨のもたらす洪水何とも痛し  
最上川のかくも荒るるは久しうり不意に過れる芭蕉の一句  
朝一の冷たき滴を目に注して久しく仰ぐ梅雨晴れの空  
青葉吹く風のまにまに雛の声鶲の旋回頭上に止ます

町田龍子

・湾

ボランティアのステップアップ講座受くひとりになれどハガキ絵描く  
九時からはわれの時間とぞたまりいる便りしたむ手漉きのハガキ  
太白の森に抱かれ四十年芽吹きのいろどり正にパッチワーク  
日を重ね太白の森のはなやきよ守られて來し四十年  
いつしかに傘寿となりしかしみじみと茜のひろぐ太白山に  
晴れわたる文月の宙に三筋なる飛行機雲よコロナも乗るか  
手作りのマスクの柄を合わせいるコロナウイルスは何處の宙から

松井春枝 青空

・伴

西日射す窓の外では南天の緑の葉影が直射を防ぐ

南天は難を転じるめでたい木あちらこちらに実生で育つ

真すぐに空へ伸ばし太枝先にどんどんつける木槿の苔

照りつける太陽受けて真白い芙蓉の花がまた一つ咲く

ビル群が増え高く青空の領域犯してのさばっている

雨の日も外出見送り帰宅までずぶ濡れになつて待つてゐる大

松井みね野分

・伴

静けさは常としもなし。長閑なるひと時を こふ登にてふす  
昼たけて明れる方に鳥のなく、声みじかくてふたび鳴かず  
さ夜なかに覚めておどろく雨の音。せはしく動く 役場の燈明し  
嵐すき朝のくもりは兆し良し。蟬のたつらしがぞへてみれば  
豪雨の晴るれば疊るうつろひを、夏着すずしきひとと語らふ  
薄暮る甲山見やる日びなるに。葛葉の玉の消えずしこぼる  
秋風になに匂ふらん夕顔のまとふ時雨の たまさかにすぐ

松瀬トヨ子 雷雲

・沖

はかりがたき怒れをなして家籠もる空に爆発しそうな雷雲  
埋み火のようなクラスターの発生に避け道があるか置きどころなし  
家籠もるひと日暮れゆく低空に基地へ降りゆく米軍用機  
終日をコロナ情報身に重く東京に住む孫を案ずる  
週一度通所リハビリの平行棒にあなら熱る屈伸五十回  
はかられて等間隔の白マスク勇者のごとき弱者のことく  
青空にかーんと響くホームラン観客の無き夏の球場

真庭郁子 白内障

・朱

「高齢になればほとんど罹ります」看護師は説く白内障を

三ミリほど眼球長きと告げるる昔の渾名 出口金だつた

帰り来て百合のま白の眼に染みる眼内レンズの効果まさまで

溺り多きこの世であれどレンズ越し明るく見るも余生のたのしみ

梅雨寒のひと日部屋中響きたる「時代」や「別れ」の久しくなりて  
「今日ひとり死亡」と告ぐる報道はコロナと戦ふ戦死のことし

梅雨晴に開き始めた向日葵の今朝はくるりと顔は日に向く

## 丸尾悦子

初夏の服

・岡

## 光広祥子

生

・昂

咲きそめし庭のつづじを数へつつ麝香揚羽が庭を巡りぬ  
母さんの歌会に着てと夏服一枚持ちて古稀の娘が来る  
去年の秋株分けてやりしクロッカス一挙に咲きしとはづむ娘の声  
腰痛に臥せぬし妹を起こしきて横野の滝ヘドライブに出づ  
遠き日に亡夫とし見たる滝なりと涙ぐむ妹許せ知らで来しわれ  
九十一歳の誕生日を期に運転の免許を返せと子らは勧めぬ  
あと三年の運転を望めど詮もなし老いを悟りて子に従はむ

## 丸山紀代子

りんりんと

・信

わざわいの禍のしめすへんがしんにゅうに変わつてほしいコロナ禍を過と  
茅などにかこまれ古き石ありて「牛頭観世音」の文字刻まれし  
雨やみて線香たむけし墓地に立つ夏水仙のりんりんと咲く  
おおかたは時計まわりに円を描く振花さきそむ左まわりに  
晴れて欲し雨降りて欲しと六月の雲気にしつつかレーをつくる  
突然の雷雨はテレビの音を消しとおいむかしをよみがえらせる  
長雨は良きことの無し五十年にいちどの災害もたらしくる

## 光岡詔子

詠ふ

・羊

英語にて詠ふ短歌の善し悪しを問ふべくもなくコロナに昏る  
さくらさくら多くが詠ふさびしさの限りなくして 木に登る蛇  
蟬の声流るる庭に行めばわが耳に棲む蟬は消えたり  
地味なれど如雨露にバラリと水やれば艶を増しくる五ミリの花よ  
隣屋の離れてよかり休校の続く少年雄叫びあぐる  
マーぼーと呼びし孫の声変り不意に「ばあちゃん」はつと驚く  
雄猫の顔傷だらけ今朝もまた門扉の角に番人のこと

## 宮崎りつ子

七月の空

・う

入院の友の笑顔の写真見て日頃の瘤りほどけて帰る  
住む人の絶えて久しくなる家の森と化すれば枝葉繁れる  
降る雨に今日の予定の有無問われ電話の向こうに気遣う絆  
査定受け金のマークを頂いた出荷の主は大きな笑顔  
構内に甘い香りのただよいて財布の紐も自然にゆるむ  
少しだけ青空見れば草を取るこぼれた草はたちまち根付く  
梅雨最中紫陽花だけは奢り顔湿る心を癒しぐれなん

ますぐなるままにかたむく茎あおくカンナのつぼみふくらみてゆく  
採血をうけつつ見上ぐ高窓にゆるるみどりよもう夏がくる  
あの夏を語ることなく逝きし叔父八月六日のそののち生きて  
怒りには遠く静けきあかるさに生き抜きし叔父の心奥今に  
彼の世にて会えただろか母と叔父あの夏わかれし親弟妹に  
なんとなく残りの一世と思わせてときおりのぞきし母の諦念  
今何を語るべきなるわたくしと思ひねもす八月六日

## 水本セツヨ

看護師

・沖

寝もせずにうつろ眼の九十路 後追うナースの足のよろける  
九十路の男が薬を求める蚊が刺したと声張り上げて  
友笑いこれなら出来ると我が歌を言う下手を証明したかのよう  
目閉じれば祖母のみ出づる大農の母の思い出田に向く背のみ  
脅かすコロナの猛威三密で親父見送る娘婿の哀しき  
靴下の僅かな穴を縫いて僅かに縮みちぐはぐに見ゆ  
その昔隔離が安泰細菌も時代の過ぎて国を相手にす

宮西千代子 さざ波

・夢

田に水のはいればたちまち蛙らの声湧き上がる夜をとおして  
泥の田はひと刻にしてさ苗田と變りて一面涼の漂つ  
植えし苗十日もたてばしっかりと根付きて風にさざ波のたつ  
唐突に黒雲広がり降りだした大粒の雨庭の面たたく  
急激の雨に生れたる庭たすみる間に小川のごとなりゆく  
庭たすみ小川のごとなりゆくを眺めておりし飼い猫の頭つ  
常通る道辺の庭の木立より蝉の声たつ梅雨あけ近し

村石けさ子

夏装束

・埼

端正な夏装束の藤井さん少年棋聖の笑顔零れる

尋ねられ将棋の駒を置くよう言葉を紡ぐ少年棋王

ワイズコロナかなしの響きの言葉なる終りは何時ぞ耐えてゆかねば  
入口で出会いしまスクを凝視する名のられみればあ柳井さんね  
路の辺の白き野薔薇の雨に打たれ雨に打たれて清しさ放つ  
傘の中歩を速めゆく大き背に彼の雨の日の胸よぎりゆく  
徳姫の尼になりしを胸深く思いておりぬ信長読み終え

村上旭

脚気

・銚

幾つもの爪跡残す京壁に猫は逝くとも訴へかける

京壁に猫の爪跡いくつもが二十年経て増えることなし

両膝に強く挟みてヤスリかけ小口を白くさせて読みたり

付けベンにブルーブラックの黒すきぬ真白き紙はブルー待ちをり

麦飯の話を聞かぬ鷗外を始めとし軍は誤り昭和に滅ぶ

南極に「タカキ岬」のあるといふ脚気防ぎし業績により  
生き残りて著書を出すこそ悲しけれ『鉄の棺』は海底にあり

村上康子 蛍

・湾

ろうそくの微かに揺るる仏壇にひと日の無事を今朝も祈らん  
今年はもう飛んでいるかなワクワクと螢を訪ねる里山の地に  
霧雨の用水路そばに密やかな光を放ち螢飛び交う  
生き物と人の闊い思はせて田畠の周りに電気柵見ゆ  
嬉しさと恥ずかしさもあり敬老の乗車証藏き古稀を迎える  
雨の日の仙台駅へと乗車証のデビューを果たす緊張しつつ  
東京の感染数は増すばかり不安ひろがる今日も暮れゆく

餅井辰規

妻の物入れ

・羊

使うことあるやもしれずと棄つるなき妻の物入れ溜まるばかりで  
返事するそれだけで良い妻が居る部屋暖かし時々のぞく  
あと五分早く起きれば慌てずにバスに間に合う孫に向きて言う  
風向きに青田のひかり傾きてさびしき夏のさびしき行い  
忘れ行く食事の記憶寝る前に悲しみのこと妻が言い出す  
縁遠きはすであつたよわが受くる「男のための料理教室」  
若者の自死惜しむ声それとなく聞く八十二歳と八十歳の二人

桃原佳子

熱い風

・沖

大雨で表札落下せり光陰の垢を木目に添いて拭いぬ

夏蟬のじいじいじいといく百の声に疲れる午前三時なり

一日に一度は畠の草をとる我の足どり危うくあれど

鴉鳴く未明の菜園見回ればまるまる太るナスが三本

一面に青田広がる我が町にジャンボタニシの被害田あまた

救急車は呼ばれし家を探している火事かと思ひ外に飛び出す我  
梅雨あけて大干しする水のない田を渡る風は熱くけだるい

## 森ヒロノ　　緑水苑

・福

## 矢口さた　　藪枯らし

・習

大槻、緑水神社に参拝し池の水源は安積瀬水と知る  
来てみれば聞きしにまさる緑水苑花にかこまれ鶯をきく  
緑水苑の木陰求めて歩み来て枝垂れ桜を傘に歌詠む  
睡蓮の池にて鯉に餌をやる「いただきます」と大口をあく  
藍深き額紫陽花を愛でるに池面に黒き鯉のよりくる  
万葉の庭と言わるる緑水苑芭蕉も尋ねし花かつみ咲く  
君が手に手水の水をかけやれば水琴窟がかすかにひびく

## 森川淑子

時が行く

・大

長梅雨の明け待ちあぐむ蟬あまたあかとき突如次つぎと鳴く  
夜八時外灯のひかりにあざむかれ蟬は氣負ひて半時を鳴く  
道修町におはす神農さん疫病の收まる薬をお願ひ申す  
配給のカチカチに干さるるそら豆を祖母は茹あげ漬し餡つくる  
配給のキユーバ糖煮詰め重曹を加へてふくらすカルメ焼きなり  
豌豆は芽を出しつる巻き花ひらき緑の絹糸は父が育てし  
メンデルの法則習ふに目に浮かぶ豌豆の花紅、白、紫

## 両角徳子

郭公の声

・信

五月晴れなんと寂しき自肃自制言葉厳しくコロナウイルスに

野や山に自肃自制の言葉なく眞面に五月の光受けをり  
萱草の茎立つ畦の朝露を踏みて一筋我が道の付く  
郭公の声聞く今日の畠起こし豆蒔く頃とふ諺浮かぶ  
鶯の鳴き交はしるる山畠に耕運機の音夫は響かす  
早朝に夫の掛けたるエンジンの音に鳴き合ふ鶯逃げる  
昨年の種こぼれて群生ふコスモスの細き葉摘みザクッと間引く

## 柳澤君子

転居

・信

三十年を暮らしたる家移る時呆れるほどの物を捨てたり  
引越しをしたるは市内の五キロ先やさしい緑に山桜淡し  
ゆくりなく旧居が人手に渡りたり庭の紫陽花咲いたかと想つ  
空にして荒屋去りき忘れ物あるかの不安わが裡をよぎる  
一面に焦茶なる麦畑梅雨の晴れ間にようやく刈らる  
池のはた水路改修の石碑あり水が不足の歴史思ひたり

生垣に縋りて繁り伸びてゆく藪枯らし今日は一気に断ち切る  
ひたすらに生きこし日日を思いつつ歩みゆく公園靴音かるし  
降りつく音なき雨に濡れながらゆっくり歩む己が足どり  
それぞれがマスク掛けおり呼びかけて人ちがいに思わず尻込む  
新芽立つ四照花に糸長く揺れいる糞虫心地よからん  
長梅雨を紫陽花の彩生き生きとコロナ疲れの心癒さる  
雨に濡れ紫陽花しつとり艶めくに燃ゆるとき老いたるわれも

# 山合邦子 光合成

・天

七十歳すきて高校生物を独学中のリケヂョ志願者  
植物は炭酸ガスすひ酸素はく昔はそれでんてあたはず  
葉緑体チラコイド膜・ストロマで起る反応光合成とは  
光合成反応複雑めつちやむづい葉つばは巨大化学工場  
殺生をせずとも植物生きられる光と水と炭酸ガスで  
究極の自給自足生活者植物あなたを尊敬します  
カサブランカ土もちあげて発芽せし勢ひを駆り今朝の大輪

## 山岸時子 叔母の顔

・朱

梅雨最中閉めきりし部屋隅々に香り満たせるカトレア三輪  
鉢植えの小さき山椒は一晩に丸坊主にさるる幼虫三頭  
叔母の死の知らせは届く看取りより半年過ぎし夏至の日のこと  
看取りに入りて半年すこやかに叔母は眠いと目覚めずに逝く  
面がわりの棺の叔母は先に逝きし兄弟達とそつくりになって  
叔母のアルバムに若き母との水遊びはだかんぼうの我的笑顔よ  
叔母は英國女王陛下と同い年人それぞれの生き様あわれ

## 山崎昭子 蟬しぐれ

・大

医師は言う「薬と共に治なし」病院の前蝉しぐれ降る  
下向くな病に負けず上を向き一緒に歩もう夫に言い継ぐ  
とりどりの佃煮並べ選びつつ夫に合わせてお粥をする  
夫病むを知るや七月半は過ぎ庭によようよう蝉しぐれ降る  
折込のチラシきっちりたたむ夫全部まとめてたたむわたくし  
真っ白いネギの根っこを土に埋む鏹首もたげて青ネギ育つ  
稻妻はLED球の色をして空かけめぐり大雨誘う

# 山崎三千代 魔法のことば

・湾

不如帰こだまのように届く朝卯の花白きを今日はたずねん  
いつしらす大樹となりたる丘の桐青空指して灯すむらさき  
仏壇は桐と心に思いしもひそかに暖むだれにも告げず  
ひさびさの学校のチャイム風に乗る兎らのランドセルゆれてはすんで  
おしゃべりについつい広がる仲間らとクラクション高し団地の細道  
冷蔵庫の下段を足で閉めたればダメ出しをする「き母の声  
「そうだね」は朝夕使うわれの言葉摩擦をおこさぬ魔法のことば

## 山下和子 うなぎ

・洛

シルクコーンと名付け売らるるとうきびの粒は正しく絹の艶なす  
一匹を二人で分けて足らうなり国産うなぎの高値のつづく  
弱々しきひぐらしの声届くなり長引く梅雨の暫しの晴れ間  
ぼそぼそに使い古りたる筆洗う二十余年をいとおしみつ  
眠りいし毛筆丹念に梳きやれば生命ふたたび甦りくる  
自転車のメニューに疲れ手抜きなすカッパーラーメンわれの「馳走  
賞もなく見える罰を背負いつつ傘寿へ続く峠を目指す

## 山角和子 雜草

・う

「同じ目を持つと思うな」雑草をなげけるわれに息子つぶやく  
息子の説になつとくせぬも腰かがめ庭の草取る梅雨の晴れ間に  
広葉打つ雨音聞きてうつろなる心さわがすコスモス咲きて  
暴れ梅雨、日本列島おそい来る何に怒るとテレビに祈る  
となり家の草生の庭に天を向き背のひすること向日葵咲けり  
山奥の一軒屋訪ね昼餉とするコロナ逃ると先客苦笑  
初恋の人とうそぶき間をもたすコロナにおびゆる人らと昼餉

山田香代子 見えぬもの

・洛

横田美穂子 これが最後

・宙

・朱

豪雨の被害かたえコロナの感染者増ゆるに紙上一面を占む  
濁流に倒れし中州の草間より朱の葦草あざやかに立つ  
目に見えぬものに日にち左右さる 朝顔の蔓ぐんぐん伸ぶる  
おさまらぬコロナウイルスにやんわりと帰郷断わる息子らのため  
薄情な親と思うもそれで良し京の感染患者ふゆるに  
正月に会いしままなる孫たちに会いたき心ぐと鬼にす  
電話機とファックスすみずみ磨きては子等の電話を待ちいる日々よ

山村睦子 豪雨災害

・葦

吉田加寿子 桑の実

・渚

川沿いの風光明媚な温泉地濁流のまれ風景一変  
長雨で気分じめじめコーヒーの香りの力でカラッと交換  
束の間の梅雨の晴れ間に外干しすたむ衣類に日向の匂い  
早朝の涼しき中を蝉時雨昼間の暑さを暗示して鳴く  
近頃はマスク着用日常化口元各自個性が表る  
巢ごもりで友と電話で長ばなし同じ悩みと不安を共有  
歳なのかコロナのせいか分からずも意欲失せて老け込む我が

湯田恒子 鮎の山

・岡

吉野ふじ子 白鼻心

・朱

真向かひにそびゆる筈の飯の山今日も土砂降りの雨が覆ひぬ  
土砂降りの雨が全く眼を覆ひ山も見えねば歌も潰しぬ  
雨の日の膝を離れぬ猫の「ふく」瞳を細めつつ喉を鳴らしぬ  
悠然と据りて居りし猫のふく俄にねずみをひよいと捕らへ来  
一瞬に捕らへし鼠を食ひ尽くすその早技に驚きの湧く  
雨降れば猪の親子が畠に来て野菜を荒らし見る影もなし  
今採りし畠の茄子のつやつやと吾を映せり病ひ和らぐ

菅編みの手作り毬巻きたまわりぬつくりし人の思いの沁みる  
撮る度にこれが最後と思いつつカメラ持つとう写真家下村氏  
父親と弟に手作り弁当を八歳なのに大人顔負け  
ひらがなで文通するのもまた楽し相手は六歳教えられおり  
剥きかたはぼろぼろなれど見まねしてゆで卵むく三歳なりに  
書いてみてやはりこのベン書き良くて値段じゃないと一人納得  
ベビーカーに目のぱっちりな女の児バババイしたら手を振ってくれ  
初っぱめ吾がかたわらにさっと来て急回転をし緑へしすむ  
早ばやと三尺は見すくちなわの吾が目と合うやつと舌のばす  
散歩路を染めしあまたの桐の花見上ぐるほどに雲とまさる  
電線へ並び口あく子つばめに忙しき親の宙返り見き  
母の日の息子や嫁の包みには自肃を忘るる色のスカーフ  
朝顔の大きい葉っぱに小さく咲くブルーの三つ四つ梅雨空へ向く  
臘梅の枝にも絡む桑の実の熟れしに雀の一羽今朝見し

## 若松喜子

白南風

・昂

## 青田不二子

雨

・湾

乙女子の七夕送りのはなだいる潮を持ちおり七月の切り絵  
みどり濃き球磨川の辺に遊びたりき帰省途中の五人の家族  
なかなかに家の片付け進まさり父のネクタイ磁部の花入れ  
氣散じとすこし気取りて洒落のめす晩年の父口癖なりき  
ほとほと疲れしいもうと滑稽と大眞面目とがないませの父  
蒸し暑くなりそうな午後こんな日は饅召しませ土用丑の日  
白南風の吹くあしたなり沖をゆく発動機船の音の聞こゆる

## 和田健一

ゆらぎ

・湾

満てる海の向こう遙かに映る青、青春と言うはどのあたりかも  
朝朝に見れば見らるる心地して氣負いて見やる祖のごとき山  
継続が枷のようにも灯りにも見えて内なる炎がゆらぐ

氣負うこと何もなき日々なれど梅雨に入るとのニュースが流る  
見ぬ振りに居りたきニュースの川や淵を見れば苦しき影するき水面  
レタス菜のランチ程にも軽やかになる日待たるるコロナの晴れる日  
懐かしさが炙り出される如くにも茄子の素焼きの香りに亡母が

## 渡辺徳子

野鹿

・岡

明け間に休耕田を走りる鹿あり収穫の秋を危ぶむ

豌豆を片付けをれば瘦居ぬ呼ぶ夫も居ず一人闘ふ

戦利品を持ち帰ること嫂一匹棒に突き刺し家に帰りぬ

草刈りに行けば狐が飛び出しぬマスクいらねど油断大敵

鈴生りのキウイ間引けばもぞもぞと背中に金蚕潜り込むなり

目高飼ふ夫は毎朝ボウフラを餌に与へて満足げなり

栄養が余つてゐるのか十匹の肥満目高を夫は自慢す

空き家には採る人も無き梅の実が舗道にも転がり雨に打たる。  
紫陽花は花首を垂れ雨に咲く雨まだ続く薄暗き空  
いく日も雨に籠もれば氣も重く思いつくまま針糸通す

咲き始め花巻き伸びるねむり草初夏を告げるか梅雨の晴れ間に  
コンビニの袋の代金もレジに打たれ払い済ませる若者達は  
新聞やテレビに映されるカタカナ語何のことやら解らずのわれ  
採りたての自家製胡瓜の香り立ち満面笑みの自慢氣の夫

## 赤堀敦子

マスク

・岡

温かき友の縋ひてくれたるマスクして今日の重たき思ひ去らぬか  
認知機能検査受くると教習所の机に向かひ一呼吸する  
非通知の花火が急に空に弾けフライパン置き外に出て仰ぐ

「ドン損」と思ひし花火に心解けコロナウイルス憎みつつ寝る  
猪の戻に熊が掛かりしを伝へ聞き今之憎きはコロナのみなり  
巣立ちせし五羽の燕が旋回すコロナ禍のなき高き蒼空  
窓越しの夫との面会十分間タブレット通して話にならず

## 秋山裕子

手作りマスク

・茨

ありがたい 手作りマスクを友一人届けてくれぬ小雨降るなか

手作りの真白きマスク模様入り初めてつけて集会に行く

常陸野を治めし佐竹のその偉業年経ても残る至る所に

目に見える山野の姿ほのぼのと治めし時代の善政偲ばる

秋の実と対照的に淡白く宵に咲き散るカラスウリの花

草花の名よりは猛き花想い鉢に植えたる爆闇の花

朝に咲き夕迄に散る藪萱草 花茎の先で花ゆれている

## 阿尻みさを

宇宙と地球

・海

## 荒川信明

校章

・湾

九十一歳令和二年のこの日頃宇宙と地球・神秘に思ふ  
 大豪雨 地震 水難 大破壊 コロナウイルス 地球の危機か  
 朝夕にひたすら祈る平和をば宇宙と地球探究の日々

人間の悪しき業をば反省し神のみ心たづね努めむ  
 それぞれの国の文化をたたへ合ひ交流みやびに歓喜な世界を  
 理想的国際政治経済に科学医学文化の発展を  
 全地球一つになりて自然法を基礎に正しく平和に生きなむ

## 阿部洋子

縡い

・湾

術前の検査を済ませだしぬけに渦巻くコロナの読めぬこの先  
 「急ぐなら紹介します病院を」一人じや済まぬ老いの階  
 どっちかな患有右眼を手で塞ぎ待てない齡にお先真っ暗  
 どっちかな目の前揺れる円いもの計り知れない脳のからくり  
 县越えの日帰り手術の渡り舟コロナ遠のけマスクに手洗い  
 手術終え一夜の明ける目の前にくっきり広がる待合室の空氣  
 一回で針の孔通る糸を引き寄せ縡う命の限り

## 安部律空

・湾

## 生田節子

岐路

・洛

雪しまく下を向きつ坂登り散歩屋は休む日の無し  
 生きゆくは細菌とウイルスとの共生も新型コロナに成す術の無き今  
 新型のコロナウイルスに手を焼きし術なき感染病は世界を席卷  
 寒椿氷雨にうたれ緑濃く真赤な顔にさびしき影が  
 水点下六花の結晶はピカピカと青春の園の校章を思う  
 きさらぎのわが誕生日は美しき汚れし心のリセットボタンを押す  
 如月は誕生月でも嫌な月鬼門の影の消えるを待たん

## 有馬さと子

暑さの指數

・大

布袋腹もて余しいるまだ若きメトロの客の暑さの指數  
 窓を開け地下燎きの風とり入れて密閉はせぬ大阪メトロ  
 発車告げせかす商都の駅メトロディ コロナコロナと聞こえてきた  
 ドラエモンのマスクをつける幼な児にウイルスふと付度せぬか  
 マスクつけ百歳体操するという荒くなりゆく息の逃げ道  
 虫めがねかさし「蟬」の字さがしたり籠りの午後のひとつ収穫  
 刀剣となりて垂るる炎ばっさりとモロッコインゲン胡麻和えうまし

青空に飛行機雲のクロスロードゆっくり歩こう私はわたし  
 嫁ぎ来て覚えしひとつギボウンの蒸煮に春を味わう慣い  
 炊飯器 掃除機 オーディオ次つきと動かなくなる約束のこと  
 逃げ場なき楽園ならんキッチンの砂糖に群がる蟻を退治す  
 いつの間に遠くなりたる一人かと湯船につかり思い溢る  
 先の見えぬコロナ禍に耐える火の国に河川氾濫の豪雨いすわる  
 九州が壊れてしまうと思うまで降り止まぬ雨、空を見上げる

台ふきん持ちしとたんに違和感を慌て離せば中から百足が  
 「ヒヤアー」と己が大声におどろきつ百足の動き必死に止める  
 降り続く雨 あめ アメにうんざりと心も湿り重くなりゆく  
 コロナ禍の明け暮れの中さまざまな岐路むかう人死別に離婚  
 恩めの言葉かければ認知症だったと友は亡き夫偲ぶ  
 子供一人連れで離婚を決意すと悩み悩みて今はすっきりと  
 まだ若い三十六はこれからと励まし母子の幸せ願う

石田明彦

タクシード日誌（五十六）

・岡

七十歳の路面電車はわが町をアフタービートの揺れにて走る

ベン・シャーンの失業者の絵より抜け出せし如き若きに今日も逢いたり  
コンビニの深夜バイトの同僚と節約自慢を笑いて別る

駅階段につまずくわれを取り囮むマスクの隠す百の嘲笑  
ハローワークの廊下に待てば扉の前にだらしなく垂る蘭の唇弁

追えど追えど車内を逃げぬ蝶一匹わが頭のあたりを腐肉と思うや  
障害者乗するを厭う仲間いても知らぬふりするわれの怯懦は

石塚貴美恵

梅雨明け

・地

雨止まず占拠している洗濯物の柔軟剤の香りにむせぶ

先週もまた今週も草を刈る帰省の度に伸びて待っている  
ほんやりと傘を被った月に問ういつ顔を出す夏の太陽

明け方の冷めた空気に助けられ深く静かな眠りに落ちる  
目覚めればしゃあしゃあと鳴く蝉の声ようやく去った豪雨の梅雨は

コロナ禍の短縮された夏休みあぜ道走る子らの歎声  
母乗せて走る道路の右左紅柔らかに合歓の花咲く

今村叶子

戦の悲劇

・大

米軍のカマボコハウスが柵内に幾筋並ぶそば通学したり  
無機質なウエストキヤムブが或る朝うごきて何ことあると悟りき

次の日か朝鮮半島南北に分かたれ戦をおこすと知りき  
その為か歩行通学中止して電車で時に養母が付き来ぬ

七十年経しも緊張続きいる南北朝鮮  
離散家族の悲哀

「冬のソナタ」「愛の不時着」ドラマとし世界に展せば風まきおこれ  
南北もドラマも見ざる我が知る戦の悲劇 地球ゆ失せよ

岩井久美子

枯れ松

・昂

荒れてゆく人住まぬ家枯れ松に雀のあまたとまりさえずる  
枯れ松は雀の宿か夜明けより降りしきる雨つづくさえずり

豪雨ゆき空は真っ青枯れ松に今朝は一羽も雀が見えぬ  
犬柘植の丸く小さい葉が光る夜の網戸に守宮一つ

昨日より降りつづく雨アスファルトに螢が一つかすかに光る  
長雨に濡れる小さなお社の笹の葉光るうすぐらい灯に  
名を知らぬ野花摘みきて瓶に挿す風の涼しい夏の夕暮れ

岩崎洋子

梅雨の合い間

・朱

オンライン授業となりし大学に揺れる紫陽花人影もなし  
校門に張り紙ありて指示しおり入場制限レベル5まで

見上げれば燕さえずる軽やかに梅雨の晴れ間の青空に舞う  
降るように蛙の鳴き声夜もすがら物音一瞬静寂となる

堤防にひるがお野あざみ月見草梅雨の合い間に彩り楽しむ  
突然に轟く雷鳴猫のはな年は老いても逃げ足速し

この洋服安かつたのかしましく主婦の本音のラジオに流る

岩里周英

くにさかひ

・地

新コロナ意識に上の府県境道路一つで自肃巣ごもり  
藩政の時代もかくや国境コロナ施策で蘇りたり

ステイホーム自粛要請続いても痛痒感ぜず自家菜園は  
横文字のゴーザー〇〇カッコ良し新型コロナは終息するか

様々な横文字交へし新施策コロナ対応周知に疑問  
隣国は御し難きこと常の事双方が抱る所常に相反

傷口に塗り付くる長雨の被災地に降る雨の降る降る

植田和子 長雨

・大

鵜之沢通子

初夏の風

・習

熱帯魚の水槽ボコボコ息を吐く待合室にマスクの無言  
あやとりの橋は川になり待合室に母と娘の目と目が笑う

八十三歳わらべの眼をして追いかけるトンボひらりひらりとかわす  
トマトの脇芽摘みたる指の青臭き若きいのちを殺しごとくに  
実なりよしと喜びつかの間長雨にトマトは青き実を落とし次ぐ  
雨に濡れて羽化できぬまま転がれる蝉の無念を数えて歩く  
月光に洗われ蝉は青く透く羽伸ばしゆく 雨上がりたり

上野久子

羽ばたく鳶

・信

ピーヒヨロローと鳴き続けしは親鳶か里山<sup>\*</sup>の緑に羽ばたく鳶も  
巣立ちしか鳶の鳴き声ひびきおり七月はじめ晴れた朝なり  
里山は櫻の森より松やアカシヤ四・五十メートルこんもり繁る  
励ますよう鳴きおる鳶にわが子育て思い出しつつ山頂見つめる  
その昔子等と遊びしこの里山に反抗期の幼娘は家出したりき  
家出の娘の白いスカートひらめくを暮れゆく窓よりそっと見ていき  
里山は東へ幾山連なれ今は荒れいて深く入れぬ

内田泰子

別れ

・津

繋がれし何かがふと切るるかに前ぶれもなく友は逝きたり

身の内にかくも大きく久保さんの占めいしをの座を思い知るとは  
さりげなくそれとは云はず季節には新茶をふるまいられし友亡く  
別れざに「氣をつけてね」と交わしいし長きよすがの切るるはかなさ  
手作りのコーヒーゼリー・プリン等好意に甘えいし身のいたむ  
目つむればあなたの笑みの浮かびくる四十余年の歌友なりせば  
先月は電話でお話してたのに何故どうしたのがまだ止まらない

大江晴美

自販、自販

・森

さわやかな初夏の風受けながらあと一息と今日も草取る  
今年またふきの佃煮作りたり亡き祖母の味思い出しつつ  
腰痛の夫に代わりて病院へ娘の付き添いのありがたきかな  
今朝もまた「テレビ体操」10分間足腰のため鍛え続けむ  
駅までを歩きませんかと内なる声歩け歩けとわれを励ます  
田舎よりとうもろこしをいただきぬまずは隣へお裾分けする  
お隣の庭に実れる茄子のつや亡き母好みし茄子紺の色

梅本武義

コロナ禍

・羊

コロナ禍に総代のみが参列の埠除祭なり山鳩が鳴く  
緑渡き木の天辺の白鷺に睥睨されるわれら里人  
白鷺を追う青鷺よ恋なのか争いなのか梅雨の晴れ間を  
大雨に川音高く流れるも濁れの薄れ鮑泳ぐ見ゆ  
救援の遅れを悔やむ燕の巣襲いし蛇を叩き落として  
見るや即まむしを殺すコロナ禍の鬱積までも込めて叩いて  
目薬を溢れさせたる目を瞑りコロナ禍の世を思うひととき

日を追いて患者増しゆく報道に自販の上に自販かさなる  
コロナ禍で自販生活長びきて体重増加右肩上がり  
たまさかに外出するに梅雨明けぬ木々に蝉鳴くあちらこちらに  
五十余年親しき友は久々の電話に肺癌手術を告ぐる  
一年に一度の受診病院に変ることなき痛み抱えて  
定年の退職なせる主治医変わり一から話す痛みの説明  
鬱の日の続いているか友よりの電話は鳴らぬ一日暮れたり

## 大久保徳子

目覚し

・北

コロナ禍と河川の氾濫百年後複合災害いかに語らる

日本中マスク必須の世となりて一人も会わぬアベノマスク  
レジ前を大きく仕切るビニールの透明ゆれる異次元のこと  
梅雨寒のくしゃみ一つにふと気づくコロナ騒ぎに花粉症忘れき  
一本の電話がひと夜影をひくクレイマーなるか定めがたかり  
秒針がはずれ数年示す時刻鳴らぬ七日目ついに止むごめん  
いつの間に手首の傷あと脛の痣老いていよいよ知らぬが仏

## 大倉美與子

折鶴

・岡

抱き枕ふつくらと胸に添ひて眠る今宵の夢よ少女に返れ

週三日透析に通ふ緊張が老いの背中を少し伸ばしぬ

老いて病み短歌止めたるわが友と歌しか詠めぬわれを哀れむ

ふる里の浜に拾ひし桜貝断捨離の一番に戻しやりたし

ぱちぱちとベルンダ打ちて雨は降り母の手真似つ鶴折りなづむ

きつちりと折り上げられし母の鶴母の生き方ここにも残る

千羽など無理と我が性思ひつつ何日しか箱に溜る折鶴

## 太田和昭子

紫陽花の君

・渚

美容師の言葉や動きのやさしさに気もさっぱりと梅雨ひと日越す

仮壇に笛やほおずき飾られて迎え火を待つ庭のあじさい

久し振りに吾が青春の古里へ車窓にまぶしき海ぞいを行く

紫陽花もついに老いたる背戸の空くれない映ゆるこの百日紅

梅雨明けの庭に今年も梅干され酸ゆき匂いに寄り立つひとり

いすこより連ばれ来しや梅雨あけの庭のおちこち白百合ひらく

花終えしあじさいの枝とのえて「紫陽花の君」とう恩師をしのぶ

## 大槻知子

感染症

・朱

新コロナ感染者数拡大深夜に見上ぐる月はおぼろに

全世界に新コロナ拡散し私もウイルスの宿主なるかも

外出規制に用心深く出かければ高齢者の危険防災放送は告ぐ

ガラス越し親の治療の優先順位告げられしイタリアの今日

互いの消息電話に確かむれど心細きこの国の行き先よ

幼子を両腕に白黒の写真小さく戦地の父へ送られし

敗戦後行儀良き入学式の子等バラバラの服とはきもの

## 大野木淑子

カサブランカ

・洛

九頭竜の川のほとりに住みます従弟達からラッキョウ届く

畑にて育てた花を供えたり夫の命日カサブランカを

笹の葉に百足の遊ぶ雨上がり戻って見ればいす処に行きし

玄関の敷物の上蛇のいて皆がいで来ておおさわぎする

月参り住職の声せみ時雨やみて余談の長話なり

石垣雨降り多く苦むして我が足取りは慎重になる

雷は雨をともない近づきぬ干し十葉を取りこむ娘

## 岡島公子

炎ひ

・眉

おそろしき時代となりぬコロナ少し落ち着くと見れば豪雨禍來たる

このたびは九州に長く豪雨つづき大きなる被害ただ嘔然とす

繰り返す河川の氾濫土砂崩れ防ぐべはとその都度思ふ

「地域の実情に応じた流域治水プロジェクト」目に飛び込みぬ

大雨の原因となる温暖化軽減の効祈れるばかり

コロナまたぶり返すのか日常のくらし戻るは何時の日ならむ

「新薬は何時とは言へぬ免疫力高めるくらしを」心して聞く

尾形悦子 優しい言葉

・湾

小田淑子 水溜り

・昴

籠る日は過去の恩かさ数浮かび夜更けの苦い珈琲する  
志村けんあつと言う間に旅立ちし「大丈夫だあ」もコロナには効かず

宿ひらき露天の湯船に癒さるも二波の不安が湯気のこと立ち

終息もほんの束の間再びの感染拡大に追い討つ洪水

人知れず心に眩く生きることが大変な時代になりました

「GO TO 感染拡大キャンペーン」言い志らく氏座布団三枚

いつの世も苦しい時は助け合い優しい言葉かけ合いながら

小川節子

盆の集ひ

・茨

留守番を孫と為したり炊事から洗濯なべて世話してくれぬ

午後からの予報は雨ぞ降る前にかたづければと草むしるなり

老の年にむち打ちひたすら草を取る友の応援ありがたく受け

この日頃むしむしじめ生きづらしコロナ感染者なほ数増しぬ

同年齢をさな馴染みの孫ふたり相手連れ来ぬ盆の集ひに

梅雨寒の盆会の席賑はへり孫等結婚相手連れ来て

勘銚り寒暖の差の激しさに従いて行けずにただ迷ふなり

沖田誠子

師の歌

・革

園児らは広い芝生の公園を飛び跳ねまわるマスクを付けて

我が歌に故清水文の鋭さの微塵も無くて師を仰ぎ見る

師の歌の「よきものなき天の蒼」くり返し読む美しき歌

写真家の群がる先に鳥スミが高き枝にて羽づくりなす

大木の櫻にスミの巣が見ゆるヒナ未だらし何時生るや

夏の陽にこぶしのこととき実をかかけ菖蒲は次年の花を約束

一輪のくちなしの花朽ちたれど馨りでおれば捨ててはならぬ

小野節子

長梅雨

・夢

黄桃の冷たい蜜は胃に届き入浴終えし一日の安らぎ

百均のサボテン三鉢を玄関に飾り外に出ひかえ眺め楽しむ

慎ましくでも遅しく年重ね笑顔の皺をふやすわれかも

子育てを手伝いしお礼に貢いたる麦畑の中に雲雀を懷かしむ

風雪に耐えて育ちし麦の穂は四圍に逆らい茶色いろ増す

田や畑は見渡す限り緑増し刈り取り始めん麦の畑の

通帳に光のよう振込まれしコロナ禍のこと忘れぬだらう

小高京子

麦の穂

・湾

夕空を映す大きな水溜り飛びこえたいがゆっくり眺め

鳥の名は知らず夕陽の中に飛ぶ黒き一列まっすぐに行く

冠水の松浜公園混濁の水面を見ても為す術も無く

ヒトツバタゴ初めて見たる白き花呼び名が二つなんじゃもんじゃ

むすめから「テレワーク中」とライン来て我は助成金手続中なり

テレワーク出来ない我は雨の中庭の紫陽花切る次々と

朝会でコロナ防止を懸命に説明すれば「短めに」の声

# 海保奈良繁

墓地まつしへ

・春

深呼吸吐いてはいて吐きいだす現し世に見る心経の教へ  
老いぬれば生き来し重みひしとこころからつばに信仰の日日  
若き日の不治の病が縁となり病は無しと安堵感即信仰へ  
対生の若葉ひろげて枝細く伸びたる庭木勢ひ満つる  
私が背を向けた時神様はより一層に懇るだと思ふ  
飛ぶつばめ一直線に風を切る地蔵日訓 墓地の希望  
実相の成就たづねて墓地思ふだけでも愛されると思ふ

## 角田玲子 梅雨の雨

・夢

気づかいも会話もぼそぼその二人いて梅雨の雨降る午後をいとしむ  
父の日に娘より貰いしシャツを着て宝くじ買いに笑みて出かけし  
天気予報くる日も来る日も傘マーク蟬の鳴き声ととかぬ初夏  
のそと夕暮れの庭をよぎりゆく蛙はどこをねぐらとするのか  
ソーダ水まばたきしながら飲んでいた孫との夏ではない夏の来る  
面影のありありと浮かぶ眼れぬ夜古稀で逝きたる母の恋しき  
嫁入り前姉のくれたる手鏡にしわのない顔知ってるか問う

## 笠野洋 蟬声

・洛

絶ゆるなき蝉声の中くつきりと二上山あり山脈つづく  
永く住みし家に残せる本なども手元に欲しと願うこの頃  
湧き上がることき蝉声きき乍ら廊下一周わが朝の日課  
二上山続く山脈くつきりと蝉声絶えぬ朝涼しも

五時すぎて夕食に集うは男性四に十数人の女性達なり  
湧きたてる様な蝉声ひびく廊下めぐりかえりて独りの部屋へ  
アマビエとう疫病退散の妖怪図かかけて酷暑のり切る心

# 片岡邦子

あすなろ

・夢

## 片倉ひろみ 剪定

・湾

あら草は伸び伸び続け背の高さ畦道恋し遠き夕焼け  
目に浮かぶ広々とした田の空をスイスイ泳ぐ遠き日の軽鶴  
道の辺の桜の木々は剪定中無作にも耐え静かに泣いている  
淡淡と剪定する人は誰なのか腕を棄う桜の趣き  
わが庭の白き花々のドクダミは有り難迷惑な望まぬ草なり  
軒下にもドクダミの花楚楚と咲き刈りゆく根と根はどこまで続く  
雨続きお日さま恋しと仰ぐ空高き気温に気分もそぞろ

## 金尾秀美 添え書き

・宙

店先の布に親しみし若きころ買ひ置きの布木箱に眠る  
日々のミシンの音の心地よく気分は空越え若き日にかかる  
コロナ禍のマスク不足に手造りを布に再会し心は弾む  
雨の日の宅配便是息子より相も変わらぬ雨男なり  
息子より白桃届く添え書きにマスクは有るか会には行けぬ  
日常は便り少なき息子よりコロナ禍察じる添え書きの有り  
箱の中ふる里の香り満々と家族の笑顔もあふれ出でくる

カーテン揺れふわっと人が居なくなるように朝刊の訃報唐突  
兎も角も行かねばならぬ 携帯に魚のこと向き向きの狼狽  
朝の雨受けるものから色濃くしわが庭しずかに物思わしむ  
もともとは庭にありたる桧一樹深く根を張り天を指し立つ  
長雨に揺れあい触れつつ彈きあう庭木木氣儘勝手に生きて  
みどり濃く匂う庭木よ慈雨のなか土深く根を張り巡らそう  
これから組織束ねてゆく誰か真実望む 一本のあすなろ

## 師の戦争歌

佐久間 晟

### 『水原』

- ・児がために求めしならむ風車老いたる兵の吹きほけてゐる  
花もてる夏樹の上をああ「時」がじいんじいんと過ぎてゆく  
なり

- ・人より馬、馬より兵器さらにまた「精神」などひて破れし  
國あり

- ・大陸にどころかまはす踏み入りし日本人の短き足を恐怖す  
・雪の上にいでたる月が戦死者の靴の裏鉄を照らしはじめつ

- ・しら雪はあはれ葬りの火をつむる兵を殺せしは敵ならなく  
なり

### 『湾』

- ・冴えとほる断口をみれば古代より鋼は悲しく歴史に沁めり

### 『印度の門』

- ・M中隊全滅の橋見てたてばわれまた苦し渡河の思い出  
・生くることただ目的として生きつきぬ弾丸尽きし日を期どし

### 『湖の歌』

- ・原爆に生きのこりたるわが母にしたがう九段は桜死にせり  
・二十年八月十五日日本人みな飢えたれば河童も泣きぬ

### 『山薙にて』

- ・わがいのち屍に染みてゆくごとし天皇の兵をかくは死なしめ  
・御紋章金色にしてかがやけり部隊本部のひさしの中央  
・ミリタリズムのシンボルなりしかさもさもあれ緋の大御旗類  
に触りけらし

### 『橋 築』

### 『太陽のある風景』

- ・あかい山つじじなのか、死をおもふ、散兵の指揮に死にゆく  
日をおもふ
- ・死といふ字ひとつ書きたりすつきりと拭ききよめたる黒板の  
上に

香川進の生きものの歌 24 田土 成彦

・ばつたの類吸氣筒内部にすひこまれ重なりしまま死にゐた  
りけり

『構築』戦車より

バッタはしばしば人類史に大きな災害をもたらした。飛蝗と呼ばれるその大群は数百億の単位にまで膨れ上がるという。いまの今もその大群は東アフリカからインド、中国国境付近にまで迫っているらしい。この歌ではそんな規模のものではなく、たぶん草原を走った戦車が吸氣筒に吸い込んでしまったものだろう。戦車の内部構造は知らない。しかし厚い装甲と、大馬力のエンジン、キャタピラなど決して乗り心地のいい乗り物ではないさそうだ。また絶えずメンテナンスを要するもののようにこの様な吸氣筒内部にもチエックの目は届くのだろう。圧倒的な鉄の重みと此処ではか弱い生きものたちの対比に作者の目は向けられている。余計な感情を排して事実を述べるなかに、戦車という機構のすさまじさ、小動物のあわれさなど命を見つめる温かな視線が感じられる。

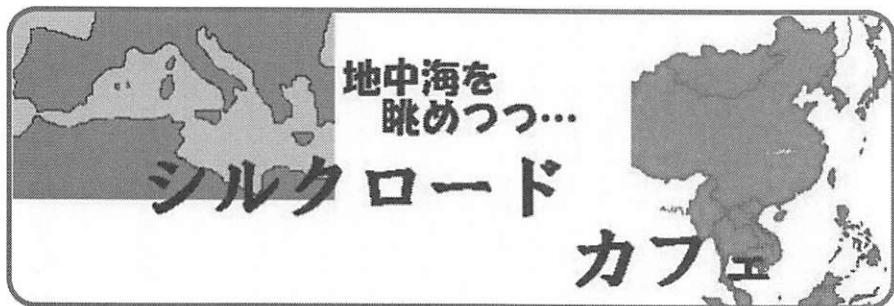
前田夕暮は昭和十八年に定型復帰を告げ、香川進もそれに従って定型になつた。その試みの端緒が歌集『構築』で、終戦すぐ編まれたが、刊行されることはないなかつた。当時の物資状勢を思うと無理なことだったのだろう。しかし、作者にとっては大きな転換点を画する記念碑的歌集でもあつたと思う。

なたねふぐ

雁のかなたにみゆる島に住む兄妹みな子ゆえにくるしむ  
わが姉のつくりし人形の腕ふとしかかるわれらを弟にもち  
黄が風のなかにあるよと言ひながら姉が屋上に咲かせるれんぎょう  
鰐のはらわたぬきいる姉の速なる手捌きのなかにわが母は生く  
星谷の俳号残しわが祖父は足立三郎流にみれば妾を持ちしならん  
乃木大将に乗馬の交換を強いられし妻の祖父の家のあたりくろき桜ばな  
掘らばかならず財のいでこん土蔵のうしろ掘らねば土の湿りてたかし  
金をもち老いゆくやわらかな声をきく姉はかこめる商品のなか  
植木鉢の土に卵の殻をならべ確かなる財はまもれり子のため  
われを育てしことに触れず自分が求めをひとに強いたる貯財も美し  
この夜たれも寝かさぬと書いて曰さめいし姉の大膽さわれはいたらず

みぞはぎ

手指ひがれるハンドルのうえの手がありぬ屍おがみをまたく燃しつくすため  
綿のほのお屍のひざを包みゆき炉をめぐるひととを照らしそめたり  
かばね燃すは人間のこと海ちかき稻花の萼は虫を飛ばせる  
ドストルに落つる零のあぶらにてまた燃えあがる離々のとぼしさ  
胸に置きし陶アマものがいま落つるおと燃えつきんかばねが白くなりゆく  
曳きだしより見てよく燃えてほろりと骨はつながつてゐる  
燃えそめしどきのけぞりし胸のあたりが並べる肋をしづかに見する  
いだかれて幼ながりにし胸にたつ乳にこの宵の綿の火およびき  
じいんじいん時はさまよいまだ熱き骨が腹切をきくのかしれない  
ふりかえる川ゆのぼりくる霧ありて骨はくるがねの台にのこしぬ  
たしかなる財をのこして姑死にぬ財はうまごを刺戟してくれよ



メールの投稿で作っていくページです。このQRコード（四角いバーコード）を携帯電話のカメラで読み取ると、携帯電話から投稿できます。専用メールアドレスは、silkcafe715@yahoo.co.jp です。お葉書でのご参加も大歓迎です。木村自宅へお送り下さいませ。



## 月の沙漠の 銀のくら



地中海七月号には、春の明るいお歌が多くありました。

C 棚 ～春を楽しむ～

豆ご飯・筍ご飯のほのやかな春につつまる身の幸を思う

石田 安子

幼き足踏ん張りて夫の植えしとう山の杉の樹天を突きたり

稻家 和子

ちょっととした挨拶会話することが気持ち和らげ穏やかにする

河西 聖子

雲早く動きながら雷のとどろきわたる日の春野に

久保 洋子

初めての在宅勤務日の前のほこり気になり一日掃除

古瀬由紀子

友よりのすずらんデージー藤袴まぶしき卯月に移し植えたり

首藤 悅子

あせれども患者日々にと増えてゆく憂うるだけで救えぬ生命

本田 順子

「静謐に」注意書きある図書室で静かにきみとの筆談続く

丸山 修

帰宅して留守番御免と謝れば亡夫は首ふりお帰りの笑み

みなみみちこ

桜舞うリハビリ通い子と二人寝められ歩みに光射し来る

山野みなみ

B 棚 ～春の喜び～

若きころ父の生家へ共に行き田植えしたるも草木茂りぬ

石井 徳子

曇り空爆音すれど機は見えず洗濯物を急ぎ取り込む

伊波千賀子

畦道の両側に咲く菜の花がそよ風にゆれうとうとうとり

岩月 宏彦

チューリップ百個植えたと汗ぬぐうり豊かな定年を生く

上原ケイ子

独り身で父母を送りし定年後 近所の友は伴侶に出会う

遠藤 義子

地面をたつぶり湿らす雨のあと春の雪降るまつすぐまつすぐ

大久保麗子

桃畠に一人たたずむ老農夫枝焼く炎をじつと見つめる 大寺 智子

カレールー一袋躊躇ひ戻る道免許証はまだ返されぬなり 片岡カヨ子

花ひらに留まる滴のその中に小さく映る桜花のいとし 熊谷とも子

ささやかな妻との卓に妹の送りくれた林檎が栄える 紺野 紘史

裏山より鶯の声しみきたり今年の春を独り占めする 酒井 純子

七つ八つ宿木養い大木は春の嵐に枝しなわせる 篠原 節子

ささやかな楽しみなれど手作りの糠漬作らん明日もいい日に

畦道に腰をかがめて芦を摘む夫の姿は童のことく 中江 京子

人を避けひたすら野辺に足運び新芽の香り胸いっぱいに 本郷萬次郎

ウイルスの脅威に繁き子の電話若き日夫が母にせじごと 三浦美代子

卯月の夜のスーパーバームーンの輝きよ幼な眠る窓にもそっと 村上 康子

インスタに投稿したるこの私いいねをもらひ気分が上がる もりやまきょうこ

春の雨水面に輪をかけて散りゆく花をそっと浮かしぬ 山田 英子

若葉マークの孫の運転後から見守る夫は良しと放てり よしとみゆうこ

## 珊瑚マスターの 包み焼き



次回のお題は、阿藤たつさんのお歌か

一題目は、「百尋」という数を象徴として使  
用している。二題目はクローズアップする  
ために「頭」と詠っている。それにより、  
牛のパワーや馬の駆ける姿の美しさが直接  
的に伝わる。

(A)

お題は「数」を詠み込むでした。

◇五十年経て再会の学友のすがた変はれど  
変はらぬ瞳 諸留 能興

・実感のこもったお歌ですね

◇火の国泥に埋もれし蔵の火酒五臓六腑  
に出会うことなく 阿藤たつる

・阿藤さんらしい大きなお歌です

◇幼子を風呂に入れしが飽きられて覚えたてなる拾を教えさす 柴田 紀子

牛の力の根源として腹のなかいっぱいに連なれる百尋がある 香川 進 『甲虫村落』

放たれし馬の一頭の風のなかに尾が遅れゆくなびきうつくし

## オリーブ集



白子友侑子

画面越し

・洛

在宅の解かるる時期は未だと娘は講義研修の予約さき迄個対応まちかに見える柔軟さ画面越しにも刺激ありと娘教材の教冊手許に溜まり来て米国便の復旧やいつ新しき遊びのひとつ増す様な画面越しなる景色増え来る水彩画料理やケーキも画面越しパソコン先生子らの身近に背景に緑を使うがルールとか深海色に鯨の跳ぬるさまざまなレッスンなべてパソコンの新たにウクレレ始めたたる子ら

福光敬子

赤の思ひ出

・伴

おもひでの赤を海馬にたづねみる あぶくぶくぶく をちこちのこと 母の手なるバフスリーブに赤帽子 きさはしにある 不揃ひな頃 寿生に「何が欲し」と父は訊く 赤ながくつを高島屋に貰ふ 下宿屋のをばさん 庭の赤き実を 土産にせよと 手折りてくれぬ 川沿ひの線路にゆれて ピラカンサスの赤き実ぼろぼろ 座席にこぼる 大和川に沿ひゆく関西本線より とろけるやうな 赤赤き 落暉 マト色ドレスののちの、おまま」とは 材木問屋の賑はひの町に

藤井満江

白色

・昂

一つ開き一つ萎えゆくカサブランカ生きとし生くるものなり我も 遣影のそばに活けたるカサブランカ故人の好みし白という色 朝なさな水切りしたる白き花花瓶に残る終りの一輪 真白きカサブランカ咲ききれば静かに花びら落としゆくなり 知らぬまに衰えていたる我が臭覚カサブランカの香りを知らず これぞ夏 仰けば青空白き雲油蟬は激しく鳴けり 少し休みまた鳴きはじむあぶら蟬朝の櫻に止まりたるまま

藤澤元子

忘れ形見

・鳩

コロナ禍にすくみし心解けゆくたどたどしかり初蟬の鳴き コーラスが生き甲斐の夫いま一度朗々と歌へ「菩提樹」を歌へ 失職者四万のひとり教へ子は訪ねて来たり梅雨あけの夕べ 熊本に降り続きしか三日間視界のきかぬこの土砂降りが 「父上の忘れ形見」といふ言葉人々に聞く老いたる叔母ゆ 長き梅雨あければそこに原爆忌原民喜よむ「水ヲ下サイ」 夜の道星が近づきすれちがふ涼しき色の青と緑の

藤野喜美子

音の扉

・ 湾

箕浦勤粘菌

・ 蔡

星くずのさまに咲きつぐ庭先の葉の花のゆれる囁き  
コロナ禍に重なる豪雨の災いに人らの声す生きねばならぬと  
ボスト迄の馴染みの道に転ぶわれ老いへのうつつを辿りいるのか  
こころして歩むべしとの独り言膝の痛みの哀しさ渗む  
補聴器も眼鏡もすでに身のひとつゆつたりと聴きゆ  
忘れたりつまずいたりの今日ひと日事無く過ぎゆく梅雨空の下  
木も草もかすかな風に喜ぶか梅雨の晴れ間の庭のまぶしさ

本多キミ子

多肉植物

・ 沖

ふと見つけしネットの多肉植物に心動きて動画を探す

多肉趣味深まりゆくか鉢植ゑの伸びたるを切り植ゑ替へて見る

巻貝の殻に多肉植物の寄せ植ゑしては悦に入りたり

よく見れば多肉と知りて雑草の中より抜きぬ万年草なり

不用なる湯のみの底に穴空くる術は田舎の兄より伝授

多肉植物の小さき寄せ植ゑ作りては友に近所に十五配りぬ

エケベリア舌噛みさうな名をメモし葉挿ししてみる初心者わは

松本多摩子

コロナ

・ 横

早世の父の墓參を欠かさない子らの帰省をコロナが奪う  
四連休子らとの旅行泡と消え花火見る夢コロナが奪う  
東京に子は暮せるという人の施設に入りしに未だ帰れず  
試食した避難食の中金平糖小さな甘さが元氣を呼ぶか  
きゅつきゅっと部活の子らの足音が亡夫が勤めし体育館より  
熱中症恐しと散歩にマスクくる化粧せず来て後悔のなか  
梅雨明けは間近か蝉の鳴く朝は湿気含みてまだ蒸し暑し

山桃の洞の湿りにぬつたりと粘菌の居て黄色鮮やぐ  
墓石の脇よりリコリス伸びあがり淡色の花姿姿に開きぬ  
切株の芯の真上を見上げれば空と遊べる桜の梢  
ショッキングピンクの札に半額の品と書かれて椰子の苗あり  
耳朶に南京豆の莢はさみ揺らせば六十年の歳月  
水っぽき母のカレーを大盛りの飯に浸ませてかつかつ食ひき  
アンソロジー岡井隆の死亡記事を岡井隆の貞に挿む

室家洋子

新しき夏へ

・ 洛

人気なき神苑見学マスクとり青き香りのやわらかきを吸う  
黄の蝶を葉うらに宿らす夏秋に滴る雨は白き玉なす

柄杓すべて片づけられし手水所参拝の作法も感染予防  
ほそ竹の小さき穴より出る清水掌に受け淨む疫病払い  
めずらしく人力車ゆく登大路車夫の脚・腰力漲る  
列島の大戻去れば猛暑日にマスクの下の息の熱かり  
人影のなき飛火野の木漏れ日に暑さ避けいる大鹿小鹿

山本孟

夕暮れ

・ 大

胸底の思ひ諧<sup>せんばう</sup>妾として吐きし妻われの知らざる苦しみやある  
今さらに妻の苦しみ訊かんとし遅かりしこと数知らずあり  
靈柩車ゆづくり発す梅雨の今日フロントガラスをワイパー拭ふ  
亡き妻に打ち明けられざることあれど柩と共に煙となせり  
優しかる耳鼻科の女医に妻の死を告ぐるや涙こみあげてきぬ  
亡き妻よあなたが常に口にせし本の片付け一段づつ始む  
夕暮れて独り食事の用意せん妻の立ちるし蛇口をひねる

## 養学登志子

うす墨の跡

・凌

うす墨の跡くやかに百六歳余白におよぶみなぎる力  
 白銀にのひやかなりし墨の色つらなりの跡かさねのあと  
 山を見るとぶ鳥をみる蝶をみる窓のひとつはわが世界かも  
 「君ねエ」と話しかけるひとの居た雲に手紙を出してみようか  
 わたくしが通ったばかりに折れし木の芽土に落ちたるかがやきを拾う  
 支え棒高きに大手ひろげし容実生のトマト雨に勢える  
 勢いたつ実生のトマトイとして追肥をなせばばっかり咲けり

## 若林美知恵

龍

・羊

惚けたる父に話さず決めしこと 母の延命措置はとらざる  
 一人子のわが決断を責むる声なけれど視線ときには銳し  
 延命はせずと決めしをひと言も責めぬうから視線が刺さる  
 堪かれたる水のふくれてなだれ落ちまたもふくれてなだれ落つ見ゆ  
 青き炎ほのかたばらせつつ顎上げる龍に色塗る 負けてはならず  
 君が思つてはいるほどわたしは強くない 死ぬるべからず父より先に  
 ただにただ泣かまほしさに教会の木製椅子に頬れたりし

## 泉穂子

十年

・森

## 伊東ミイ子

友は師

・福

スーパーのレジ打つ人のゴム手袋コロナは人の温もりを絶つ  
 透明なフェイスシールド越しに話すこの日常がとても冷たい  
 満月の月に願いことをする「普通の日々に戻して下さい」  
 三密を避けて始まる歌の会十人のマスク十人の元気  
 テーブルに一人の配置密を避け詠草二十首を熱く語れる  
 的確にときに厳しく教える友のおりたり師として仰ぐ  
 刃にはあらぬ熱意の教えあり生みたる歌にいのち脈打つ

## 色井静代

愉快

・埼

天下り左遷賞罰ありません定年退職妻とよろこぶ  
 描かれた女たちを見るフォームは生き生きとして心癒せり  
 無人駅なのに百花繚乱四季ごとに愛しき花花見るは楽しき  
 向日葵の零れ種芽生え咲き盛る朝に夕べに語り合ひせり  
 姉つちやんに嫁に行くなと泣いた日の少年老いて今に懐かし  
 隠し持つ核の脅威ほのめかし譲らぬ国の予感に怯ゆ  
 人類の滅亡と言はれた原爆の今なほ続く「黒い雨」訴訟

## 石澤利夫

黒い雨

・萬

会いたしのメールに応え即決で四人会いたり十年ぶりか  
 上野駅の改札口の外は兩人待ち顔はおおかた内に  
 上影のおぼろな友と待ち合わせ改札口に時計たしかむ  
 同窓の四人上野に行き逢いぬ令和二年の女正月  
 高御座の一般参觀は七十分待ち長蛇の列も友と並べば  
 金色の鳳凰いたく高御座弱視の友のガイドとなりて  
 雨あがる上野の山の清水堂舞台に立てば「円き月の松」

## 宇井秀雄

わが家雑誌

・う

朝の五時二階に家族起き出して床歩く犬も爪音さやか  
赤んぼを抱くがに息子は犬を抱き朝の散歩に今朝も出でゆく  
高一の女孫は白き細パンツ吾に見せるがに廊下過ぎゆく  
女の孫は引つ越し行くに思ひつきり手を振りよこす とつさに吾も  
荒れる梅雨そんななかにも初めての蜩の声健気に聞こゆ  
四季会の結果送付に「研修に」と校長らしき添へ文のあり  
十年前布袋竹なる節博の見つけし竹が今釣り竿

## 植月弘子

梅雨最中

・岡

コロナには特効薬なし籠りをれば庭の雑草が喜びてゐる

五ヶ月余過ぎても解ぬ足止めに小鳥さへ来ず今日も雨降る  
佳麗なるものみな命短くて枯れゆくスイトピーに杖つきて立つ  
外出禁止外来禁止このままにゆけば命が禁止されさう  
桜若葉もはや深まりぬ眼の底に縁集めて一人佇む

この春は見ざりし桜恋しくて秋にも咲けよ杖つきゆかむ  
友の呉れしスペティファイラムに花芽立ち肩の荷おりし思ひするなり

## 潮田千代

桧扇

・地

コンチキチン山鉢巡行無い夏も玄関彩る桧扇の花

軽やかな足音通る朝七時どこの誰かと知る事もなく

糸蜻蛉鳥揚羽に三筋蝶梅雨の晴れ間の来訪者たち

ハムばかり自分の皿に盛り付ける手伝う四歳冷やし中華に

再開の中山道を歩く旅感染予防万全にして

アカゲザル四十二歳のイソコ住む老猿ホームは冷暖房付き

濁流は橋越え堤防削り取る岸辺のアルバム絶えること無し

## 大島真清

朝の日

・大

クリストの一生思えば一筋の影青あおとこころに迫る  
冬に入りはやも年を越えたれば病み痛む身は首たつること  
晴々と四羽のカラスのよぎりゆく朝あけの空しばしみあぐる  
しんしんと明けゆく朝の日の光外気もろともわが身に霧らう  
馬一頭寄り来て乗ればはしけやし鎧は我を支えてきしむ  
ふかぶかと闇にうかびてねむるとき海はたいらぐやさしく囁きて  
とつとつと出で来し歌の数なせばつたなきものも我はうべなう

## 奥まさみ

花の御堂

・鳩

ひと片の骨とはいえど在りし日のあかしと訪いゆく雨ふる御堂  
ひとところ明るきあたり寄りゆけば天に真向かう睡蓮のはな

幽明の狭間にひらく睡蓮を包むは遙かきみがまなざし  
御堂への道すじに佇つ蓮は白この花道の果ては汝が界

ボヘミアングラスの彫りのからくさにワインゆれつわれを誘う  
夏の花約す微小の苔もち朝顔のつる梅雨空を這う

朝ごとに見るあじさいの藍の色ややに褪せつつ夏へと向かう

## 片山幸子

ふる里

・岡

街に住む姪にと干し來し戯草を逝きたる今は雑草と抜く

小川辺の落花をおもふ娑羅の大樹猪退け檻の邪魔と伐られぬ

一日に百花二百花咲きて散る娑羅の樹下に草刈りし日よ

「初茄子は大き容器を持ちて採れ」大籠に摘む小茄子を五つ  
照れば干し繕れば内に干梅の籠持て慌てる梅雨のあけくれ  
ディケアの最後の合唱「古里」の二番しみじみ涙に唄ふ

ふる里に父母は亡く友もみな逝けど瞑想の山河は清し

上 林 節 江 天 使

・ 湾

近 内 静 子 白き月

・ 新

子に強いて残るマスクを持たせやりわれは幾度も洗いて使う  
子の会社テレワーカ化となるはいつ交わすメールはコロナに増えゆく  
コロナ禍に予約貸出し、休館と図書館難民になりゆくわれか  
収束のみえぬ世界に老いつてもコロナ死だけは御免こうむる  
今頃?と「アベノマスク」の訝しさ庶民の暮らし御存じあるの  
天使かとおろがむばかりコロナにも医療スタッフの怯まぬ姿  
カキ、シュッ!と家飲みビールをひとり開け我慢の二文字を泡とともに飲む

北 山 雪 男 残日抄

・ 伊

島 根 美 智 子 休校中

・ 茨

語り部のY氏偲ぶ夜、戦争を憎む責任苦く嘔み締め  
戦争は知らぬが戦後なら多少 例へばオンリーさんといふ駆  
折々にジープの停る家ありて好奇の足が迂回して過ぐ  
戦争の置き土産とや二階には家屋疊開の他家族がるき  
「家屋疊開」「一錢五厘」置き去りにされて悶死の戦争用語  
進駐軍将校宿舎の星条旗、日の丸よそに日々見上げたり  
幼児期はほんの昨日の夢の如耳に覚えの「鐘の鳴る丘」

小 原 香 里 散 る

・ 昇

新 明 彰 子 負けるもんか

・ 萬

軽井と山道を登る青年の控えめな笑み豊かあがるこむら  
まっすぐに立った卵の殻が割れ出てくるようなタマゴタケの紅  
傘をさしウオーキングする人の仲間にはいる 距離みじかめに  
合歛木の散り落ちた花のあたらしい砂利道を行く駐車場まで  
雨が止みバケツに溜った雨水を朝顔にやる 今朝ふたつ咲く  
木の下に停めた車のポンネット戻れば花がしろく散って  
競うように大声で啼く野の鳥 思わず探す声の方角

わが場所といわんばかりにコロナ禍の校庭に雉の声甲高し  
しばらくを見童の声の響かねば広き校庭無人島のこと  
無機質の白き箱なる建物が児童の声に学校となる  
梅雨晴れを黄蝶白蝶とぶひと日網戸張り替え三枚済ます  
妹のEM農法に収穫のまゝ赤な完熟トマトが届く  
猿引に紐を引かれて竹馬も段飛びもする子猿いとおし  
眠りより覚めそうもなし少年が長き足伸ぶ電車の終点

おのずから種の落ち咲く朝顔は草にからまりつゆもちて咲く  
二階の窓に見おろす裏の烟には白き蝶まういくひきも舞う  
老いてなお健やかならんと散歩する雨のあがりて白き月出る  
草わけて見ればかぼちゃの三つ四つ実をつけて黄色の花を咲かせる  
茄子胡瓜さげ実のつくわが畑に今日もしとと雨の降りつぐ  
生きているいかは逝くと思いつつ墓の草刈る今日は人足  
何事もしつかりしろと気合かけ一人暮らしの日々は過ぎゆく

高橋 啓子 タヌキ

・昂

声あらく石を投げる私はやせたタヌキに見つめられている  
人間を避けて生き抜く術はない石を投げても逃げないタヌキ  
うすくまでも逃げる力のないタヌキ突けばゆっくり目をあけている  
力なくなめるように手水鉢の水飲むタヌキ最後の姿  
横たわり固まつたまま動かない小さいタヌキの命が消えた  
新聞紙にこわごわ包みしずしずと袋に納めるタヌキの死骸  
集積所の片隅に置く一袋今日木曜は燃えるゴミの日

畠田 鈴子

庭の花

・大

二度三度聞きし話と思いつつその都度笑う皆のやさしさ  
気象予報「ところによりて」という雨を期待はせずに花に水を遣る  
アナウンサーの静かな語りに眼は冴えてしみじみと聞く深夜放送  
わが家に手紙来るかと思いしに郵便バイクは素通りをせり  
ベン立てに小さき蜘蛛が這いのぼる家に住まうはわれと汝のみ  
何處へとも告げず必ず出てゆく夫を見ている明け方の夢  
あふれくる言葉の中よりさよならを伝えんとして黒き眼着る

長畑 美津子

夕つ陽

・風

七夕の笹の葉 葉裏を白く見せ明日も続くかひそけ暮らし  
いくばくの余生あらんと計りいる別ればかりのひと年過ぎて  
行く道の信号すべて赤になり帰宅拒否するごとき夕暮れ  
歳月を重ねて得たるもの探す老いのわびしさひきすりながら  
庭先に熟れしと友の持ちくれし夏柑両手に余る梅雨晴れ  
いくたびか母と見入りし夕つ陽よ板橋わたり暮に語でる  
越えて来し山川言わず黙黙と明日の米とぐ指先まるき

仲西正子 夏草

・沖

小石にて小さく囁みし煙なれどくつき映すグーグルに臆す  
もうすでに位置と状況は知られてかバナナの葉影に空を見上げる  
初咲きのハイビスカスはコロナ禍にこもれる朝に朱の色灯す  
わが顔の大きさをして朱の色のハイビスカスの花の重たげ  
夏草の伸び放題のこの空地ちいさな虫の飛び込むところ  
夏草の青踏みてたつおおらかにマスク外して息深く吸う  
しばらくは夏草のびゆくままにせむ世はコロナ禍のただならぬ時

中村はるみ

長雨

・昂

道端にあつけらかんとはみだす南瓜の花は雌花とみたり  
「島娘」と名のつく苦瓜長雨に娘かかりを知らず朽ちゆく  
栗の穂みどりの光ひろうようつまめば拒絕の痛みはやもつ  
夏菊をすみにおいやり野放図に青紫鯉は育つこの長雨に  
梅雨明けの小庭わらべの宝箱蝉や蜥蜴わらわら出で来  
脳死と心臓停止 死の形 健康保険証の裏に見ており  
整然と自由をひとは渡り行くテレビの中のあの交差点

西堤啓子

じゃばら

・天

あの夏の高原の日差し後れ毛にたわむれた風キユーブに宿す  
残しおく余白を君は埋めつくし過去へ押しやるふり向きもせず  
帰ることかなわず果てた仲麻呂をオンラインに語る縮んだ地球  
再びのコロナ禍の波立ち上がる炭酸水に和歌山じゃばら  
朝の菜園に浮かぶ月のとまるき花照る英名OKRA  
もぐりこむ夜の底なる深海魚 光はいつも悲しみに満つ  
否定されまた否定され裏返す胸の痛みの嗤笑となる



## 聴覚から感じる刺激

久保田 歩

多くの芸術は目で楽しむものが多いと思

います。それは、人間が五感から情報を得るうちの八十七%は視覚から、といわれていることからもわかります。それに対して聴覚は七%。そのたった七%に働きかける芸術、音楽。とりわけ少人数による演奏から、私は刺激を受けるものがあります。

私が四歳から習っていたエレクトーンは、手足を使って一人で完結する楽器でした。軽音楽を始めた頃は自分の技量を磨けばいいだらうと思っていましたが、メンバーと合わせるとなぜか練習どおりにできなかつたり、合わなかつたりしていました。ある時、いろいろなミュージシャンとお話をさせていただく機会に恵まれ、私の中での「良い音楽」を奏でている人は思いやりが

あり、目線と同じ位置にしてくれる、人間的にも素敵な方が多いなと感じました。もともと私は協調性が先天的にはないと自覺しています。一方で、仕事でも団体競技でも、協調性は大きな力を發揮してくれる素晴らしいものだと理解しています。

その協調性を生み出すのが、仲間への配慮や尊敬の念であり、さらにはそれが技術を向上させるために猛特訓したり、また、音楽以外からも自分のためになるものを吸収しようとするのだと、軽音楽を通して気付きました。

私にとっての良い音楽とは、具体的に、演奏者全員のタイミング（息）が合っていること、自分の技術を見せつけるのはなく、全体で良い音楽を奏でようとする、そして、周りとの調和を保ちながらも、自分的力量を最大限に出していることです。

結果、自分でも良い音楽を奏でるためには、仲間を信じ、曲中に仲間に委ねる時間帯があつてもよいと思えるようになつたり、曲の初めから最後まで全力にしなくても、そこには、言わなくても伝えられる「敬う気持ち」が醸し出されていて、それを感じることに鳥肌が立っています。

遊覧船の熱筆依頼をいただいたとき、「好きな音楽について丁度考えていたところでしたが、明確に自分の考え方を文章にするところまでは至っておりませんでした。大変良い機会をいただき、また一つ刺激を受けた次第です。感謝申し上げます。

互いを尊重、尊敬する心を可視化してくれる人。よくよく考えれば、音楽から刺激をもらうというよりかは、そういう音楽を奏でられる人から刺激をもらっているのだと、この原稿を書いてみてわかりました。

## 場に問い合わせうちに問う

檜垣美保子

すがすがしい文章に出会った。「短歌研究」二〇二〇年八月号の「短歌時評 歌と名とだれか」佐佐木定綱（心の花）。時評や連載もなく、表紙に「一冊全部、短歌作品です」とある「短歌研究」五月号を端緒にしている。段落を追ってみると、世界の見え方である。「人は自分の記憶心象にはよくわからない。」「もう一つ、価値観を提示するということは互いの良い悪いという価値基準を明確にすることだ。」「これは押し付け合つものではない。互いの共通了解を見つけ、短歌の本質を探る行為だ。」「それらが、この五月号からは排除されていれる。延々と読みの場だけが広がっている。読者はひとりひとり足をそこに踏み入れることになる。」

すがすがしさの要因は、個から出発してフラットな感覚で感じ、自身のかんじたところからの発信であるところにある。

（ぼくは「代々続く歌人の家系」という張り紙をまとって生まれ）「そんなヒエラルキーべイベーだから、特権にも気づかなかつた。輪のなかにいる人間はそこが特別な場所だとわからない。」と。ここにも、

（ぱくは「代々続く歌人の家系」という

るうか。

（こんなヒエラルキーは、本当に必要だ

（もう一つは掲載順だ。この号は「あいうえお順」だった。）と。つづきに、千葉聰の「詩客」誌上の短歌時評を引用している。「読み」とは批評である。つまり互いの価値観であり、世界の見え方である。

短歌総合誌では、「あきらかなヒエラルキーが見られる。30首ほどの、歌数の多い大連作は、ベテランや各賞受賞歌人が書く。10首より少し多くくらいの中連作は、中堅歌人が書く。7、8首の小連作は、新人さんが書く。（中略）

総合誌から原稿を依頼されると、もちろん嬉しい。でも、作品が載るたび「あなたは歌人、ピラミッドのここらへんにいるんですよ」と教えられる。同時に、他の歌人の位置づけも学習することになる。こんなヒエラルキーは、本当に必要だ

（特集だけで一九六〇首の歌の場をとぼとぼ歩きながら、幾度となく答が出て、幾度となくわからなくなつた問題をまた自分に問わなければならぬ。「良い歌とはなんなのか。」）と結ばれる。

（人間が生きる、また生きてゆくという中心命題から乖離してはならない）という香川進の言葉をかみしめる時、苦惱の中に問い合わせをくり返す、その道程にしか、良い歌は生まれない、良い歌は感じられないということか。

次に、（他にもないものがある。様々な括りだ。例年「女性歌人作品集」「男性歌人作品集」としてそれぞれ特集していたものを、まとめて「280歌人新作作品集」としたのだ。）（歌人や作品の分け方として、性別は関係ない。その通りだ。トランスだらうがシスだらうが、どうでもいい。）

（もう一つは掲載順だ。この号は「あいうえお順」だった。）と。つづきに、千葉聰の「詩客」誌上の短歌時評を引用している。「読み」とは批評である。つまり互いの価値観であり、世界の見え方である。

（もう一つは掲載順だ。この号は「あいうえお順」だった。）と。つづきに、千葉聰の「詩客」誌上の短歌時評を引用している。「読み」とは批評である。つまり互いの価値観であり、世界の見え方である。

# 作品 B (ハ行)

阿藤たつる

ブーフーー

・伊

キッチンの洗いかごからヌッと出て何を指すのか菜箸一本  
鏡手にひげ剃りいると見えたるはタブレット操るユーザーの老い  
ブーフーー三者三様の生き方をリスク・マネジメントと呼びたくはない  
今日という時間のつづきが明日と知れ夢物語を紡ぐむなし  
眺めきしままの思想が色褪せるその一瞬に書き込みも消ゆ

安田明子 越中富山

・大

石垣は四百年を苦むせり越中・加賀の諍ひを経て

春くればひたひた湾に押し来る灯産卵なりとホタルイカ群る  
ひとり居の夕餉の暗にハマチあり否「ふくらき」と此の地は呼べり  
「ザ・昭和」の匂ふアーチの商店街電柱の案内ずらり続けり

創業は明治三十年の「月世界」昭和天皇の御好みとする

松谷公汪

原色の吉野

・鳩

原色の吉野の山の青々とはきはきとあり雲の峰々

歌枕「吉野逍遙」ようやくに景はなんとか風土言い得ず

生き方のひながた見せし母逝けり悔いなき一世か九十六年は

またまねぎを振り分け吊るす軒下に手渡しくるる母は在さず  
鶴・薔薇かかる読みする美しき歌いつか詠まむと幾年の過ぐ

大寺智子

除染土

・新

我が庭に置かれていたる除染土の九年を経て運ばれて行く

縮緬で作りしあじさいのかたわらに雨に濡れたる紫陽花かざる

良き出会い息子にあれよ記したる短冊七夕の筆に吊しう

若き夫婦の新築の家の庭先に白きアジサイ大輪に咲く  
厨からブシュッとビールを開ける音野菜炒めを作りいる夫

藤田しん子 滴り

・大

梅雨晴れの楠の神木滴りをてのひらに受け子の治療祈りぬ  
雨あがり楠の大樹のそばに立つわれを包みて木の香苔の香

街中に鳥の集える水田ありエナガの六羽今飛び立ちぬ

早苗田を鴨去りいまは鷺が来て六月の朝青き風吹く  
捕食せしオタマジャクシが喉つたう青鷺の眼の光するどし

久保田歩

淨土平

・湾

底見える鎌沼の水の透明度「沼」の定義を調べ直しぬ  
水面は照らされ美しさを放つなり美しきものは太陽なのか  
「憩閉めて運転を」との案内に火山ガスの恐ろしさを改めて知る  
緩やかなカーブの連続に一安心も悪路の山道に会話は少なく  
ゴール前にワタスゲなびく湿地帯疲れた体に活力注ぐ

寶藏八重子

光り

・鳩

天上より覗く世界に筆の葉のゆれて願いはコロナ終息

雨足はタップを踏んで山なみはふり返る間に白布をかむる

雨音は銅鑼の怒濤に山なみは変面をせり一人見る夕

雨あがり稜線の浮く里山は行ったことのないアンデスの村  
寝ぼすけの孫は障害児「起きようね」に小さきせなか朝エビになる

## 本郷萬次郎

ひたすらに

・羊

このところのカラスの寝床山になしエサを探してまちを飛び交うこのじろのジジイに見える男女の様認知の力もはやなかりけりひたすらに毎日歩きけりマスクかけずにウイルスにかゝコロナ禍にカタカナ増えてコンチクショーノックダウンだウイズアフターもウイルスの急迫不正の侵略に撃ち克つ手立て慈法なりけり

## 浜名結衣

ソプラノ

・宙

休校中朝から晩までひたすらに増える工作おうちアトリエ肉じゃがはうちのか一番美味しいね娘の言葉にふふんと胸張るいい記録出したと知つてほっとする陰での努力報われたのかな見送りに出ると同時に急発進行つてらっしゃい今日こそ遅刻か声変わりいつの間にしたつ数年前の動画の声のソプラノ思い出す

平尾はるみ 健ぶ 春

## 松井千明

梅雨晴れ

・地

梅雨晴れの一時の光窓に映え朝の紅茶の一杯旨い梅雨冷えの合間の晴れのひと時に肌汗ばみて真夏と覚ゆ東京の職場に戻る孫駅へ送る車の音の寂しきひそとして真夜の冷気が枕辺の暑さはらいて夢路へ誘う思い出は齡とする程に深まりて未来描けぬ今を慰む

## 松平正守

文月

・洛

たがわぬと契り合いの星々も今年はあえぬ嗚呼涙雨今年なき祇園祭の笛の音は商店街の放送にきくあしき人ひとりもおらぬ文七の歌舞伎映像とくとみいれり歌会も中止となりNHK短歌みつめてひとり歌会お稽古もお茶会もなく夏来る雨はまにまに薄茶をする

## 松野正子

ヒガラ

・地

玄関の引き戸開ければ隣より朝風に乗りいちじくの香がチチチッヂチチチッヂのさえずりに庭を見やればヒガラが梅に梅の木に止まって虫を食べるのか黒たすき持つヒガラを見つめ庭に来る鳥は何種かいるけれど初顔かわいい小さなヒガラ鳴き出した蝉の声聞き励まされ一週間の命を想う

## 松本久子

年毎の夏

・大

通学のバス追いかける子のありて赤きランドセル朝日にゆれるお日さまの温みふくめる布団敷くほこほこと待つ子らのお泊まり若葉乗せるねんどのランチおさな子のこっこ遊びのお客になりぬ葉の陰に見え隠れする初なりのえんどうのあり今日は吉日黄の薔薇に心のこして園を去るあまき香りのつきくる思いす

伏見富美恵

ランドセル

・風

梅雨明けの物憂い午後のひと時は義務をことわり蝉と午睡を会合もいで湯の宿と様変わり僧侶も尼僧も浴衣にかわる炎天の墓参の愈し瀬戸内の緑の小島波にセーリング暗闇に動けば止まる集く音秋を知らせる虫の名知らず前庭でブール遊びの夏休み子供の笑う声愛らしき

## 三浦美代子

蒲の穂

・銚

もりやまさよう

インスタ友

・そ

親鸞の「一隅を照らせ」を思い見て公園掃除に行く日もありぬ  
明日葉を食べる青虫見失う美しき姿を見せにきたれよ  
霧の中にクレーン動かす男らのあ・うんの呼吸の確かな声

「食べきぬ魚は海に帰して」と約束させる釣り船船長  
野にあらば見過こす蒲の穂君の手に季を知らせて今年もいたぐ

## 茂木静子

訪問入浴介護

・埼

諸留能興

いのち

・洛

木曜日夫の入浴介護の日着替えを準備樂しみに待つ

午前十時介護車到着準備開始今日もお天気夫は笑顔で  
風呂桶を部屋に運び取り付ける明るい話題で快く入浴

ありがたく感謝感謝で入浴し夫は気持ち良く髪を整える

はつ夏の風の入り来てほのぼのと湯上がりのひととき夫はのんびり

## 森田孝子

五色沼

・今

こともなく一日過ぎたる夕暮れは写経の筆の滑らかにして  
手に取れば思いめぐりて拂らぬ夫の遺品の整理始むれど

七回忌を去年済ませたる夫宛に役所より届くボランティアの依頼

五色沼の水の緑にとけゆきて胸の澱みは澄み渡りたる

どの顔も笑みて水辺に歩を止めぬ蓮華升麻の咲きあふれたり

## 森田由美

バラ園にて

・昂

秋雨前線

・宙

いっしんにすすめに米粒与える友ばらのかおりにつつまれながら  
木の陰にすすめの親子とあそぶ朝それ異なる顔をみつめる

ふとみると小さな家族があつまりて茶色の眼こぢらをみつめ  
うつくしき茶色の羽毛のグラデーションはねふるわせてすすめの一羽

遠き地に育てしバラと亡き夫の笑顔をかさね歩く庭園

文月にメッセージ届くあさがらす夢の世界へ招き入れる様  
インスタの直球の愛とまどいて歳の差知りし瞳然のわたし  
文明の進歩の早さびっくりねまだ見ぬ人と話している  
インスタのメッセージ聞き読みだすも愛の魔球にねぼけ・まなこ  
外国人なればこそ照れもなくインスタ友へ愛のメッセージ

天上に長く連なる筋雲の夕日に映ゆる白銀の棒

日中の熱暑に萎えしゴーヤに夕べの打水葉もよみがへる  
修羅道の七十余年けさもまた賜るいのち

過ぎ去りし半世紀ああ夢のこと君とあゆみしいのちのふしき  
さむ風に耐へて五月の刈り取りに備へて膨らむ茶畠新芽

山口真樹子

トンボ

・宙

立派だな思つて近づいた向日葵ニセモノだった時のモヤモヤ  
青空の下で死にたかったらう改札くぐった先にいたトンボ

夏野菜もいでもすぐに鈴なりの君たちの活力をください

うつ伏せて足を広げて寝る様がカエルのようだと子を見て思う

真夜中の雨の残り香たつ朝の空の青さよ雲の白さよ

## 山口桃子

秋雨前線

・宙

雨の日と暑い夏日が交互にて二週間でも露草はびこる  
背丈ほど伸びにのびた夏草を途方に暮れつつ刈り取る朝に

現実は理想の壁を潰しゆく灼熱の夏萎えゆく気力  
暑すぎて農作業は控えます野菜はスーパー案外うまし

雑草の中に見つける曲げ胡瓜糠づけにして幸せな味

## 山田珠美 閉店

・春

大阪の名物「づばらや」閉店す淋しくなりぬコロナの影響  
差し芽より育てし紫陽花亡夫に見てほしくて二輪供える  
何時も行くお好み焼屋今月でコロナ影響閉店になる  
朝早く消防車のサイレンで目が覚めて ビックリ近所の家が火事だ  
消防車五台と救急車と担架ひとり怪我人 小火で良かった

山田英子 光うけて

・洛

わがほほをなでて通れる緑いろの風にゆるる葉何をささやく  
苦しみや悲しみのあと生まるるや光をうけて新たな夢の  
吾が思い清らかならん今日の日の美しきものうつくしと見て  
今日の日を良き日と定め生くる身に迷いおこらば神にあずけん  
真っ直ぐに光に向かいのび生くる草木いとおし吾も生きたし

山之内香代美 遅刻

・羊

桔梗咲く紙風船のふくらみに似せて蕾のはじけてひらく  
朝顔のふじ色に咲く小一の自宅待機に担任より受く  
幼虫を飼い育つるなりかぶと虫孫は満面とくい顔見す  
かぶと虫の戦い破れ足折れる自然へ返すと孫は櫻へ  
小一の遅刻の知らせ担任より孫に質せば雨やどりとう

山野ひかり 父母

・沖

父母と妹家族寄り飲めば酒も進みてガヤガヤうれし  
夏休みコロナ収束見えぬまま子らとゴーツー行ければいいが  
パパからのバス受け走るちょこちょこと息子我れ切りドリブル裁き  
散り散りにゲームセンター小銭持ち子ら群れ遊ぶ一時間  
テレビから曲流れるや踊り出す子らゆったりのわくわく休み

## やまもとしづ 泥の海

・鹿

・鹿

さみしさはただに黙って聴くがよい眼見つめてうなずきながら  
泥の海なる屋内を老いし人夜更けてもなお片づけ作業  
わざかでも軽き心でありたいとお笑い番組観れど悲しも  
舗装する道路に響く若き声ヘルメットつけきびび動く  
潮騒のメロディ聴けば遠のきし記憶やわらにたどり寄せくくる

吉池ケサヨ 夕菅

・信

夕菅に重ね見る君の面影しなやかに揺れ爽やかに去りし  
紫陽花を盛花に活ける独り部屋紫の明かり梅雨明け待てり  
若見えの姫八十歳マスクして畠一面に芝桜咲かす  
川端の露もてる木の緑濃くマスクを外す吾を慰む  
手を休め休め刈り取る土手の草暑さにこもるヨモギの匂いす

よしとみゆうこ

サンチャゴ巡礼

・そ

五月雨の最中辣斐捨える五キロの量無心になりて  
温暖化故の大雨山津波止まず大和の台地は海へ  
梅雨去りて学校の森から蟬の音弱いながら聞こえ安堵す  
旅をする人等は我を見詰めてるサンチャゴ巡礼放映に見入る  
我が年を顧みずしてサンチャゴへ歩きたき希望ひそかに湧きぬ

脇田智子 月下美人

・鳩

賜わりし月下美人に蕾ひとつ咲くを待ちわぶコロナの日々に  
待ちに待つ月下美人は開花せり今宵かぎりと氣高くま白に  
翌朝に月下美人は萎れたり来夏よろしく枯らさぬよう  
戴きし方に開花を報告す水やり日当たり極意教わる  
真夜中に突然目ざめ吐き気する熱中症か草引き悔やむ

渡辺英子 さくら貝

・羊

いただきしうす紅色のさくら貝友の心の温とさのいり  
さくら貝手に載せし時吾の心融けゆくやうに穏しくなりぬ  
蓋とちてまた明日見むさくら貝今夜の夢は安げくあらむ  
さくら貝みればありし日おもはるる姉と歌ひし「桜貝のうた」  
うす紅の光淡かりさくら貝あの世にまでも持ちてゆかばや

渡辺真吾 クラスター

・眺

遠雷で閃光走る真夜中に犬の遠吠え空に哀しく  
長雨に空を仰いで嘆き節船宿の主のひげづら見つめ

軒下に巣を作りたるつばめを見て天敵鳥が黒い目きらり  
友からの野外パーティ誘いうけクラスターの影戸惑う我が

目を覆う今年も豪雨の洗礼で我大好きな湯布院こわれ

浅川広子

ティータイム

・凌

午後三時ティータイムと決めひとときの悲なき事小さく喜ぶ

物干しの竿にたまりて雨しづく玉の光りて家居に見つむ  
人群れをさけて手酌の晚酌にわれ相伴の冷し酒ぐむ

日本列島またも牙むく暴れ川地域の苦難に添へぬ空さず  
常日頃「ちゃん」で呼ばれる幼きは車中で叫ぶ「あつ富士ちゃんだ」

浅霧美佐子

面会禁止

・風

五日後に入院手術うける夫妻類の中に面会禁止と

色あせた木綿のTシャツ着心地の良さでウエスに出来ずまた着る  
裏庭に今年初啼き蝉のこえ梅雨の晴れ間に楽しくうたえ

ルリ色の南国からの渡り鳥村の人らは巣箱をかける  
背にひなを乗せて育むカイツブリ広い葦原渡り鳥の群れ

芦田房子 梅雨

・岡

長き梅雨一休みなり渾身の力をためて冬布団干す

二メートルの距離あけてレジに並び立つマスクマスクの名無しの極兵衛  
長雨の止みてふすふすと臭いだつ刈り草の山にふる里思う

「柏餅が匂う」と言いし亡き夫の謎かけ上手を懷いて供う  
ランニングの高校生群行きしばらくは人影もなし夕暮の橋

芦田美代子 豆腐

・風

九州を襲いし線状降水帯 深夜に来たり屋根打つひびき

ラッキョウを漬けるに夢中種とるを忘れて鳥取根付を求む

温暖化災害多発アラのゴミ便利すぎるがみなもとなるや  
便利さを捨てねばラゴミ無くならぬむかし豆腐は鍋もて買ひ出

綾央子 ポキボキ

・夢

ポキボキと強く磨くと音のする歯ブラシ使い軽くかるくと  
経済か人の命か悩ましき望みは一つコロナ収束

足からの冷えで腰痛暑くても靴下ぬげぬわたしは姫  
バンクシーの地下鉄の絵が落書きと消されてしまう堅いイギリス

馬逃げた後に廐をしめること政府の今の方針疎か

石井徳子 子猿たち

・渚

早朝の出会い頭に門柱の猿に睨まれ後ずさりせり

夏みかんの枝をたわわに子猿らは何んわれを一齊に見つ  
トランボリン思わずかにも子猿らはビニールハウスの屋根を往き来す

梅雨をおし明けゆく窓に猪の二匹休耕田の土手よぎりゆく  
気任せに盆棚つくりご先祖を迎えし夕べの仏壇明るし

伊東美智子

鈴虫

・春

今井マチ子

梅雨明け

・習

叩くがに降る雨音の続く夜被災地のあすに心安からず  
漸くにわが季をつける蝉の声長雨つづくも近くなり・夏  
コロナ禍の人だまりの中われてもいて夫と二人の夕餉あがなう  
終戦の扱う番組多くなりめぐる思いの歳月を経し  
朝あけの湿り帯びたる生垣に「鉢虫あげます」貼り紙をみる

糸島美津子

万華鏡

・風

岩月宏彦

大山祇

・宙

ふるさとの小学校の校庭に集いたる友わずか八人  
まご自慢こども自慢をする人が中心となる同窓会は  
うるおいの欠けたる心抱く日に孫のたよりは万華鏡となる  
田畠をひとりで守りし姉にしてわれは知らざりいくたの苦労を  
背の丸き卒寿の姉のつくりたるピーマンの青つやつやとして

稻家和子

「三密」

・岡

ただ一人春風のなか講義する学生の顔はパソコンの中  
両側に青田がそよぐ睡道はマスクはすしてのんびり歩く  
七夕に今年も咲ける大賀はす二千年前の香りをはなち  
楠の木の香りのなかを参拝す大山祇がいます社殿へ  
綿文に生まれし楠が生き抜いた証を幹の傷に刻みて

上原ケイ子

梅雨

・霧

「三密」もこころ緩みて今日もまたマスク忘れて合歛の下に立つ  
スーパーにレジ待つ距離の一メートルようやく慣れて整然と立つ  
咳くしゃみ一つをすれば周囲より視線刺し来る家族までもが  
コロナ禍に籠れるうちに季は過ぎ同窓会の服をしまいぬ  
遺影には笑顔がよしと終活の講師が言えば笑みで頷く

伊波千賀子

若き日

・沖

若き日に使いし本にメモのあり励みし時が映像となる  
懸命にテスト勉強部屋籠もり名古屋の町の呼吸思い出す  
出会いたる人の思い出わが内のアルバム開けば胸の高まる  
春の日に村を歩けば誰もいぬ猫さえおらぬわが家の前  
土曜日の清掃カーのスピーカーいつものように安心届く

誕生日娘より届きしプレゼント“長生きしてね”の手紙をそへて  
梶子の匂へるタベ揚羽蝶梅雨晴れの空消えて行きたり  
レジ袋有料となりマイバッグ持參して買ふ品吟味する  
また手紙書くねの友との約束は一年過ぎて夏巡り来る  
老い二人料理番組参考に彩とりどりの新しい味

## 遠藤義子

朝顔

・信

朝顔はまだ二十センチ幼いがグリーンカーテン我は待ちおり  
脚立にのり朝顔の網括げたり上背ありし夫を思いぬ  
朝顔に網はる時はてこするも去年を思ひてびんと張りたり  
梅雨晴れにまつ白な花の夏椿「一日花」を手をとめて見る  
手際よくスコップ使う娘婿掘り上げた芋を笑みて集める

## 大久保麗子

草津の湯宿

・森

松林抜けていやくにしつとりと雨なかこもる春蟬のこゑ  
山なかの湯宿たどればむらさきのホタルブクロは雨にあざやか  
坂道を下るに鼻腔をくすぐりて硫黄の匂ひ噴きあふれたり  
照れ顔のサッカーワ子の湯もみショーラン板さばく飛沫ひくくし  
青黒く溜まる湯なか生き物あらぬその名おどろし鬼の茶釜は

## 大熊一恵

芙蓉

・岡

雑こもる叢を発ち草刈機の刃に向かふ雉子の父鳥  
書斎より夫降り立ちし一二三石に杉下駄を置く在りし日のまま  
教職を退きて夜業のなき机赤鉛筆の減らず転がる  
あの世にもコロナ満ちむと妻の名を挿せるマスクを棺に置きぬ  
悔い多き授業を重ね帰り来し庭の醉芙蓉醉はず揺れをり

## おおたみどり

“お元気ですか？”

・そ

モンキチヨウ雨上がる庭ソコソコと飛び回り花を咲かすように  
友よりの“リモート中です！お元気？”と書かれた文字に励まされる日  
黒糖を含みしあとに広がるは“奄美の青い空青い海”

お便りをいただき“私も”と筆を取りしたためる“お元気ですか？”  
退院し「家に帰る」と口にする父に寄り添い相撲観戦

## 大槻泰子

コロナウイルス

・洛

コロナ禍の外出規制二ヶ月空氣・水澄むとムンバイ・カブリ  
マスクしてふた月ぶりの茶の集いまちがいなすも笑いあいたり  
ウイルスは入り口付近に多しとかバスの座席は奥よりうまる  
バス電車あけて座れるとのとなり誰も来ないでと心に思う

水害と無縁の地に住む幸運と 続く梅雨空七月半ば

## 岡野恵俊

雨やどり

・洛

門前に雨やどりする老人に傘持ち行きしばし語らう  
コロナ禍でさわぐ地球の人々を静かに守る半分の月  
ようやくにコロナウイルスの禁解けてなさねばならぬこと多くあり  
大小のゴキブリ走る寺厨ゴキブリホイホイさせて遊べり  
野良猫の自由に遊ぶ床の下遠くで子猫の声も聞こえ来

## 岡本小由里

螢火

・岡

満月のおぼろにかすめる岩倉の川辺に立ちて見るは螢火  
おぼろなる満月の宵岩倉の流れに映る螢火ひとつ  
梅雨の朝見上げる空に白鷺の北に向いて群がりて飛ぶ  
梅雨の朝みんな元気に集まりて久方ぶりのラジオ体操  
会える日のはやからんこと祈りつつ雨音きこゆる窓辺に憩う

## 岡本三枝子

想定外

・岡

想定外とは斯かるを言うか長雨に崩れし庭先に呆然と立つ  
牽牛と織女が会うとう七夕に無情な豪雨に一日暗澹  
沢山の野菜を貰う隣り家へ「寺から里」と胡瓜持ち行く  
大き蛇ゆるゆる這いし烟には熟れしトマトを探りに行かれず  
「ありがとうございます」と聲会えぬ孫らとトマトで漬かる

## 小川美智子

母の名

・橋

津軽の農家に五人姉妹の次女に生れし母はそなと名付けられぬ  
隣村の裕福なる家の美しき娘の名を親がつけたりといふ

姉妹の名はたま そな みさ あい やえと名付けられ性格も個性的なり  
母は常に名を嫌がりてその子と手紙に書いてをりたり  
ひめそなれといふ可憐な花ありいい名ではないかと我は思ふに

## 小野明子

西瓜

・森

夫が好きな西瓜が店に並んだら欠かさず買って冷やす毎日  
切り売りの西瓜は汁が滲まぬよう同じ形の袋に入る  
切り売りの西瓜が入る袋にはジッパー付いたり持ち手があつたり  
夫に出す西瓜はいつも皮を取りお洒落心でフォークを添える  
生ゴミが西瓜の皮で重くなる昔は穴を掘って埋めたた

## 小野泰子

古き墨壺

・今

ひ弱さに溺れるさまの早苗らもはや夏の風に花ゆらす頃  
ひさびさに梅雨の晴れ間を朝日さす向かい家の壁を橙に染め  
「お天道様が見てる」と諫められし事語れば老いはうなずきあえり  
子も孫も継がざるままを「き義父の証と残す古き墨壺  
病院に委ねし夫より自宅にて看取りし姑の歳月重し

## かがわじつお

十菜摘みて

・鹿

対局の八連敗で引き潮の「とく消え行く棋力を悟る  
楚楚とした一輪さしが好きなれば十葉摘みて仏間に活けたり  
さみだれの静かに降ればふかぶかと最敬礼せり庭のトマト  
さみだれにゆり起こされたかの如く紫陽花の花急に色づく  
朝まだき静寂やぶりスーパーの搬入口にトラックは入る

## 笠井秀子

風呂敷

・北

蓮池の水の面を覆う葉あいより背すじを伸ばすピンクの薺  
蓮の葉の滴ゆらりと一巡り泥を払いてみどり淨める  
昼すきて朝顔の蕾卷いたまま日照不足の巣ごもり長くて  
横文字の会見多い小池知事にスマホ操り悪戯苦闘  
紫の風呂敷使いエコバッグに仕立直せば日の目をみたり

## 片岡力ヨ子

コロナ早くゆけ

・岡

貧しくも良しコロナには潰されず田畠少しを耕してゐるむ  
新聞はコロナの記事に一杯で前川に来る赤翡翠に触れず  
コロナ怒る日々に飽きたり籠一杯梅を探り来て上手に漬けむ  
コロナにて逢はなくなりし人多し螢乱舞の夜を独り居る  
泉水の鯉さへ人の恋ほしきか餌やる吾の手を所望する

## 金子美智子

帰省

・新

さ庭の花々の中に白百合の咲きて位置を確かにしたり  
亡き夫に飴を供えて幼子は「お空でなめて」と手を合わせなり  
若き日に水害病氣を乗り越えて家族と暮らす今があるなり  
夏なのに誰も彼もがマスクする七十七年生きて初めてのことなり  
いつまでも収束しないコロナ禍に帰省出来ない子孫を思う  
かはさきじゅん

夏と雨

・そ

霧わたる文化の街のコロナ禍を神涙目にして見おろす五月  
ギャラリーは自画像の列流れ行き過ぎし日のモデルあわててのぞく  
灰色の空を仰げば小雨降り地光り明るき春は寄せ来る  
さつま義士祭り終りてみどりなす 小草は強く更に匂えり  
公園は来たる夏待つ松の木々蟬時雨の中ぶらんこ揺れる

川北 操 古道

・凌

東国に戦ひ終へて大和路へたけるの命登りし坂よ  
ふるさとに残る古道の坂道を走る車は並び通りつ  
杖をつき坂を登りし神の道〈杖つき坂〉と名付けられしよ  
杖持ちてゆるり登れる里の坂清められつつうれしさの湧く  
若きらに語る神話を楽しげに聞きる顔々時やつながる

かわひがしかずよ

箸がにぎれん

・そ

朝食時「箸がにぎれん」夫がいう水を飲ませて救急を待つ  
梅雨晴れのみどり増したる公園にせみ時雨聞く組曲のこと  
明け方に目覚めてしましラジオ聞く「明日へのことば」楽しみになる  
訪ねると炊きたてご飯祐子さん夫と私にまごころむすび  
御破算で願いますとコロナ禍の年の後半口角上げて

神戸良三

早春賦

・信

道祖神を祭る子供はさざめきて畠中の道に春を呼ぶらし  
古戦場に黒くただすむ道祖神もしめ縄飾りて春に裝う  
道祖神を知らず育ちし我ゆえに祭りの子供ゆかしと眺む  
春立ちて日の浅けれど我が畠に仏の座繁り花を競える  
冬越せる玉葱の苗葉を高め空に向かいて背伸びし合うや

木村静子

高音うぐいす

・湾

温度差に振り廻される梅雨寒よ細身のわれはふらふら嘆く  
ドクターの「夏風邪ですね」に安堵するコロナの最中ののどのヒリヒリ  
しとしとと降りしきる雨を受け止めて健気に明るし紫陽花の花  
猛烈な水蒸氣を含む黒雲から降りくる怖さよ町を呑みこむ  
意外なり梅雨晴れの朝の住宅街に高らにとおるうぐいすの声

きゅうとくなおみ クラスター

・そ

クラスター発生したる夜の街花の金曜は遠き日のこと  
ネタ仕入れ客待つ寿司屋の氣の毒さ客より多い板前の数  
居酒屋の薄暗き中カウンターに店主座りてテレビに見入る  
大雨が続いた七月日が沈む梅雨も明けたか赤とんぼ飛ぶ  
鎧でも付けているのかカナブンはからだあちこち打ちつけて飛ぶ

久保幸子 定休日

森深く辿りてゆけば沢の音合歎の花影ほのと明るし

きらきらとこころはずみて山めぐる思わぬ出会いのほたるぶくろに  
ひさびさの森の空氣のすがしさに気を解き放つ身も心をも  
大雨の後を怒濤と荒れ狂い水當数倍壁峨渡月橋  
目的的老舗豆腐は定休日そぞろ歩けば楽しからずや

熊谷とも子

紫陽花

・湾

ダイオードの光でまたたく天の川祭り無き世の救いのことく  
七夕に逢う懶重ねる星と星何億年も変わらぬ愛もて  
あざやかに睡蓮の花は咲き誇る雨降る中にひとり楚楚とし  
紫陽花の花咲く茶屋のおもてなし心惹かれて日暮れを迎う  
紫陽花の咲く杉山は暮れなずみ遠吠え聞こゆいすこからともなく  
しののめの電信柱に啼く鴉「颶ガラス」と孫の名に呼ぶ  
見上げればいまだ幼き「颶ガラス」エサをねだりて喰く鴉は  
時を経て「颶ガラス」の巣立ちしか大きくなりて黒光りせり  
コロナ禍に孫三人を任せられ厨に立ちいるひと日の長し  
予てより人はウイルスと闘えり命の連鎖の鳴呼令和二年

小塚幸

抹茶

・風

さこだときえ

「ウフフ」と私

・鹿

亡き夫の愛した茶わんに抹茶たて仏前におく何年ぶりか  
亡き母にそっくりだねと友は言うあと九年で母に追いつく  
毎日をコロナウイルス気になりて外出をさけころころするなり  
閉じこもる毎日に飽き気晴らしに緑道公園黙黙あるく  
雨あがり夜明けを待つことせみの声百日紅の木にかしましきかな

酒井綾子 山の麓に

・今

今年また茗荷の取れる季の来て山の麓をかき分け探す  
青紫蘇が庭一面に広がりて寒となる時を私は待ちおり  
今週も娘の家に泊まりたり自宅より少し涼しさありて  
合歓の花雨に打たれて土に溶け庭の掃除のはからぬまま  
入梅を喜びいでアマガエル紫陽花の葉にちょこんととまる

酒井綾治子

草刈り

・森

じやが芋の芽摘きに初めて挑戦すいづが太きかわからぬものを  
庭草を刈る目先の電線に鳶が鳴くうちつけに鳴く  
草を刈るわれの傍へに隣家の姫は大地のごときおしやべり  
大粒の雨降り出だし夏草の匂ひは地より湧き出でやます  
竹を切り雑草刈りて百坪ほど夢中に進む腰曲がるほど

坂本佐和子

月桃

・羊

俯きし月桃の花につゆの玉しろく滴り沖縄<sup>チヂミ</sup>かたる

宮古島の旅にて貰ひし月桃は吾の庭に住み四十一一年

月桃の花咲くころに突然の沖縄炎上屍の山

死者悼む月桃の咲く六月を本土のわたくし沖縄に謝す

月桃の緑葉につつむ餅たまふウチナーンチュのやさしさ忘れじ

うぐいすの声高らかにひびく森ときどきつまらす「ウフフ」と私  
長雨で実りしトマトはじけたり「かんへんしてよ」雨雲にらむ  
梨の実を袋かけした右下にクマ蜂カナブン思わずヒヤリ  
久々に息子の電話「生きてるか」生存確認コロナを愁いて  
活発な梅雨前線に川氾濫西東日本おもわぬ被害に

佐藤昌 つかの間

・湾

鳴く河鹿川の流れの間に傍さいのちの光を点す  
目に見えぬ敵と向き合い暮らす日々くぐる茅の輪に収束祈る  
天災は神のいたずらか自然の祟りか年毎繰り返し許しはないのか  
長梅雨に陽を待つ気持ちは日々募り元気につながるひとときの夏  
あたふたとウイルス対策をひるがえし安心はあるのか季節の先には

宍戸千佳子 吳服屋

・新

着慣れたるふりして饒舌なる我に吳服屋の店員世辞浴びせたり  
反物を着せられて見る鏡には前だけ和装のマネキンいたり  
うっすらと汗ばみながら着せくるる人に買う気はなしとは言えず  
何回も「ご縁ですから」と電話くる三千円の草履の客に  
隣り家の解体されてその隣の人と初めて言葉を交わす

篠原節子 青い星

・渚

透明のガラス細工か小かまきり柿の若葉にとけこみており  
梅雨空を自在に飛べるツバクロを自肃の窓辺に朝夕見つむ  
梅雨空にクレーンのアーム高く伸び国保病院の建設進む  
青い星いためつけたるリベンジが大自然いま猛威をふるう  
コロナ禍の要請長し凌辱の花を散らしてそばえ過ぎゆく

## 住田ひさ代

プラタナス

・風

病院のかたえの丘に枝広ぐるプラタナス消ゆ切り株残し  
通院のたびに見上げしプラタナス青葉の頃に突然消ゆる  
暴走のエンジン音とバトカーナのサイレンの響く夜の公園  
チエンソーノの音のひびきてうつそうとした境内に光差し込む  
修業中の張り紙ありしラーメン屋いつしか壊され建物のたつ

## 高橋迪江

広島へ

・渚

出張の息子を訪ね孫達と飛行機に乗り広島へゆく

飛行機は広島着に遅れありホテルへ着くなり原爆ドームへ  
息子らと行く厳島神社の大鳥居畏みにつつ歩みて行けり

一日中マスク外せぬ旅なれど孫ら三人は涼しい顔よ

懸命に若きら追いかけ頑張るも無理するをやめ人力車に乗る

## 武田幸子

孫

・鳩

「おばあさん」東京の孫よりはずむ声受話器おしあて顔ほころびて  
見上げれば青空の中に黒き雲明日のたのしみいかになるかな

一雨ごと草の芽ふえて気にかかる痛む腰まげ一本ずつ抜く

若葉刈る植木屋のハサミあざやかにハラハラ別る小さな葉達が  
青桐の大きな葉が舞いおちる酷暑の夏をしらせるのかな

## 辻田聰美

芍薬三輪

・風

見慣れないガラスのビンに活けられた芍薬三輪パツと目を引く  
花びらの半分ほど散り敷ける芍薬はまだ大輪のまま

エケベリアのふたつの鉢が冬を越しにぎやかに咲く独居の玄関

降りはじめた雨にも足どり軽き義母検査結果の良好という  
拾い来し母のムクロジ背丈越え呼び覚ますなり皇居の思い出

## 土井谷恭子

変わる

・風

これからの中コロナと共存でマスク・手洗い・人との距離を  
人混みは悪のレッテルつけられて生活スタイル変わっていくよ  
休校の続く春日の昼下がりわら毛をとばす母と子のあり  
勉強会再開するとメール打つ飲み物持參とひと文添えて  
子は自称「ミニマリスト」で不用品ネットで売りて新しきも買う

## 富岡明子

試練

・地

外出は家族みんながマスクして車に乗り込む異様な風采

やるせなくマスク作りを楽しんでコロナ禍が去る日日を夢見る

この試練マスクの幼は何と取り大人は何と説明すれば

清しい朝種より育つアサガオの数を数えて新聞取りに  
つきつきにカサブランカの咲き盛り梅雨の隠り居香に包まれる

## 中江京子

少年野球

・宙

ベランダに思わず乗り出しのぞき見る梅雨の暗れ間の少年野球

子等の声青空へ飛びこだまして広きグランドいっぱいになる

贈られし入学祝の自転車は孫も食み出す動画の外へ  
久し振り手作り団子の黄粉飛び頑張る孫の笑顔弾ける

宮古島マンゴー今年も届きたり。豪雨・惨禍も無縁の地から  
想い出は遠くて近きここに在り瞼閉させば両の手の中

苦労とは過ぎ去りしのち現れる頭に浮かぶ若き日の妻

淋しさと寂しさとには感情と精神的の脳の配分

月参り八五には命日の我が家の歴史刻み込み在り  
梅雨明けとコロナの話マスク越しプラス我にはお墓まいりが

## 中林昭三

頭脳

・春

# 中 山 尚 子

コロナ

・凌

三歳児 「新型コロナ」明瞭にマスクの顔あげ吾に語りぬ

いちょうの木翡翠なる色銀杏のコロナも知らず小雨に濡る  
デパートの七階の喫茶コロナ禍に昼食の客の少なく静まる  
ゆくりなく太陽かがやき蝉の声この世の終りと蟲さわたる

粉河寺大門の仁王見下ろしぬ眼の下に吾一人いて

# 西久保佐和子

なみだ

・春

浴室の窓の向こうの空の下桃色の蓮上を向いている

逃げ恥を見て泣いている夫を見て涙もろいとティッシュ投げ渡す  
プロ野球観戦試合感動す目をうるませてテレビで応援

自衛中007初回からショーン・コネリー アクションひかる

甲子園今年は全て決勝戦朝日放送アナウンサーの云う

# 丹羽哲也

日々出勤す

・森

マンションのごみ処理清掃欠かせずにコロナ禍の中日々出勤す

通勤の電車はがら空き非常時は天国なりと思うことあり

管理人の仕事にあればマナー悪きごみの袋を日々補強する

ふる里へ二人の住人は行つたきり二ヶ月放置の宅配ボックス

体力の続く限りは働くかんコロナの感染日々に厳しき

# 野田弘美

青年

・天

いで来たれ風神雷神今ここにコロナなる物吹き飛ばしてくれ  
ゆっくりと坂下り来る青年と距離たもちつつ会釈を交わす

せんべいの「都うちわ」の風あつめ今こそコロナ打ち払いたまえ

久方に集い来友ら待てる朝すすめる手洗消毒などと

早起きのご寝美かも透き通る羽根の美しさよ空蝉を脱ぎ

## ●地中海叢書◇新刊・近刊案内●

・仲西正子歌集『まほら浦添』(第931篇)

ながらみ書房

まほらなり「太陽が穴」より上がる日を隠すものなし  
浦添グスク 2500円+税

・高尾恭子歌集『裸足のステップ』(第934篇)

現代短歌社

綿足のようなパンプスぬきすてし女こぞりて現在を駆け  
ゆく 2000円+税

・上林節江歌集『記憶の遺産』(第933篇)

ながらみ書房

わすれてはならぬ記憶を喰ぶように鳴いてまた鳴く山杜鵑  
2600円+税

・若林美知恵歌集『逃げ水を斬る』(第935篇)

ながらみ書房

姫にあらねど我はまっしぐら季節外れの逃げ水斬りて  
2400円+税

※お問い合わせは、直接著者か版元にお願いします。

## 〈近刊〉

・久我田鶴子歌集『雀の帷子』(第936篇)

砂子屋書房

・中島央子歌集『紅葉坂來て』(第937篇)

九曜書林

・安部律歌集『四月の翼』(第938篇)

現代短歌社

歌集を出版する際には、必ず本社にご連絡ください。  
地中海叢書として登録いたします。 [地中海社]

# 作品 C (ハ行)

○ 鍵田朋美・沖

少年が初めて父に殴られた翌朝の水は血の味がして  
亡骸はいとも容易くワイヤーでなかつたことにして 虫けらより  
ただいまといつかあなたは帰らないその日の為にいつてらっしゃい

○ 関根正明・銚

梅雨空に銳く響く打球音白球は飛ぶ無人の球場  
レジ袋有料となりコロナ禍に口にはマスク手にマイバッグ  
まんまと水をたたえた千枚田オタマジャクシに手を差し伸べる

○ 江尻リエ子・新

初夏の別れを告げて鳴くカッコウ指定席なる電柱の上

暮れ時をほんのり照らす夏至の影いつもは暗き北の窓辺に  
知らぬ人に会うたび眉間にじわ寄せてめったに笑顔は見せぬ一歳

○ 丸山修・大

アカシアの黄色い落ち葉雨に濡れコラージュとなるアスファルトのうえ  
広重が描く直線の大雨の角度交わりて風吹くを知る  
貴婦人の口ココ時代の紺碧の瞳輝く美術館の片隅

○ 柄目けい子・柴

透きとおる緑を重ね重ねたり「ぶな」の隠せる青空の端  
真緑の稻そよがせてわたる風蔵王裾野は空晴れわたる  
フラダンスのレイの揺るるを思させて熟れ田を過ぎてゆく風のあり

○ 原澤吟子・大

若き日に愛した合歎の木第5キャンプ場第3村に夢のやうに咲く  
雷鳴の下キャンプ場かけ上がり「テント閉めよ」とふれまはりたり  
子ら去りし山の夕かけ鷺草は白き翼でとび立たんとす

○ 出口和子・雁

義姉よりの電話がありてひとりの夜淋しさ消える 十七分  
「頑張ったね」「生きた半生」義姉の声身にあまりたり電話に礼す  
いのししの防護柵張る炎天下「さくらんばです」宅配うれし

○ 伊島優子・津

紫陽花が山の畑に咲き乱れ次からつきと楽しみふえる  
珍しきお多福アジサイ友と娘に知り合いまでもお裾分けする  
紫陽花を書斎と居間に玄関に色とりどりに飾りつくせり

○ 平山一子・銚

天井より蜘蛛がおりくる救助ヘリの正にレスキュー隊員のこと  
蟻の群れが凄いとすべてを結い直すゴミステーションに来し男性は  
爪染めに娘に連れられぬ梅雨最中ハイテンションに踊りたくなり

○ 藤岡みゆき・大

あおき魚シユノーケルして追いかける浅瀬に広がる珊瑚くぐりて  
ああ八重千瀬シユノーケルして潜りゆくテーブル珊瑚の連なりめざして  
居酒屋で島の鰯を食みながら八重泉のロックしみじみと呑む

○ 古川一美・伊

若竹の蔓初夏の光を浴びて清しき風になびきてやまづ  
若竹の蔓をなびかせ吹き過ぎし風早みどりに染まりゆくなり  
揺るぎなき弧を描きつつ燕らは農家の軒に吸ひ込まれけり

○ 古瀬由紀子・洛

一学期がんばったねの賞状を子らの姿に重ねて書けり  
賞状を受け取った子の喜びに書いて良かった元気をもらう  
終業式体育館へ集わずにZOOMで行う大画面にて

○ ほしからら・鹿

七日の夜 空見上ぐれど遙えません天の川でも自肅してゐるか  
サルスベリ雨にたたかれてかわいそう畠がいっぱい 哭きそうなのに  
里芋は雨をよろこび天に向け大きな葉っぱで満たしておりぬ

○ 本田顯子・熊

慰むる心だけではいけないと私の貢務は災害本部  
しおらしき仕草悲しい舞姫よコロナのせいか見る人まばら  
夫婦して老の年まで共にあり 流れゆく妻瞳を夫に

○ 間野春美・漣

他県への移動解禁まず何処へ会いたい人の顔次々と  
待ちわびたコロナ解禁皆集うグランドゴルフ、太極拳と  
初なりのキュウリの花芽二つ三つ立派に育ち糠漬となる

○ みなみみちこ・そ

遠き日に共に勤めし亡夫の友お墓参りに感謝の極み  
佳き日なり亡夫の笑顔に報告す昔の朋友の訪いありて  
幸福の木の芽にこりと顔出しぬ今日は佳き日と微笑み見つむ

○ 森田泰子・虹

“暗れています”さえずする声に教えられ二輪車こいで遠出楽しむ  
百均で求めたメガネ度数あげ服装明るく街へ出てゆく  
郵便の赤いバイクを目で追って夫への文ポストへ急ぐ

○ 森本ちづる・沖

病む吾に病は氣から元氣出せ十九の孫から励ましのあり  
無観客に画面の向こう蝉の声ウイズコロナの生活となる  
梅雨空に合歓木花火彩れる紫陽花の花色褪するまことに

○

山口美恵子・銚

夏至の今日本能寺の麥ありたりき夕べの空が不気味に紅し  
新聞の集金屋さんに引き落としの依頼されたりコロナ禍なれば  
我が家まで潮の香りが届く朝本格的な夏は近いか

○

山野はるか・沖

A3のカバンを抱え商談へ背に神棚の一拍手響く  
我が胸に競い飛び込む子ら抱き動かぬ体にパワー充電

日曜はキッチンに立つ夫の焼くステーキの音子らを抱き聞く

○

山野みなみ・沖

日曜よ心が叫ぶ朝五時に子ら熱視線起床命令  
二年経つ陣痛を越え出会えた子時は速いがいまだ歩まず  
子ら眠る車の中に夫語る未来輝く夢美しき

○

吉田明子・洛

枝伐らるるメタセコイヤは遠き日を芽に萌え立たせ梅雨の雨欲る  
やわらかな彩を訪ねるあじさい園 会う人は皆花のある人  
疏水路は人影まばら鎮もりてコロナウイルスの収束を待つ

○

池上久代・雁

登校の小さなマスクの連なるにいつしか見慣れ朝の風景  
コロナにて五十回忌を思案中夢で会いたる祖父母の笑顔  
花から花優雅にわたる蝶たちにわたしのキャベツ食べたかと問う

○

石田安子・洛

ふとよぎるひとつ言の葉あたためてしのつく雨に晒し流さむ  
新しき補聴器にひろごる言の葉の直なるままに聞こゆる嬉しさ  
檜扇を活くるやめくるめく宵の父と巡りし鋸の屋並みの

○

遠藤千恵子・銀

土砂降りに雷鳴激しく重なりて夜のそこひにぐいぐいおさる  
七月の南の海の新月にウナギ産卵することかなし  
歯の麻酔切れうつうつとをりたる昼夜水仙はすづくと立てり

○

大越孝子・福

鈍色の雲動かず空おおう「本当の空」見えぬ日続く  
雨上がり庭の青芝瑞瑞し若いネジバナ數本ひらく  
白雲は窓辺よぎりて消えゆきぬ見上げれば空に群雲重く

○

尾崎幸子・信

彼ですと紹介されしその君は何ともおだやかほんわか気分に  
孫娘定期まで病んでいた母の意識かそと腹さする  
パンパンに張ったお腹に手を置いてあっ職とばしたよと嬉しそうに笑う

○

大下陽志江・風

朝の陽がブラインドから洩れてきて今日一日の始まり告げる  
雨にぬれいきいきと咲くあじさいを陸橋に立ちながめし日あり  
行きに見て帰りに見てと七変化ちがって見えるなあじさいの顔

○ 風早公恵・漣

草刈りて畠仕事に精をだす義父の笑顔は好好爺なり

田畠埋め団地ができるて蛙減り様変わりする梅雨の合唱

水無月の朝の静けさ一変し田植え機の音にきやかに響く

○ 唐澤美恵子・信

知らせる高校受験の発表を「お母さんの方が喜んでるよ。」  
区総会に初めて出する老人会コロナに阻まれ書面に議決す  
孫に会い生活を聞けば安堵する「今年は入籍するよ」喜びの声

○ 河西聖子・地

雨続きスクーターで出られずに今日も傘さし歩く梅雨中  
改めて「今日がいちばん若い日」と後悔よりも行動すべし  
しとしどと雨の音聞き落ち着く夜も繰り返せば災害自然の力

○ 久保洋子・雁

義父の死の近きをさらりと同僚の話を聞けり月曜の朝  
ばらの花剪ればほろほろほどけ散り苔を一本グラスに活ける  
久々にミシン針箱取り出し夜は継いゆく家族のマスク

○ 小南由子・昂

なき母と土筆を摘みし野の小道語らいながら歩きしあの日  
ローケツ染夢中に習い染め上げしテープルセンター六十年前の  
長つゆに木々の葉はみな重たげにみえてコロナ禍さらに深まる

○ 佐藤愛子・湾

とんとんとノックするがの子のメール油断するなど父母を気遣い

月末は決まって部屋の模様替え来月は風神雷神を飾ろうか

招かれし友の中庭にひっそりと山紫陽花は慎ましく咲く

○ 首藤悦子・渚

ねじ花の天のねじれに花付けば梅雨は明けたりと母に聞きしを  
梅雨暗れに土の匂いがふわっとしてトマトを摘みて重なるにおい  
クレマチス屏にからみて紫の季を違わずけなげに咲けり

○ 高澤匡子・風

久ひさに集いて踊る大山音頭換気の窓に緑風そぐ  
張り替えの障子を破る歎声にわれの心も子供に還る  
咲き競う凌霄花と鬼ゆりは梅雨の庭辺を紅く彩る

○ 鉄地川原朱美・新

別れきわ笑顔でくれたおみやげは赤く輝く手作りのジャム  
雨上がりすべてが幸に色変わる青空太陽からだに染みる  
しづかなる待合室にきこえくる老いし男性声に華あり

男孫を喜ばせんと五時起きの夫はクワガタ七匹も捕る  
訪ねたる庭に飛び交うアカタエハ蝶を話題に一時間ほど  
「作業着と交換す」との提案に掘りたる薯を店主の元へ

○

## 土井敬子・湾

■

福島発 風のたより

石井悠子

○

夫もわれもおの金魚の鉢の中声の届かぬもどかしき日々  
母の背にも夏の日差しは降りたるか梅干すわれの指も染まりぬ  
梅雨空の薔薇の緋色に囚われて寝入りてもなお眼裏に咲く

○

## 飛田久栄・茨

着付けにと母の着物を持ちゆき娘が難病<sup>やまい</sup>にて処分を聞きくる  
パパママとしゃれたマスクに縫い分けて送りくる娘の今日はさわやか  
春ゆるみ今日はどうかと電話掛けさやかな笑いに大きく安堵す

○

## 永井秀次郎・海

作業台四年の月日流れたり文学、学校、故郷浮かばず  
廃品の間屋小宮横バラック今は大きな工場に移転  
東京の若き日泊江羽村町福生の町で暮らしたりけり



甲子園

福島県立磐城高校が夏の甲子園で準優勝した昭和四十六年。小学生だった私の記憶に残っている草野心平磐城高校出身の詩。「進学率は高いけれど背丈は恐らく一番低い」という部分を忘れません。気になって検索したら、そのあとは「そんな小さな君たちがしかし豪胆で緻密で冷静で果敢で驕らず悪びれず」と統いていました。昭和の頃の福島県代表といえば、磐城高校に福島商業(古関裕而の母校)でした。その後、県外から選手を集めの私立高校には勝てなくなり、私の高校野球熱もさまでいきました。今年の春のセンバツ、二十一世紀枠で磐城高校の出場が決まった時の嬉しさをどう表現しましょう。喜びも束の間、センバツは中止、磐城の監督さんは異動、夏の大会も中止。たくさん流れる涙。センバツ出場校が甲子園で一試合だけできると決まった時の歓喜。八月十五日、異動になつた前監督のノックを受け、いい試合を見せてくれました。磐城高校ナイン、ありがとうございました。

ぶんず色ってご存知ですか? 福島の方言でくすんだ紫色のことです。寒くて唇が紫になった時など使います。先月膝を骨折した私、内出血が広がって思わず「わっ、ふくらはぎ全体がぶんず色だ」と叫んでいました。久々に使って、これ方言かなと調べました。その少しあと、全国高校総合文化祭に郡山高校放送部が「ぶんずって何?」という作品で賞をとったという記事を読みました。こちらの高校生も、なかなかやりますね。

去年まで全量全袋検査していた福島県産米、一部を除いて今年から抽出検査になりました。

小学生だった私の記憶に残っている草野心平磐城高校出身の詩。「進学率は高いけれど背丈は恐らく一番低い」という部分を忘れません。気になって検索したら、そのあとは「そんな小さな君たちがしかし豪胆で緻密で冷静で果敢で驕らず悪びれず」と統いていました。昭和の頃の福島県代表といえば、磐城高校に福島商業(古関裕而の母校)でした。その後、県外から選手を集めの私立高校には勝てなくなり、私の高校野球熱もさまでいきました。今年の春のセンバツ、二十一世紀枠で磐城高校の出場が決まった時の嬉しさをどう表現しましょう。喜びも束の間、センバツは中止、磐城の監督さんは異動、夏の大会も中止。たくさん流れる涙。センバツ出場校が甲子園で一試合だけできると決まった時の歓喜。八月十五日、異動になつた前監督のノックを受け、いい試合を見せてくれました。磐城高校ナイン、ありがとうございました。

ぶんず色ってご存知ですか? 福島の方言でくすんだ紫色のことです。寒くて唇が紫になった時など使います。先月膝を骨折した私、内出血が広がって思わず「わっ、ふくらはぎ全体がぶんず色だ」と叫んでいました。久々に使って、これ方言かなと調べました。その少しあと、全国高校総合文化祭に郡山高校放送部が「ぶんずって何?」という作品で賞をとったという記事を読みました。こちらの高校生も、なかなかやりますね。

去年まで全量全袋検査していた福島県産米、一部を除いて今年から抽出検査になりました。

◆月虹 一三四号 編集発行人 鮫島 満

総頁数三三二頁

\*一首鑑賞 山口京子評  
門に立ち見送りをしてくれる母記憶でき  
ない今をかさねて

高山 邦男『インソムニア』

高山邦男はタクシードライバー歌人として  
てN H K 教育テレビ「こころの時代」でも  
取り上げられた。評者山口は市民講座の短  
歌教室で師事している。「日々壊れ行く母  
の姿を歌に詠む事は母への思慕と贊美だ」  
と記し、他にタクシードライバーとしての  
日常を詠んだ歌をあげている。

わが仕事この酔ひし人を安全に送り届け  
て忘れられること

\*一首鑑賞 横山鈴子評  
白き部屋に麻酔のための台ひとつ置かれ  
てわが自分が自分でのぼる

北神 照美『ひかる水』  
「われ」を更に「自分で」と重ねること  
で強い意志と同時に運命的なものを受け  
するような印象を読者に与え、「われ」は  
効果的に使われている、「他に「われ」の  
歌い込みに着目した歌をあげている。

足の指の間を洗ふゆるゆるとわが魚で  
ありし日の滑り

\*隨想 「ボツンと一軒家」 小林 勝  
テレビ番組「ボツンと一軒家」の人気は  
（隠里）への憧憬に通じるものがあると筆  
者はいう。徒然草や河合隼雄の昔話の分析、  
遠野物語、桃花源記、草枕等をあげながら  
てN H K 教育テレビ「こころの時代」でも  
取り上げられた。評者山口は市民講座の短  
歌教室で師事している。「日々壊れ行く母  
の姿を歌に詠む事は母への思慕と贊美だ」  
と記し、他にタクシードライバーとしての  
日常を詠んだ歌をあげている。

「苦しい思いも爽やかに受け止める」歌  
として掲出二首を紹介する。

◆月虹 第四号 第七五卷第八三〇号

編集発行人 三枝 浩樹 総頁数九八頁

（隠里）への憧憬に通じるものがあると筆  
者はいう。徒然草や河合隼雄の昔話の分析、  
遠野物語、桃花源記、草枕等をあげながら  
てN H K 教育テレビ「こころの時代」でも  
取り上げられた。評者山口は市民講座の短  
歌教室で師事している。「日々壊れ行く母  
の姿を歌に詠む事は母への思慕と贊美だ」  
と記し、他にタクシードライバーとしての  
日常を詠んだ歌をあげている。

\*時評「落ち込んだときに読みたい歌」

◆沃野 第四号 第七五卷第八三〇号

編集発行人 三枝 浩樹 総頁数九八頁

◆最近の歌誌より  
月 虹  
沃 野  
(高尾)

（隠里）への憧憬に通じるものがあると筆  
者はいう。徒然草や河合隼雄の昔話の分析、  
遠野物語、桃花源記、草枕等をあげながら  
てN H K 教育テレビ「こころの時代」でも  
取り上げられた。評者山口は市民講座の短  
歌教室で師事している。「日々壊れ行く母  
の姿を歌に詠む事は母への思慕と贊美だ」  
と記し、他にタクシードライバーとしての  
日常を詠んだ歌をあげている。

◆月虹 第四号 第七五卷第八三〇号

編集発行人 三枝 浩樹 総頁数九八頁

## ■八月号 A 櫛批評

朝の来るを信じて  
牧 雄彦

七月号は新型コロナウイルスにテーマを絞って目に留まった作品を列記するにどめたが、今年の梅雨の間には、ウイルスの感染が再び急拡大したのに加えて九州地方

中心に豪雨が襲うという天災にまたもや見舞われた。本当にこの六、七月はとんでもない災厄に翻弄され続けた時期であった。

入りつ日にレナウン娘をおどらせて波の何処や方舟の影

この作者の発想はユニークで言葉遣いには程よい飛躍があつてうまいと思う。この一首もまた面白い素材を独特の言い回しで捉えた。すいぶん昔、一世を風靡したコマーシャル・ソングを覚えている方も多いだろう。その有名アーティストが経営破綻した。救いの船はどこにいるのだろうか。折からのコロナ禍とも重なつて見えてくる。

・淀川の美味しい水を少しのみ眠らむよ朝の来るを信じて 田土 成彦  
トシを取るとよく寝るときに、このまま覚めないのでないか、などと思うことがある。突然の病だけでなく、天災などもい

うところがいい。

・出社指示に開けるクロゼット冬物のスリッパが初夏の息に苦しむ 玉井 純子

コロナウイルスの感染拡大によってテレワークなどという仕事のやり方もかなり普及し、出社しないで自宅にこもり、オンラインで仕事をするようになつた。作者もそ

うしたひとりか、多分急な出社の指示が出て急いで外出の準備をするのだろう。忙しく過ごしていく冬物の片づけをしないでいるうちに早や初夏になつた。下の句の表現に惹かれる。

・期限切れせまる非常食ラーメンを事なく生きる昼を啜りぬ 中島 央子

いつの間にか賞味期限が過ぎてしまふ非常食。共感する人が多いだろう。「事なく生きる」が重く、効果的だ。

・しづかなる君の寝息を盗む夜の闇に詠めく柿の若葉は 藤田美智子

梅雨時のつやつやとした柿の若葉はまことわが身を襲うかわからない。この作品の面白いところはむしろ上の句だろう。以前は大阪の水道水はまずいことで有名だったが、いつのころから、浄水設備を新たにしたとかで大阪の水はおいしくて様変わりした。大阪の水はほとんどが淀川水系から取水している。その水を少し飲んで寝るというところがいい。

・翔をしばし日に追う 横田 敏子

今年は何度もわが家の飼育箱（？）で何種類ものアゲハが羽化して飛んで行った。羽化したのを見て、箱の蓋を開けてやると、しばしためらつてふわふわと飛び立つ。何かしら心もとない飛び方で。

・夕暮れの庭隅に京鹿子の花が咲くほ一つとして雲の様に明るい 佐久間すゑ子

口語調が効果をあげていて、下の句、比喩が的確で印象的だ。一首目の「京鹿子の花むらの前で目を閉じる長い年月が流れゆく」もいい作品だ。

とに美しい。上の句と下の句との関係がうまく処理され、こころに沁みる一首。

・夏蒲団カバーに留めゆく老妻の手の細りたり梅雨入りちかし 宮本 靖彦

「老妻」は「妻」でいい。「妻の手のやや細りたり」か。季節の一瞬をとらえて妻へのいたわりの気持ちを表現した。

## ■八月号A欄（アーチ）批評

自分を詠う

菊地 栄子

・生きるとは苦諦を受け止め煩惱を払いき  
れずもこころはきよし

荒川 信明

世界の一切存在は苦であると言ふ苦諦、  
煩惱は百八。仏教への信仰心か、それらを  
睥睨しつつ生かされている。

今村 叶子

なにがなし敬意をもちて魚には対えりた  
とえ塩焼きにも

代では顯者。魚があるなら申し分なし。食

物ことに魚に対する拘りに瞠目。

内田 泰子

・鮮やかなえんじの新種の撫子に寄りたる  
蝶の止まらずに去る

テーマから外れているのは否めないが、

思わせぶりな蝶の振る舞い、選択にも取捨  
選択のある事を暗示しているようで印象的。

・補聴器を夜外しつつ「又あすね」苦労さ  
ん」と思わずぶやく

鶴之沢通子

日常に補聴器を使いこなして、友達のよ  
うに親しみ、とても活用していることが

「又あすね」にこめられていてあたたかい。

・籠る我に生存確認の電話とうはずむ女孫  
の声に浮き立つ

沖田 誠子

コロナ禍による自粛・巣籠り・ステイホー

ムといろんな言葉が飛び出している。そん

な折にお孫さんが弾む声で、おばあちゃん  
のご機嫌伺いをして来る。嬉しそう。こち

らの気分も明るく浮き立つてくる。

・血圧の薬ふえゆき顔欠けしのべり地蔵  
に託し行む

血圧の薬がふえてしまつた出来事。医院

からの帰り道でしょうか。地蔵についてい

こぼしてしまつた。ご自分の姿をユーモラ

スに披瀝して、味わいを深めている。

・マスクして帽子をかぶれば化粧せず出か  
けることの易くもあるか

木村 恵子

外出となるとマスクは今や携帯品になつ

てしまつた。マスクと帽子となれば、どこ

のどなたか判別つかず挨拶も失礼してしま

う。面倒な化粧なども怠りがちで、「易く  
もあるか」は、女性の心理を言い得ている。

・老いし日の母の口癖に似し吾ぞ娘に言ひ  
かけて口づぐみたり 大倉美興子

母親と交わした会話が蘇つたのでしよう。

良きにつけ悪しきにつけ、立場が変わって

母親の口癖になつていることに気が付く。

三代に渡つての女性たちのドラマが展開し  
ているようだ。

・指先の青くなる迄豆を剥く卯月が匂う清  
かに匂う 来栖万佐子

この豆は、豌豆か蚕豆か気になるところ。

想像を搔き立てられる。下句に「匂う」の

リフレインのあるシンプルな表現。上句に

具体が詠まれてるので、おそらく初物の

豆でしようか。さわやかな香りがしてくる。

・忙しき日日に追はれて積みおきし地中海  
誌を新鮮に読む 齋藤 順子

作者は仕事などで多忙なのだろう。久し

ぶりに地中海誌を手に取ると、いつの間に

か読み込んでいる、そんな状況でしょう。

「新鮮に読む」に引き摺られて行きそうだ。

・色褪せて死ぬ緋メダカの小さきこと言わ  
ず語らずひと日が終わる 篠原まり子

一人暮らしの生活が凝縮されているよう。

心にかかること聞いて貰いたい事など人に

は語ることなく、一日が終わつてしまふさ

びしさ。私もそのような経験をしているの

で、心に沁みる。

## ■八月号A欄（スノ）批評

自然是心の風景を寫す

山野 幸司

・亡き夫のゆかりの草木に囲まれて独りで生前のお二人の関係を彷彿させる歌であり、私もこうありたいものだと思った。

手作りのマスクそれぞれ町中に行き交う人の口元華やぐ

この時代の一風景が見えてくる。華やぐマスクが心を和ませ、困難さをも乗り越えていく庶民の力に見える。短歌も脳トレしていく田植機の音

・五月晴れ四圍の山並くつきりと農道を往来する

春の農村風景の中、背景の山の美しさが迫り、田植機の音と共に力強い命の芽吹きを感じさせる。米作りの私はまた特別に。

・淡路島手が届きさうマンションのテラスに立ちて海峡眺む

私も遠く淡路島を眺めているようである。読み手をもつたりとした気分にさせ、それぞの島や風景を描かせてくれる。

・瓶のふた開かぬ時などふと恋し男手といふはそれほどのこと

高取 尚子

・いちばつの花咲く頃に思い出す切なく詠いし子規の心うち

生前の夫のゆかりの草木に囲まれて独りで

はなき温もりに居る

・生き温もりに居る

杉本 博子

子規の「いちばつの花」の歌であろう。逞しく、可憐な青い花が咲くと私もこの歌を思い出す。歌は心の風景を呼びます。早苗の田夕日が映えてさざ波の寄するをながめいくとせならん 塚田 禮子

「田、夕日、さざ波」なんとすてきな風景だろう。きっと苦勞もこの眺めで癒され元気づけられてきたのである。

・疊たに生け垣のバラ笑みかかる「プリンセスミチコ」愛しその名よ 朝長美代子

いかにも美しい物が身近にあり、それを友として生活しておられる。楚々とした作者の生活感覚が伝わってくるようである。

・有り余る独りの時間はチャンスかも普段

はやれぬ事を今こそ 長岡 知子

何が起ころうがそれを受け止め、心の歌にすることが歌詠む我々の強みである。高齢であるが常に遊び、歌にしていきたい。

・胸あかき鶴かと見る電線に並ぶ鳥みな茜に染まる 中川富美子

・久しづぶり石牟礼道子の夢をみたその頃貧しく若かった 新田とし子

鶴の赤と茜の赤の対照が発見である。日常は決して退屈する事はない。平凡な日常

「男手というは…」と軽く言っている所がおもしろい。意識の変革が必要である。

世界で活躍しているのは女性の長である。

・いちばつの花咲く頃に思い出す切なく詠いし子規の心うち 照井美枝子

子規の「いちばつの花」の歌であろう。逞しく、可憐な青い花が咲くと私もこの歌を思い出す。歌は心の風景を呼びます。

・早苗の田夕日が映えてさざ波の寄するをながめいくとせならん 塚田 禮子

「田、夕日、さざ波」なんとすてきな風景だろう。きっと苦勞もこの眺めで癒され元気づけられてきたのである。

・疊たに生け垣のバラ笑みかかる「プリンセスミチコ」愛しその名よ 朝長美代子

いかにも美しい物が身近にあり、それを友として生活しておられる。楚々とした作者の生活感覚が伝わってくるようである。

・有り余る独りの時間はチャンスかも普段

はやれぬ事を今こそ 長岡 知子

何時いつも詫懐かし方言でしゃべりしあ相聞歌である。貴方なしには私はないとメッセージを姿で表現している所がいい。

・久しづぶり石牟礼道子の夢をみたその頃貧しく若かった 新田とし子

鶴の赤と茜の赤の対照が発見である。日常は決して退屈する事はない。平凡な日常

の一瞬を歌として情念に留めるのが面白い。

・薄めたる梅酒たのしむ夫あれば梅もぐ時も張り合いなりし 中澤みさ江

我が家も同じように梅をもぎ、妻が梅干しと梅ジュースを作ってくれる。私の好物である。こうした想いが人生を支える。

・紺碧の空慈々と鶯の二羽山のむかうに何が見ゆるや 中島 彰代

鶯々と舞う鶯に自由さや憧れを感じ、何でも見たいという好奇心も湧く。空を仰いでも発見があり、心の風景が描ける。

・首に腰に湿布を貼り合う風呂上がり一人では出来ぬしみじみ二人 永田多恵子

でも見たいという好奇心も湧く。空を仰いでも発見があり、心の風景が描ける。

## ■八月号A欄（ハーフ）批評

平和な日常を

田中 純子

・薄化粧あさの鏡にできあがりけふも私の  
スイッチはオン 深井喜久代  
目覚めの悪い朝でも化粧をするとシャキッ  
とするので不思議だ。スイッチはオンと爽  
やかな一日が始まる予感。

・一合の焼酎飲んで喜べる屈託のない日常  
がよい ふじとよひこ

一合の焼酎に喜びを感じ満たされている。  
自分を律し足ることを知る人柄が窺える。

・手の指のくの字に曲がる草取りに日々を  
送りて花盛る五月 本元由美子

抜いても抜いても生えて来る草。くの字  
に曲がった指は頑張りの証。そのご褒美に  
花盛る五月があり、また頑張れる。

・夕雲を追いやく夫の横顔のそのさびしさ  
は老いとはちがう 本田昌子

夫の何気ない表情を見逃さず察している。  
長い間、支え合って来たからこそ気になる  
寂しげな横顔である。

ロボットなり

松井 春枝

知らない場所へ行くのにスマホのナビは  
有り難い。次の信号右です、左ですと指示  
してくれるが、時々遠回りを教えたりと、  
融通がきかない時もあるので人間ナビには  
敵わない。結句は「ロボットのよう」で如  
何。

・配られし十萬のつけ増税か何処で年金減  
らしてくるか気になる。 水本セツヨ  
特別定額給付金の十万円が支給された。  
手放しで喜ばず、このつけが年金の減額に  
繋がるのではないかと冷静である。一句目  
の十万は十万円にして、結句の「気になる」  
は省いても気持ちは理解出来ます。

・自肃解けおそると踏み出すもトン  
ネルの先にひかりあるや 村石けさ子  
県外への外出自肃が解除されたが万歳と  
は行かない。長いトンネルの先にひかりが  
見えるのか不安だ。結句のひかりあるやは  
「ひかりはあるや」にしたら調べが整う。  
・遠山に梅雨たつ霧の湧く日々を痴呆の妻  
は生き生きとせり 餅井辰視  
梅雨に入り霧が湧き気分は湿りがちと思  
われるが痴呆の妻は生き生きしている。そ  
んな妻に救われて温かく見守る作者がいる。  
・ああ五月自肃の解けて土を踏む薔薇はバ  
ラ色山下公園 八橋千代子

当たり前の日常が有難い。土を踏む、薔薇  
はバラ色の表現に喜びが溢れている。

・籠り日につくづく歩むひとり散歩オーラ  
桜よみんな孤独 山崎三千代

会いたい人に会えない。大切な人こそ距  
離を取らなければならぬ。「オーラ桜よ」  
と呼びかけ孤独感がより伝わって来る。

・咲き初むるレモンの花にしど降る夜明  
けの雨に実付き憂えり 山角和子  
夜明けの雨音で目が覚めた。咲き初めの  
レモンの花に降りかかる雨に実付きが気に  
かかる。雨音一つにしても生産者ならでは  
の不安が募り、そのご苦労を思う。

・以前よりソーシャルディスタンス我が家  
では守っています夫婦の間 山村睦子  
コロナ禍でソーシャルディスタンスが言  
われて久しい。夫婦の間でも程よい距離感  
が平和に暮らす秘訣かもしれない。「守っ  
ています」の夫婦の距離感が微笑ましい。

・喧騒のゴールデンウイーク人事と農に励  
みき四十二年 渡辺徳子  
農家のゴールデンウイークは多忙である。  
夏野菜の植え付け、田植えの準備、お茶摘  
み等々猫の手も借りたい位だ。ニュースで  
流れる帰省ラッシュの喧騒とは無縁である。  
「農に励みき四十二年」に重みがあり、日  
外出の自肃が解けてやっと外出が出来た。  
本の農業は支えられている。

■八月号B欄（アーチス）批評

生きづらき日々に

筆谷 幸子

・夕焼けを背に稜線のくつきりと何ごとも

なきひと日の終る 浅川 広子

にはとても有難いこと。幸せなことです。

夕闇が近づくと人は何故かほつとする。恙無く一日を過ごした作者の安堵感が伝わってくる。

・温かき雨が草花に降りそぞく音はやさしく香りを放ち 岩月 宏彦

温かき雨、雨音のやさしさ、広がる草花の香り、穂やかな一場面をきれいにまとめている。胸の温かになる一首。

・コロナ禍を憂えど屋根の鯉のぼり真澄の空を泳ぐ勢い 伊東美智子

泳ぐ鯉のぼりを見上げて元気をもらえてるでしょう。情景が浮かぶ。

・また今年も金の成る木は花盛り何かよいことうーんとありそう 今井マチ子

下の句の「よいことうーんとありそう」の口語表現に希望への思いが膨らんでくる

よう。初句は「今年もまた」の方が落ち着くのです。

・むらさきのリラの花匂ふトルストイ邸モスクワに在りおこそかに在り

坂本佐和子

「在り」のリフレインで莊厳な場面を想像します。とても良い体験でしたね。前後の作品でそこで瞑想してみたくなる読者が多いのです。

・マスクしてむしろ安らぐ眼差しを向けたやり場面誠懇の子は 宍戸千佳子

マスクをすると少し緊張がとけるのでしょうか。分かるような気がする。安らぐ眼差しにマスクの効用が分かった得がたい発見ですね。目から読み取るYES、NOの作品からも教育者としての作者の優しい心遣いが伝わってくる。

・庭先のクレマチスの花咲きそい太き添え木に立ち上がりゆく 篠原 節子

クレマチスの花は何色でしょうか。うつうつとして暮らす日々、元気に育つ花に気分が上向きになっていくようです。夏の庭を彩るクレマチスが目に浮かぶ。

他に心に残った作品を三首。

・白藤の甘い香りに近付けば我より先に虹が飛び交う 遠藤 義子

・それ違う人の指さす彼方見る消えりそな夕暮の虹 笠井 秀子

・コロナ禍に陥き気味のこの時世うれしくも抱く隣の赤子 木村 静子

■八月号B欄（セイワ）批評

仕事の歌、コロナ禍の歌  
奥田 陽子

・草刈りに終りなき日を挑戦す高齢なれど  
息子の帰るまで  
傾斜地での作業は労苦の多いものとなる。  
足を踏んばらねばならないが、この踏んば  
りには精神的なものも含まれている。草刈  
りに終わりはないが、息子さんの帰る日ま  
でと希望をもって励んでいる姿がある。

・大根をすべて抜きとり耕して春の陽さし  
にわれは急かさる。  
土井谷恭子

・怪我の癒え今年初めてトラクターへ夫を  
言祝ぐ二羽の青鶯  
トラクターに乗って仕事を始める事ので  
きるのは何よりの喜びで、怪我の治った事

・植田より広き傾斜の草刈りを足踏んばり  
て刈りて行くなり  
高橋 迪江

・植田より広き傾斜の草刈りを足踏んばり  
て刈りて行くなり  
高橋 迪江

・お祭りはすべて取り止め街は今静止画像  
のような世界に  
コロナ禍による外出自粛の為、外を見て  
止画像」の表現が的確で、ずっとその画面  
の中に入つていつてしまふ。

・ウイルスは日日に変化の兆しあり問われ  
ているか地球のわれらは  
感染症に対してもう春の大急ぎですべての大根  
を抜きとつて耕してきた。次に植える作物  
は決まっているのだろうが、季節の変化を  
迎え、仕事の忙しさを思つて心は急かされ  
るのだ。

・怪我の癒え今年初めてトラクターへ夫を  
言祝ぐ二羽の青鶯  
一斉休校中の歌だろう。類型歌はあるう  
が、雨の中のテニスボールが学校に行けな  
い子供達と重なつて見えてくる。

・青菜木苑ホッホウホウホウと鳴くという  
優しき声に触れたいまは 藤田しん子  
青葉の頃から夜に鳴く、名も美しい鳥に  
愈しを求める作者。鳴き声の表記が歌を印  
象的なものにしている。

・通りがけつづじの花を中心にして見知らぬ  
家人とおしゃべり弾む 松井 千明  
人は美しい物を見ると思わず誰かに話し  
たくなる。「つづじの花を中心にして」の具  
体が、会話の聞こえこうな風景を思わせる。

・あたたかな空気を感じめざめればかすか  
に聞こゆなつかしきこえ 森田 由美  
「めざめれば」で夢と解り、一首の独立  
は保たれている。かな書きの多さも夢の不  
思議な感覚を思わせるのに一役かっている。

・香りたつ檸檬の白き花さやか身をつらぬ  
きて吾をとらえる 山之内香代美  
花の色の白さ、その香の高さが同時に耳  
目に入つて、張りつめた一首となつた。

・桜島温泉目指し夫誘う青天なれば「よか  
ど」と言えり よしとみゆうこ  
御夫婦の睦まじさが、方言の良さによつ  
てより温かみあるものとなつてている。

仕事の歌は予想通り少なかつた。社会の  
事象を追い描寫する歌から一步出ようとす  
る時、難しく感じるのは私だけだろうか。  
コロナ禍の多くの歌を読みながら思つた。

■八月号C欄批評

マスクに個性を

中村 恵子

カタクリの便りをくれし友が逝くカタクリに似て春の夜ひそと  
カタクリは紅紫色の花がうつむいて咲く  
地味で可憐な野草で、その佇まいは茶花と  
しても愛される。「カタクリが咲きました  
よ」と便りにあったのか、あるいは絵手紙  
だったのかもしれない。ひとつりと透って  
しまった友達はきっと人柄もカタクリの花  
のようであったに違いない。

五月七日やっと生まれた孫殿に太く育て  
と祈りをこめる

高澤 匡子

娘さんは初産で予定よりだいぶ遅れた出  
産だったのか。コロナウイルスのこともあ  
り心配は尽きなかったであろう。孫殿の表  
現にユーモアを感じ、太く育てに万感の想  
いが込められていると思う。

朝あさの鏡に映すわが面に美しき心の薄

化粧する

石田 安子

傘寿の作者のこの心意気。本当にそうあ  
るべきだと自戒の念を込めて共感する。年

齢を重ねるほどに面には心が映し出され  
のかもしれない。

・孫三人朝餉の卓に春の風リボンの制服詰

襟三つ編み

稻家 和子

幸せそうな朝の食卓。三人のお孫さんの  
特徴を端的にとらえてそれぞれの様子がよ  
くわかる。三人を一首に詠みこむなんて、  
なかなか出来る芸當ではないはずだが、成  
功しているのではないか。

・一輪のハナミズキ川面に漂いて心ひとひ  
く春光に舞う

風早 公恵

川面を漂う一輪のハナミズキに作者の心  
のひとひらを重ねていると読んだが、真意  
はどうだろう? 美しい調べの歌。

・遠くバス停に立つ

久保 洋子

学校が遠くて朝早くバスに乗って通学す  
る村の子供達の姿を、まだ寒い季節の上に

眠た氣でかわいそうだと優しい眼差しで見  
つめている。宝なる子らのフレーズが効果  
的で少子化の時代、子供は宝。まして過疎  
の地であれば尚更であろう。

・遠くある月や火星は静かなり地球の混沌

知らずに廻る

出口 和子

スケールの大きい歌。コロナウイルスが

念頭にあるのは間違いないと思うが、我ら

が地球の抱えている問題はそれだけではな

い。戦争や飢餓、貧困、差別や人権侵害、  
温暖化による自然災害等々枚挙にいとまが  
無い。それでも混沌とした地球もまた廻り  
続ける。

・白鷺のにごりなき白際立ちて緑の萌ゆる

里山に映ゆ 首藤 悅子

カラー写真でも見ているような気にさせ  
られる視覚に訴えてくる一首。たぶん快晴  
で空も青く澄み渡り、新緑のなかで白鷺の  
そこだけ一点の白さに目を奪われている。

そんな作者の姿まで目に浮かぶ。

・色柄に個性のあふれ和みたりマスクは白  
と書いていしに 関根 正明

従来の白一色ではないカラフルで個性的  
ないいろいろなマスクを目にして、素朴に驚  
き感心している様子がほほえましい。どち  
らかと言えば私よりマスクが主役の歌に思  
われて、それがかえって新鮮に感じる。

コロナウイルスのせい今やマスクは必  
需品となり、ファッショニの一部になつて  
いる気さえする。そのせいかマスクの歌が  
多く見られた。マスクを作る、作ろうと思  
う、買い求める、そしてマスクと自分や他  
人の関りを詠むというところか。それぞれ  
にみんな違うし、巧みな歌は何首もあった  
が、「マスク」がたくさん並ぶとどうして  
も印象が薄くなってしまう。

■八月号オリーブ集批評

歌集に入れたい歌

国原喜美子

出詠の際、歌の一連で意味を成り立たせることがないか。あるいは、詠む側も読む側もその時期の社会情勢を共有していることから、一首の歌以外の情報の助けを借りてはいいか、と自分に問いかける。

今回は、一首のみで自立する歌、経年に耐える歌という視点で選んだ歌八首。

・塘へと鳴き帰りゆくひもす鳥辺の立ち話  
決着つかず

島根美智子

「塘」という字、カラスを「ひもす鳥」と呼ぶのが面白い。日も暮れようというのに辻で長く立ち話をする人達。話の内容が分かるか分からぬかの位置にいる作者の心の距離感がいい。

・けふ二度目の間違ひ電話の受話器置き

か淋しゑ春の黄昏 寺尾 妙子

「春の黄昏」はそれだけでもの悲しいのに、なまじ電話がかかり、しかも一度とも間違ひ電話。「何か淋しゑ」が独り言めいていなせか逆に寂しくはない。それは歌のこ

ちらに多くの聞き手がいるからだ。  
・冠羽揺らすコサギの夏が来て見えないものに耳すませいる

西堤 啓子

コサギは繁殖期である夏に冠羽を伸ばすという。生き物にある生命の営みのサイクル。そういう見えないものが自分をも突き動かすのでは、と目ではなく耳を澄ませて

いる作者。と、私は読んだが、読み手によつて下句はいろいろに読み取れるだろう。

・散歩するスピード互いに差ができる二十一年続く友との別れ

松本多摩子

一生続く友というのはなかなかない。離れていれば自然消滅という楽な終わり方もある。作者の場合は歩く速さの違いだった。心の内は語らぬままの体言止めが佳い。

・掃除機の吸ひ取る日常の塵を捨わが独りなす日常も捨つ

山本 孟

家の中の塵ほこりの多いことを掃除機を扱う人は実感する。また日常の家事のなんと多いことか。作者はそれを独りで担つて

いる。歌で心を解き放つ作者。状況は異なる。歌で心を解き放つ作者。状況は異なる。歌で心を解き放つ作者。状況は異なる。

・掃除機の吸ひ取る日常の塵を捨わが独りなす日常も捨つ

山本 孟

家の中の塵ほこりの多いことを掃除機を

会情勢の共有が前提の歌、と課題を投げかけたが、七首全體で心ひかれる場合もある。高橋啓子「雨蛙」七首、福光敬子「みち」七首。「雨蛙」は車のトランクにいた雨蛙の発見から解放までのストーリーで読み手も心躍る。「みち」は七首のどこにもコロナウイルス関連の言葉はないながら、ウィルスとの関わりを詠んでいく。歌集を編まれるとしたら、この七首はどう扱われるだろか、作者に聞いてみたくもある。

が、最後に紅が見えることがうれしい。

・蛇円山の波打つような稜線のかすかに見えて黄砂するけし

若林美知恵

固有名詞が効果的。山の名や「黄砂するけし」から中国の雄大な景色のようにも読み取れる。「蛇円山」は広島県福山市の山

のようだ。

・セロファンをとけば彈けそうな濃い緑ア

ジアンタムを食卓に置く 小原 香里

シダ科のアジアンタムは小さな鉢植えでも株立ちの樹木の様相を見せる。きつちりと止められていたセロファンをほどくと枝葉を広げる元気のよい鉢。それだけで食卓にも自然が現れた。一句の字余りが枝葉の広がる瞬間を感じさせる。

# 作品 A (力行続き)

金光昭子

重きつゆの空

・朱

距離おかれ嫌われている心地して太陽見上ぐソーシャルディスタンス  
語りくるオンラインでの言の葉はやさしくあれど平面を出す  
ウイルスは重みないのに重たくて暮れるあじさい間に入り行く  
無観客試合の巨人阪神戦ミットを擦る音の聞こえ来  
つゆ空に十葉の白ひっそりと巡りきたりぬ友一周忌  
子を前と後ろに乗せて若葉道ママチャリ軽き若かりし日よ  
八人の七十六歳のボランティア頼りあいつつ四半世紀過ぐ

金近敦子

蝶

・昂

庭には奇蹟があるやうだ。八月の庭、蟬時雨の再来

長雨の後の日差しにアカシアの緑はミツキをふはりと守る  
花水木の樹下に在りしニハタツミ幾百幾千の波紋結びき  
水色の美しき歌集の表紙にはカバーは無くて裸足のままで

法要の競経に合はせて蝉ぜみは夏の光を受けて歌ひぬ

実物大の蝶の刺繍を持つ白きブラウス壁に掛けをり  
法要後、蝶は飛び来て夫の手の小枝に留まり羽根休めする

蒲原清美

勇気の発表会

・洛

コロナ禍に勇氣ある師の発表会初出演の園児も三人  
四十年をその師に従きて続け来し娘に仰ぐ師のいます幸い  
七歳に始めしピアノ娘は四十六歳七つの息子と連弾なせり  
娘と友は共に講師のアンサンブル軽く爽やかなタンゴのリズム  
ピアノ音とエレクトーンとのアンサンブル タンゴの調べ心に満つる  
五か月をマスクばかりを縫つており手許のくるい指を刺したり  
異音たてミシンが止まる爪を刺し指貫きて針が折れたり

河上悦子

めぐり

・昂

牡丹の花紫陽花朝顔葉鶏頭 空家の庭に季節のめぐり

咽せるようにハーブのみどりの香り立ち空家の庭はひっそりと夏  
ひと抱えもある擂鉢に生蛸を揉む母一言「もつと塩を」  
熱熱の蛸飯を盛り届け来る押し車の母真夏の近く  
「行って来ます暫く我家の別荘に」廁に向かう父の口上

「なんとなんと」世間話をまず一つ医師を前におもむろに父  
靴下の綴いゴム跡鮮やかな両足のむくみを父は言わず

川崎 富美子

白き髪

・渚

われなりに纏められもす白き髪齡を氣にせぬ時をいま持つ  
育ち良きトマトやオクラ唐辛子に今朝も目覚めし自讃のひとり  
鉢植えの野牡丹のつぼみ生き生きし我が花好きを知る人の恩  
プランターに差し芽の根付く薔薇の朝百万本の園を夢みし  
深爪のなおりし今朝は食器など洗いも拂り水音かろし  
おくら四本ひしめき合える水無月の朝な朝なに腕くむひとり  
物置に子猫三四匹鳴きやままず捨てんとしたる足にまつわる

川崎 百合枝

承諾書

・昂

失敗もあると明記の承諾書医師を信じて署名をなせり

ニユーコロナの休校のつづく校庭にさびしさを鳴く雀の一羽  
「短すぎた」医師の会話に耳ますますそれってオペの失敗の意味  
椀伏せたような眼帯つけられて無事に手術の終わつたあかし  
目の検査上見て下見て右向いてこんなゲームがあつた気がする  
他の星に住もうなどとは思はないこの地球の人と仲よくしたい  
読んでくれる人もわからず書いた手紙慰問袋の行方を思う

川辺 京子

梅雨

・大

雨あがり曇天に聞く遠くの蝉やつと鳴いたか今日は祭日

豪雨さり久の暗天に暑さもどる蝉の合唱に夏風過る

日の光さし来て夏日蟬の鳴く豪雨を降らした梅雨まだ明けぬ

宇治の里道辺にひるがお群れ咲きぬマスクに想う真昼の幻

幼日に好みし草花咲いているおおいぬのふぐりにつゆ草の青

家兎は足のまわりをグルグルと回りついてくる我との歩み

長からぬ廊の絨緞を往復の我が足下を兔は疾走す

閑西正子

夫のこと

・洛

夫のこと 検査結果を知らされて噩然となりたり足元震う  
夫のこと 食道癌を患いて食事も苦し咳き込む日々も  
病室は緩和ケアの一ヶ月声をかけても反応薄く  
夫のこと 抗がん剤の効果なく精いっぱいに弱る体力  
夫のこと 死との対面別れどき静寂続く心の重き  
ありし日の夫の写真に想うことけんかも笑める日も又ありし  
今ははや遠くに逝きしとどかぬ日 夫の好みし沖縄の海

北浜玲子

目覚し時計

・夢

終日をクーラーの部屋に籠りいて炎暑の街路を恐れ持ち眺む  
朝六時いっせいに鳴く蝉の声停止ボタンなき目覚し時計  
照りつける日差しの庭に信念を貫くように高砂百合咲く  
山道を下りくる部活の生徒らのつきつきわれに声かけて過ぐ  
手の皴の深きを見つむひたひたと寄せ来る後期高齢の波  
玄関に飾る子よりの沖縄土産ガラスのエンジェルフィッシュ涼やか  
巡り来し七十五回目の原爆忌コロナ禍の式典三密避ける

黍嶋金平

秋の陽

・羊

夕月夜 身を横たぶるひまありて、横たぶるままに、すでに淋しき  
稻熟る秋津嶋空晴れわたり。飢うる時代の 呼ぶ聲かそか  
秋の陽の日暮れ色のはかなけれ。上弦の月は、夜の色もつ  
秋の陽はもはらみじかし 玉かきの陽にふるべきか 言靈のふみ  
稻わらを積みてひとり遊びせし むかしの神と 遊びしを思ふ  
たふくとも塞地の田にて 粕穀を燃やす火男と 言はれたりけり  
山あひの八十八の百姓の、手にはなるなり。この玄米は

木村恵子 青田

・茨

楠元のぶ子

ミヨウガ

・葦

白鷺の胸の高さまで苗は伸びて一面青田の広がりとなる  
広がれる青田を渡りゆく風の小波と光る裏葉光らせ

手に乗する緊りし青梅の小さき重み欠けなき珠実の美しきかな  
天地の恵みを頂き黄金色梅を漬けむと大笊に洗ふ  
雨音は間近にありて傘の中小さき安らぎに歩みてゆくも  
仁王門へ導く細き石段の右も左も紫陽花のはな  
車の流れ途切れ隙を突つ走る猫は向かう側に用事のありて

許田邦子 法務局

・沖

迫らるる名義変更理由書のダウントロードにまづは躊躇

証明書願書理由書摘要へむと手はじめに行く法務局へと  
提出の書類十枚調べて名義変更済ませる無事に

確認のボタンみな押すうつるやもタッチパネルで支払ひ済ます  
順調にメロン大まで育てしが西瓜腐れぬ照る日が足りず

感染を恐れて止めしスーパーに試食係の消えたる売場  
食べものは天地のめぐみ大食を競ふ番組のチャンネルを変ふ

くずはらりつ

孫と猫

・そ

国原喜美子

梅雨明く

・昇

知つてゐる怒ると怖いりつちゃんを猫を指南す孫は長男  
自己中のボボとシャイなチャチャ人になぞらえ楽しむ孫は

娘と孫と居間で言いあう夕まぐれきよどんとボボは一人を見上ぐ  
猫二匹首輪の鈴を搔き鳴らし帰宅の吾の足にまとわる  
冷蔵庫見上げ鳴きたる猫二匹竹輪欲るときちゅーる欲るとき

じいちゃんにやさしくないと言うよりも冷たいと孫吾を見つめる  
りっちゃんの理想の暮し知つてるよ晴耕雨読明日は雨だ

氣に掛けて來る先達・友のあり一人じゃないと勇気をもらう  
近況を地中海誌の歌に知る会えない今を作歌に込める  
長梅雨に地に一面のうす緑ニセアカシアの咲くを見過ごす  
戸を繰れば白青紫次々とアサガオ咲きて会話のはずめり  
今夏は当たり年なるや大量に茗荷とれたりご近所さんに  
採れたての茗荷シャキッとほろ苦し大人の味と食欲ませり  
ご近所に配ればしばしば料理自慢みようが飯から天ぷら膳まで

久土目薰 後期劇場(二十三)

・桃

薄暮る巷の空の低きゆえワンブッシュに開きいる傘のひらめき  
苦瓜の蔓のさみどり伸びゆけり添え木に誘い雨のあがりぬ  
首ふりも何んならぬなり扇風機の持ちこたえし年数を労いたり  
駄駄つ子のごとき扇風機のさまにもどかしく切りいたりそれまで  
折々に植えたるハーブの茂りいて隠れ咲きいる露草のいろ  
いくたびの衣類の処理に残されし赤きシャツなり翁寿は洒落者  
ま赤なるシャツに活氣を取り戻し朝の日照りをかゝとばしいる

外にあれば気づかぬおのが汗のにほひいやがみ床拭く胸元にたつ  
朝日受け開かむとする稻の花にはか降る雨に濡れそぼちをり  
雨よけて葡萄の下にしゃがみて庭土うがつ兩粒見をり  
畑に置く古瓦そつと持ちあぐればてんやわんやの蟻の集落  
畑を打つ蒔き植ゑ採りて炊ぐ食ふ好きなこと皆ステイホーム  
稻の穂にあまた張りたる蜘蛛の巣が朝露まとてる梅雨明けの朝  
スーパーの入口に並ぶ造花束にコミニスジ止まる翅動かして

## 塙嶋次江

三密

・相

来栖万佐子

紫陽花

・う

密避けて六十名を半数に景色を活ける華道研修

ひそやかに密を避けたるホールには役枝整える和鉢の音

仰向けに動かぬ蝶を摘みあげ壇に乗せれば礼言わざ去る

隣家の庭から嫁したる紫の花の名前はヤナギハナガサ

長茄子の写真挙げればすぐさまに親しき友のコメント入る

繰り返しマスク着用要請が量販店も野菜市場も

イソジンがコロナ予防に効くという知事の一言夫を走らす

## 塙嶋義文

新語

・相

ディスタンス ニューノーマルと次にコロナ社会に新語の流行る

豚汁の美味なる店は閉じられて洋食店の看板掛かる

退職時植えしアベリア垣となり小学生の背丈を越える

有れば良し無ければ無しの生活に慣れてしまえばこれもまた良し

災害に示すステージ為政者の言葉遊びは民に届かず

スプレーの消毒液は焼酎の精製過程の賜物と知る

本日の感染者數一名にいすこの誰と不安の残る

## 倉島とよ子

とび出す蛙

・信

コロナ禍の自粛緩和のボランティア一時間のみに図書館へ急ぐ

図書館の死角の床に眠る人みみず脹れの脚 誰・なせここに

イチイの木切りて五本のひまはり立つ大き葉つばが北窓に揺る

夕暮れに控へ目に鳴く時鳥「トッキヨキヨカキヨク」一緒に咳く

「おかあさん」呼ばれてむつとする屋下がり玄関に立つ若きセールス

今夜から記録的大雨と手話ニース顔をくしゃくしゃにして伝へたる

水やりの黄花の鉢よりとび出す蛙三日つづいてはてと考へる

## 小泉澄子

海霧

・茨

海霧は街並白く包み込み早や点したる家の灯にじむ

目に見えぬ小櫻雨降るを見つめいし今あるわれの一つ事見つめ

残すほどの事にはあらねど思ひいるわがいきはてのあれこれのあり

子の運転道が違うと思う須臾ああ引越したんだ家へはこの道

高台のわが窓から見る行き交いはのぞき見の気分小悪人めきて

待つ間に着きそうないに日陰選び歩く十五分バスが追い越す

長雨の止み間喜びぶらぶら歩き海も鉛色なれば遠く眺めて

紫陽花の今が見頃と電話あり友を誘いて一日あそぶ

栗山川紫陽花ロード樂しかり何年振りかと話はつきず

道の駅好物求めそれぞれに来年も又と約束かわし

長丁場新型コロナウイルスの日々のニュースをうんざりと見る

裏庭のおしろい花の匂いきてカーテン引くにおしき夕暮

八十路すき友とかわしし約束は期待通りにゆけばと願う

誘われて初夏の白帽斜にかぶりペットのごとく人につきゆく

## 黒瀬紀子

黄蝶

・岡

甲 田 啓 子

令和二年夏

・天

こなかよしと 人生

・鹿

この夏は順序たがえてクマゼミのニイニイゼミに先がけ鳴けり  
今すこし種をつなぐらしありなしのニイニイゼミの声の聞こえ来  
カマキリの子小庭に生まれてここかしこる外なし生き行く力  
青田道行く吾をさけ田蛙の小さき土くれピヨンピヨン跳ねる  
コロナ禍の令和二年ぞ祇園会の山鉾巡行中止となりぬ  
告知なく病院出でて息をつく見上ぐる空の広大無辺  
さんじゅう三十歳の男優の自死惜しむなり光源氏のイメージありし

越 地 幸 子

母の笑み

・朱

さみしげな鏡の中の母の笑み吾と重なる七十路生きて  
盛り上がる大葉の上に紅の蓮花咲かず灯を点しつつ  
風煮る氷川参道夏木立櫻大樹に光こぼる

ハイタツ途中で止めるゆくりなく友との出会い恐きはウイルス  
バス中でクシャミをすれば一齊に振り向く視線ウイルス憎き  
宣告は余命三ヶ月丹念におさげの少女齒磨きをする  
両親の墓参をすれば黒揚羽音をめぐりて繁みに消ゆる

後 藤 元 子

トマト

・葦

七月のカレンダー・手帖少しづつ書き込みあまりしかし消されゆく  
距離はなし会話はずませマスクの中声は聞こえず友との集い  
まだだと気が抜けないこのウイルス感染拡大首都二県  
ミニトマト真赤に染まりすずなりに仲よこよしと朝つゆに光る

ミニトマト大玉桃太郎の香り漂う朝の食卓夫旨いと「一言」  
明日聞く朝顔のつぼみふくらと朝には赤青紫咲きて  
夢の中幼き頃に歩いた道三人姉妹での道この道

小 林 サ ゆ み

ケー キ作り

・福

ベランダのゴーヤの蔓のぐんぐんと伸びて明日はわが背越すらん  
勢いの趣くまさにゴーヤの葉茂りてクリーンカーテンとなる  
梅雨明けの今朝の窓辺に蟬の声ひとときわ高く響き来たりぬ  
魔女ならば何を混ぜるやこの夜更け我はボウルに卵混せいる  
今日までが賞味期限の生クリームならばとこれからケー キ作らん  
八月の今宵は満月スタートムーン名付けはアメリカ先住民族  
オレンジのスタージェントムーン眺めつゝ我は夜更けにケー キ焼くなり  
み仏や亡き人に会えると思えば死もまた樂しきことにあらずや  
腹いたためし吾子に勝る者は無し慈母を恨まず己れ正さん  
夭折せし友が教えし「友恋ふる歌」唄えば彼の心しのばる  
コロナ禍や梅雨の家籠りつづけ居る小人閑居の老いの終活  
才無くばひたすら努力の他はなしこの世に生きて尽くすのみなり  
頭脳と手足や身体の細胞が内部反乱己れ見失う  
人生深淵にして計り難きも我が行く先を極めんとぞ思う

小 林 翠

大荒れ

・宙

声あげて空に向かって飛び出した体震わせ蟬の一つが  
ある時は朝の水やりストップし繁みの中をそつとうかがう  
朝ごとの庭に聞こえる蟬の声高くまた低くおだやかな日日  
異常なる雨降り続く列島にゲリラのごとし地方水害  
蜻蛉たち菜園の上を巡回し風にのりたり空の彼方へ  
ベランダは一段高見に菜園の小雀二羽の土をついばむ  
最上川東北の地の洪水よテレビの放映七月の大荒れ

小原 静子 梅雨

・渚

片仮名語の多き都知事の記者会見かたえの孫が訳してくれる  
勝ち目なき野獸たちとの知恵くらべ防護の網につまずき転ぶ  
草ぐさは日毎の雨に勢いて三日見ぬ間に膝丈をこす  
改修の成りたる屋根に降りて止み又降る雨音安らぎてきく  
風雨強しと繰り返さる報道にブルーシートの家家おもう  
豈かさを求めるさを地球人災害多きは天の怒りか  
災害とコロナの映像切なくスイッチを切り歌集ひもとく

駒崎五恵 特産マンゴー

・葦

生い茂る庭の草引き青嵐の自然の涼に生かさるなり  
背の高きもみじ葵の花真赤梅雨明けとななりあぶらせみ鳴く  
そよ風にゆらりゆらりと遊びてネットつかみぬゴーヤの茎は  
宮古島特産マンゴー賜わりぬ旨い食べ方添えてありたり  
コロナ禍に日常まぎれて不安なりひまわりの花咲きて輝く  
遅植えのトマトたわわに実りたる数の多さに勝ち誇れたり  
ルリ玉の来季夢見て土返し枯れたる花にそっとふれいる

小宮山玉江 やまゆり

・羊

庭の辺を香りに満たし山百合は誇らに咲けり長雨しりへに  
一本の茎に七つの大輪を風にゆらして王座の風格  
山百合の香りが人を引きよせる散歩の堀ら庭に入りくる

コロナとは目に見えない微生物目のある人間は恐れてやまず  
草の実を宿して戻りきし猫も知らずやコロナの恐ろしさを  
マスク縫ふかたへに昼夜の猫の居て口腔みせてあくびする  
少しづつ日付の記憶うすらきて今日なす事をあすに持ち越す

今野勝江 梅雨の晴れ間

・朱

通学の子らの自転車走りぬけ白きアナベル甘き香搖らす  
梅雨晴れの朝にひるがる峰峰のゆったりとして夏山の色  
指先を染めて採みたる赤紫蘇の梅漬けの樽に色冴えわたる  
田の畦に茶受け畠みしそよぐ風父母の声耳に残りぬ  
手探りて掘る新じゃがのひとつづつ匂いおこせる梅雨の晴れ間に  
白露のにじむ紫陽花つややかに川の廻りに盛りあがりたる  
さしかける傘にひろがる梔子の花香りてや玉露光る

今野勝子 雄勝石

・湾

あくまでも予報であれよ天気予報外れて欲しい被災地の豪雨  
震災に駄目かと思ひ雄勝石は古代のロマンの「雄勝ガラス」と  
雄勝石の石粉は古代のロマン含みほどよき重厚感に「雄勝ガラス」と  
二億年ものロマンを秘める雄勝石は石粉を再生し「雄勝ガラス」にと  
震災の苦難の末の賜か古里の誇り「雄勝ガラス」は  
除湿機の風のいたずらかマフラーがワルツを踊り若き日頃たす  
縁側に西瓜の種を飛ばしし日父も母も居た昭和の幻

紺野紘史 人間らしさ

・湾

コロナ禍に巣ごもり続き冗談を言い合う妻のいるあたたかさ  
どうなるの人と人の繋がりはコロナに「密」は忌むものとされ  
雨降りと日差しを遮る傘なれど今は「密」からのディスタンスにも  
コロナ後のデジタルの世界に若人よ失うなれ「人間らしさ」を  
真新しい雪は白色に染めゆくか過ぎ季節の「あわれ」を覆い  
弱々しき冬の日差しに裸木は庭に影か寒さを濾過し  
君の居ない夜の留守宅静もりて思い出のみが眠りているよう

斎藤順子 共通点

・信

雨降りをいやな天氣といふ夫雨も時には降らねばならぬ  
心境の変化なるやも老い夫は午前も午後も烟に通ふ  
このところ余り休まずよく働く夫においしいもの作らねば  
レジを打つ背の高き女性若くして人柄もまたおほかならむ  
平穏にただ平穏にと祈るのみそれ以上なることは望まず  
息子の嫁と互ひの夫のこと語る共通点に笑ひ合ひたり  
咲き終へし菖蒲の花を摘み取りぬありがたうねと声かけながら

斎藤信子 送り火

・森

静静と送り火焚きて精靈の十万億土へのお戻り見送る  
むらさきのアガパンサスを數多切り夫に供うる今日、月命日  
桐の花たくみに影りし短冊懸作りし友の形見になりたり  
瀬戸市民ならずも嬉し初々しき十七歳の名人の誕生  
母は旅に、独りおかれし三歳児ゴミ散る中に絶命なしおり  
投げられしビニール紐を妻に巻き自は濁流に呑まれてゆきぬ  
陰性となりても様様な後遺症残るコロナ禍ただただ疎し

酒井牧 梅雨明け近し

・萬

しづもれる朝の吾が庭何かるイノシシの子だ 吾が目疑ふ  
何処より迷ひ来たるか猪は脱兎のごとく逃げ去りにけり  
逃げ去りし猪の子は無事なるやはるか遠くの山を見つめる  
イノシシの親は捕らはれ子は逃げしと人伝に聞く梅雨の夕暮れ  
水道の流れる水を欲る猫は蛇口開けよと吾が背をたたく  
老い一人いつしか猫に使はれていそいそとする日日となりたり  
ばうばうと草生ひ茂る庭の辺にミカワリ草の朱が目に染む

酒田鈴子 雨季

・霧

音立て太き雨足地を叩く天より地へと占めくる剣  
コロナ禍に星に願いの文を書く災害相次ぐ黒雲よ去れ  
大粒の雨を避けたる鶴か何と喰るマンション道路  
「今ですよ」雨の合間の蝉しぐれ雲よひととき蒼天を恋う  
新しきエプロンドレス着てござる楽しげに見ゆ六地栽様  
此処かしこコロナウイルス潜めるも仕事にレジャー絶えぬ人波  
今までと違う生活スタイルに合わせる道は出口なき道

坂本禮子 小さな幸

・茨

首すじにぱとりと冷たき青時雨樹下に梅の香ほのかに漂う  
殊の外梅干し好む友と野に貧しき戦後の話は尽きぬ  
よちよちと梁に出で来し子燕を二羽の親鳥かん高く呼ぶ  
電線の親の燕の呼ぶ声に飛び立つ子燕からすが掴む  
初の子を取られし燕は日をおかずまた巣箱りぬ雄に見張らせ  
正面はどこ瓶に挿すもじづりをくるくる回す絵筆を置きて  
暗き空に大きな池のあるらしく堤の切れて今日も土砂降り

ふる里から届く食材無農薬健康と長寿 守らんとする  
今は亡き母姉よりも七十代越えんとするは 八十路まぢか  
旧知から七十代を生き越して家族の絆尊しと教え来  
わが作品入選という小さな幸ひかてに励まんとする  
ふる里は夫の手入れにて烟おこし野菜畠に紋白ちょう舞う  
明日あるもこの世の生き方如何にせん台風・コロナ禍のく題う  
外出はマスクと共にわが身守り外地に行くこと安全圈は

坂口正子 猪の子

・信

佐川久光

アカシヤ

・福

アカシヤの苗を植えんと少年のわたし一人を父は連れゆきし

水郡線開通間もなき切通しに早くもなびくアカシヤの幼木

アカシヤの日本へ渡来は明治にて北アメリカが原産地なり

アカシヤは生長はやき樹木にて栽植急に増えて来りぬ

アカシヤの林に父は炭窯を据えたる遠き日のなつかしき

炭窯より炭を取り出す父上は「お前はまだ」とわれを留めぬ

開成山の園の門辺に立つアカシヤ仰ぎつつ思うふるさとの山

佐久間ミツ子

青葉の風

・渚

心地よき青葉の風に吹かれつつひとり歩めり峠の細みち

東の間の梅雨の晴れ間の野菜畑黄の蝶ひとつきらめきており

四季咲きの薔薇のくれない咲きみちてしへ深く吸う蜜蜂ひとつ

一条の細き光をひきにつ青田に消えたりひとつ蟻は

コロナ禍に五か月ぶりの短歌会元気な笑顔みな揃いたり

チャンネルを変えてもどこもコロナのことひとり静かに畑へ出でゆく

コロナ禍にふさぎがちなる梅雨どきを元気に増えきしメダカを見つむ

佐々木美枝子

悼む

・湾

紫陽花は花のかんざし重たげに女あるじの亡き庭に咲く

コロナ禍に演奏会は延び延びに十月になるとも怖い東京

皆さんと朝の体操生き生きと大きな掛け声一・二・三・四

夢を追い邁進する人の夢叶えど自死する人ありこの世むずかし

俳優の三浦春馬は自死を選ぶ何故に急ぐや死への旅路を

NHKの或る番組で彼を知り密かに応援続けいしものを

もう既に着いたでしようか天国にそこでゆっくりお休みなさい

定金崇恵

山法師

・羊

山法師濃きみどり葉に朝露の七色光り一瞬の幸

遠く住む君とラインでつながれて時を同じく七〇〇〇歩あゆむ

闇深く川辺に光交差する螢舞いくる静寂うれし

コロナ禍も浴衣を装う若きらの素足まぶしき七夕の宵

コロコロと親しげに呼ぶゆとりの友ウイズコロナの今を生きいる

スーパーにマスクの顔の目が合図誰だったかとアルバムひらく

巣こもりする友にふるさとの香頃づくる瀬戸の饅と朝取りの桃

さとうちえこ

頬杖

・そ

花首はくす玉のことはなやまと高貴を放つ芍薬の白

坊の津の夕暮れ深きせせらぎに蟻の舞いはゲンジと伝えき

声弾むきれいな水に群れ翔ぶと蟻のひかりを電話で語る

なべてみな死期をむかえる公平さ貧富の日々の序列などなし

分岐路に十七歳の少女立つ迷う進路にさらなるコロナ禍

多感なる少女の心何思う進むべき道明日にとまどう

進学か就職するかコロナ禍にスマホ操作し頬杖の孫

佐藤絹子

姉の手づくり

・革

枯れ花をちぎり取る時切なさを高齢の身を重ねてしまふ

A-Iが面接採点することに首を捻るは時代後れらし

快挙成るスパコン富岳世界一コロナの憂うつ消せる朗報

緊張を解きてうつとり立ち止まるアガパンサスの二十五本に

小包の中に手鞠と手袋が九十四歳姉の手づくり

憂さ晴らしホームステイの退屈を姉の手づくり手鞠で遊ぶ

身に沁みてホームステイの苦しさを檻の動物耐えてる事が

佐藤光正

この夏

・鴎

篠原まり子

いのち

・羊

空梅雨の日の長ければ鶯の声すら細く寂しく聞こゆ  
健康に良いと言われていろいろと試してみれど三日と持たず  
昨日今日の寒暖の差の激しさに長袖半袖ちぐはぐに着る  
雨も無くひんやりとした梅雨の入り少し気になる農家出のわれ  
この夏は暑くなるのか寒いのか予報士さえも決めかねている  
青しそをボロボロにして姿なしお見事なりと皮肉るか虫めら  
われの日を避けて伸びゆく夏草はお前の為にと言いたげに咲く

## 設楽まゆみ

御守り

・羊

いただきしオクラの苗は青あおと本葉茂らせ夏の食卓へ  
母老いて何を想うや枕辺に繰り返す言葉の虚しきひびき  
生あれば痛み苦しみ切れ目なく老母を襲う半夏生の雨  
水晶の御守り肌にかた時も離さず頼る白寿ちかき母  
その白き母の乳房吸う揺りかごにわが瞳はあまねく澄みいん  
歯黒とんば羽たてに閉ず夕まぐれ物影に見る愛しきしぐさ  
指先に蝶の乗りきてこそばゆし羽裏に人の目の如き模様

## 篠原日出子

熱中症

・洛

窓に見る豪雨すさまじラジオは叫ぶ命を守れひとりで守る  
引き揚げで命守られ船に乗る赤子の水葬大人は隠す  
恭子さんの歌に新京を憶い出す纏足の人身近に在りし  
ベランダに育たぬ野性の力ありもじすりの花公園の片隅  
振ること忘れた花がぼつねんと忘れ事多き私の味方  
振じ花の螺旋階段今少し登り詰めれば梅雨明けが来る  
九年目の震災歌集いつの日も死者と向き合い死者と語らう

## 柴田登志恵

旗

・天

ウイルスにおかげ横丁人気なく梅雨晴れのひかり切りゆく燕  
御手洗場の人影すくなき清流にメタカ列なしきびきび泳ぐ  
まつ毛から尻尾のさきまできらめかせ栗毛の神馬朝日に立ちぬ  
梅雨晴れの夜こと星空駆けめぐる神馬の蹄汚ることなし  
白ぢやないと栗毛の神馬言はれつまなざし遠く黙したまま  
白ならぬ栗毛の神馬首あげ黒きたてがみ旗めかせゆけ  
五十鈴川水面きらめく遊歩道おかげ横丁裏側の見ゆ

## 下村とり子

たけのこ

・信

体調の悪しきと医師を尋ねれば熱中症です薬はなしと  
動きすぎると内科医の言の葉は歳相応が万事吉らし  
コロナよりこわきものあり熱中症水分補給しゆつくりせよと  
五・六月動きすぎたる付けらしきクーラーの部屋に無聊を託つ  
食欲なし動けぬままに観念しただゆっくりと回復をまつ  
「いつ死んでもいいよ歳だから」嗜きつつ熱中症におたおたとする  
死ぬのはいい病氣で苦しむのはいやと脳はかたらう心うなづく

六月の声聞く頃に室の廻りの土手にたけのこ出はじめ  
たけのこを待つ人いくたり順番に配りて廻る例年どほり  
朝朝にすつくるとのびるるだけのこの英気の欲しや病む膝をなづ  
一日に数十種ものびてゆく見落とす数多背丈に及ぶ  
これ以上増えない様にとだけのこの芽を出す限りひた切り捨てる  
みぎひだり前後も止まり歩車分離の青を渡りぬ背筋のばしで  
歩車分離の斜線の先の薬局へ処方箋薬もらひて久し

庄司菊枝

嶺岡山

・渚

いつになく激しき雷雨の去りしあと夕日に樹木の緑あたらし

デイサービスの仲間もそれぞれ距離をとりボツリボツリと来し方語る

コロナ禍の新語覚えに気力増しデイサービスにも対話深めし

孫・ひまご受話器に弾む声になお会いたさ募るコロナよ失せよ

嶺岡牧の白牛初めてこの目にし何を聞かんもコロナ禍にあり

嶺岡の山に銅わるる三等の白牛仲よく木の間往き来す

房州へ嫁ぎ六十余年過ぐ嶺岡山に亡夫重ねき

がうがうと滝の如く雨降りて止みし後の夏の日煌めく

青空の下紫の花咲きて南の国めく時計草たのし

網焼きの煙芳し青唐辛子、有田の皿に香る団鑿

長雨の明けて輝く夏生るるレースの袖ゆ風涼やかに

梅雨あけし心療内科のロビーにも光の射してメダカは泳ぐ

雨続く厨に漬ける紅生姜カビ生れぬやう焼酎注ぐ

雨止みて夏日煌めくこの国にコロナウイルス去れよと祈る

菅野み江

非常ベル

・北

杉原令子

土

春

ウイルスの感染を避け十三回忌の舅の法事は夫とわれのみ

読経の音ながるる中に灯明は青白く床に映りて光る

祭壇の床に映りし灯明に逝きし人らの幻が見ゆ

静岡の伊豆特産の「伊豆豆ら屋」というふる里なまり「いいずら」

定置網仕掛ける小船夕光に二人の影がかすかに動く

夜のそい非常ベル鳴りスパーと知れど11番へ自問自答す

すぐ側の図書館にコロナ感染出でわが暮らしに迫りくる夏

隨念京子

夏の日

・天

杉浦詩子

夜深け

宙

大き口開け鳴くつばめ親を呼ぶ軒端に梅雨の暗れ間の陽が射す

雨止めば突然せみの大合唱油断しないで梅雨のただなか

激しき雨に色あせし紫陽花たたかれて地面に伏せて耐える人のよう

アガパンサスはさみでチヨッキン孫が持つ薄紫の群がほほえむ

雨だろうか夜深けにざわざわ騒ぐのはそれとも私の心の気配か

これという不安は無いのにざわざわと夜深けの気配に恐れおののく

あの音は耳を澄ませば聞こえくる夜の深みかただ風の音か

孫生る記念に借りし貸し農園孫達はみな野菜大好き

鍬かつき土とたたかう二十余年機械にたよらぬ手作業ひとすじ

耕せばどこで見てるか鬼のきて虫をつけば尻尾べこべこ

畑仕事いい加減にて過ごす日々草は見る見る吾を包みゆく

きのうまでくすぶりありし奈良の朝今日は静かに陽ののぼりくる

青々と光は満ちてまた暑き季節きたると空を見あぐる

満開の黄色の花につつまれてちょっと一服菜園のすみ

須川千恵香 花火

・眉

打上げの花火はコロナに病む人の細胞目覚め憂さをほぐさむ

幼日に線香花火を手に姉妹火玉を見つめ弾けるを待つ

軒連ね線香花火の和紙造り市川特産残れる一人

混色の花火袋のほとんどが輸入品とぞ時代の波間

幕末に市川花火使命受け盛衰をへて令和彩る

市川の花火大会幕切れか金銀原色夜空を埋むる

人生に重ねる桜より速し打上げ花火は一瞬にして

杉本博子 コロナ禍

・眉

鈴木剛之 招かれて

招かれて

・福

蝉の声湧きあがり来るやうやくにコロナに負けず命をつなげ  
限られし時に急かさる蟬達は異常気象にもてあそばる  
庭松に見る度土鳩止まりる巣づくりなるやあらぬ期待を  
梅雨明けを待ちくたびれし紅蜀葵花のさかりを過ぎてしまひぬ  
梅雨明けに紅葉葵の紅見えずコロナ禍の庭ひたにさみしき  
孟蘭盆に死者を迎ふる目印は紅蜀葵なり花を掲げよ  
父の命日子は帰れぬと電話あり東京との距離今さらに知る

杉山睦子 柏葉紫陽花

・朱

しつとりと梅雨の合間の公園の芝生はみどり色増してゆく  
木槿花小雨にぬれてあわ淡とひと花ふた花むらさきの色  
大き房真白き花に雨が降る柏葉あじさいしつとりとして  
都心よりコロナの波がせまり来る今日感染者百人ぞ越す  
見送りて一年過ぎしその妻も夫の元に旅立ちにけり  
二日前友のメールが届き来て「又いましょうね」スマホに残る  
降り続く梅雨の真中に柏葉の紫陽花咲けり色褪せしまま

鈴木武子

月見草

・朱

招かれて圍炉裏を囲み蕎麦を食ふ友の手打ちの蕎麦の旨しよ  
友の家の庭より見ゆる安達太良山蜻蛉飛ぶ池五百川まで  
安達太良の山夕闇に溶ける頃一つ二つと星の出で来ぬ  
凌霄花散つても散つても咲き出でぬ生きむ生命を掃きつつ感ず  
荒草に負けるものかとねぎ坊主俺も俺もと背競べする  
丑の日は般を亡妻と半分こ二人で食べた夏が近づく  
自己採点は満点近きカルボナーラ片づけ終へ夜のキッチン

鈴木文子 長き梅雨

・萬

雷のひかり輝く梅雨の夜月下美人はひそやかに咲く  
世を詰める父母は亡く夕暮れの明かりの下に切るうすき爪  
かつてなき降雨に列島水浸し梅雨明けぬまま八月に入る  
廃線となりて久しき故郷のボロ電会ふ夕のテレビに  
ひぐらしの鳴く森の上ゆつくりと積乱雲の崩れてゆきぬ  
洗濯物ふはふは乾くそれだけで嬉しくなりぬけふは梅雨明け  
長き梅雨やうやく明けてのぼりくる秋の気配をまとふ夕月

鈴木三津子

思い出

・海

背にあるまるランドセル負う一年生上級生の先頭をゆく  
コロナ休校あけて久しき子等の声マスク一列紫陽花の道  
窓近き電線カバーに巣作りし雀鳴きいるこもりし我に  
あの春に巣立ちし雀親となりこここの匂いにもどり来しかも  
柿葉打つ激しき雨にさめながら豪雨で被災せし熊本の人  
暮れかかる瀬音すがしき千曲川しぶきに濡れて月見草咲けり  
夜をこめて黄花咲かせて月見草朝光に閉ざす色あせぬまま

仏教で国を興さんとする蘇我氏盟主の首塚ボツネンとあり  
飛鳥寺の境内とまごう細き道首塚の位置は道をへだてて  
生垣を抜ければ広き畠地にて夏の野菜は穂り入れを待つ  
明日の朝収穫される唐黍は夕日の中に影長くあり  
今日一日暑さをさせていたる猫今はテリトリーの見廻りに出る  
藤原京の木立遠くに見つついる道づれとなりし猫と並んで  
交通量の多き道路を渡る時気付けば猫は傍らにいて

高 取 尚 子

苛立ち

・岡

高 原 桐

楠若葉

・森

今日もまだ上がらぬ梅雨を怨みをれば午後の雨脚また強くなる曾孫の「雨降りお月さん」の歌聞きて「海の日」ひと日雨を忘れる過ぎし日を返して鏡に映しみぬ妹に貢ひしブルーのスカーフ長雨の一夜の時間の月淡く瞬く星は天の川かも梅雨晴れの一夜の星に願掛ける何とかコロナを鎮め給へよ三歳児転べば吾も危ふかり「痛いの痛いの飛んでゆけ」曲り道に急に出で来し野の鹿へ急ブレークの老の足震ふ

鷹 野 長 子 友の詠

・朱

ペダル踏む農道長く続き行く青田吹き来る風涼しくてやま道を縋いて登れる春日の湯したる緑に吸いこまれつゝ念願のアンコールワットを楽しむと絵文字も入れて便りくれしが踏みはずす苦むす石段ころげ落つ意識なきまま無念の帰国温き身に意識戻らず十余年よく看取りしその子その夫見上げれば梅雨入り間近どんよりと自肅の日々に友の計を知る階段はしつかりのぼりゆっくり降りるがこつと身に覚えさす

高 橋 光 代

長 雨

・渚

パティシエの孫の考案したる菓子の売れ行きの良さ願いつつ食む

降り続く雨に烟草勢いて除草する我を嘲笑いおり

コロナ禍に長雨つづく夜のラジオ藤山一郎「長崎の鐘」

夏みかん食べ尽くしたる猿の群れ餌場求めてか移動はじめる

コロナ禍の收まる気配のなき中に豪雨の災害追い打ちかける

カタカナ語の多くなりたる記者会見カタカナ辞典めぐりつつ聞く人がみな引きこもりとなるコロナ禍の不急不要の外出規制に

ときをりは風のすぎゆく庭隅の桶の若葉は音なくゆれる引きしほの浜辺の磯に朝日照り舞台をなせる蟹も石尊も立山に登りてみればかすみつつ龍神のごとく能登半島延ぶ若き日に春日大社の山藤をなぜか一人で見に行きし旅海棠の花を真中に父の庭花を咲かせて逝きし晩春七色の色鉛筆の青ばかり選びて描く雲の抽象ノンアルコール・ビールといふに酔ふ氣分刺し身に茗荷・大葉を添へて

滝 口 智 枝 子 凌霄花

・湾

おしゃれする楽しみ奪うかテレワーク部屋着のままで働く人もコロナ禍でお預けとなりし母の日の花束届く父の日と共に怒りっぽく昭和の夫を絵に描けどそれでもいいよと気づいた今は孫達の眩しい笑顔に照らされてわれの心も素直にならんフルートやピッコロのような囁りは四十雀のソプラノの声庭隅の羽化した蝶を見送れば夏雲まぶしい光の中へ二つ三つ凌霄花が咲いてきたそろそろ風鈴吊しましょうか

田 口 紀 久 子 童謡

・鳩

「卯の花の匂ふ垣根に」と声に出づ作詞は何と佐佐木信綱口遊む「我は海の子白浪の」低音浮かべ一人のコーラス浮かび来る「夏の思ひ出」口遊めば友と遊びし遠きかの日々もと住みし富田林を思ひ出づ月夜の田園の「蛙の笛」にわが息子幼き頃は童謡を次から次へ飽かず覚え童謡のページ繰りつつハーモニカ吹きたる友を思ひ出だせり夕空に雲の動くを見上ぐれば黒い鳥影あれは燕か

## 辰巳洋子

ウイズコロナ

・葦

「眠ること」一喜一憂とらわれて半年経たり これウイズコロナ  
近隣もこもりて半年過ぎやれば二人の幼児の成長見張る  
息ひそめ不安かかえた半年が早送りのこと季節を変える

長雨が人を愁いに誘い込むそしらぬ庭の雑草強し

長雨の抜けてコロナと灼熱に高压的な指導のあまた  
マイペース自立と自肅を守る夫この御時世を静観の余裕

「遠慮する」帰省せぬ息子の思いやりやおうなしに高齢者なる親

## 田中純子

リモート会議

・桜

「はいちーす」仲間全員マスクつけるコロナ禍記憶にとどめる写真  
梅雨晴れに桃の里行く熟れし実の落ちて匂えり 愁しみの色  
くちなしの花を手折りて散歩道一時間コース香りとともに  
親戚の見舞い叶わぬコロナ禍の配偶者さえ面会禁止  
パソコンの機種古くしてスマーズにリモート会議に出席出来ず  
最新のリフォームしたる隣人の広き天窓に夏雲流れる  
眠られぬ夜はラジオの深夜便やわらかき口調に引き込まれ行く

## 田中富子

檜扇の花

・鳩

知りあいの計報にもはや動ぜざる九十一の母を哀しむ  
長生きを咎のごと恥のこと言う母に檜扇の花咲くを告げたり  
くり返し長生きわびる老母の愚痴をいなして誕生日祝う  
尋ね人の放送流れる屋下がり女男は遠えどみな母に似る  
逆縁の息子なげきて十余年完全無欠となりゆく弟  
このマスク集めて金にしコロナ禍の業界に届けるすべなくなりしや  
公園の朝の散歩も人来ればマスクするなり梅雨まだ明けず

## 谷川節子

あじさい

・朱

あじさいの露けき花を見つつゆく雨上がりたる夫の墓處まで  
マスク着けし僧の読経は室内の少人数にひびきわたりて  
室内をはつかな風よしめやかに膳わざかなる夫の七回忌  
きわやかに葉むらの白き半夏生疫病さらにはやりつづくも  
鉢植えのもじすりの花門の上茎伸びやかに梅雨空のもと  
長梅雨に黒黒濡れる石段のひびのすき間を杉葉しげりて  
雨降りの禍禍しき日涼やかなアガパンサスの縹色沁む

## 田村利子

散歩

・洛

歩くこと続ける春の日々にしてただそれだけの友達となる  
「おはよう」の挨拶のみの顔なじみ会わない日にはゆとりの休憩  
毎朝の散歩コースの疏水辺にいつも落ち合う丸き木の椅子  
風ひかる木々のみどりの匂いくる 息は大きく朝の散歩は  
虹が出たと知られ振りむく老いふたり朝の散歩のようごびとする  
朝刊のマスクの型紙切り抜きてさあ縫おうかな、ミシン動くか  
柄さけて白地を生かし作るマスクどうしても出る花柄ひとつ

## 千葉範子

万華鏡

・朱

朝陰に白の紫陽花まろやかに広げる四ひらの初初しくて  
雨の日の続く六月西空に夕陽のなくして淋しき窓辺  
時くれば郭公が鳴く郊外の林に浴びる夏至のこもれ日  
収穫の玉ねぎ広げるつゆ晴れの庭の面は真夏の照りに  
万緑のささやく風が吹き抜ける氷川の杜の茅の輪をくぐりて  
蜘蛛の巣に光る滴の万華鏡音なく消えてつゆ明けとなり  
数多にも転がり落ちし青柚を拾い集めんこの手の平に

## 千葉む津

孫と共に

・ 湾

## 朝長美代子

光は見えず

・ 沖

玄関にちよこんと並ぶ孫の靴は弾んで見えますさあ出掛けましょ  
森なかのBGMは野鳥の声孫と駆け出す木洩れ日の径

コロナ禍に続く休園休校に深緑に染まる公園は賑わう  
お互いに程良く距離を取りながらボール遊びすキックにショート

駆け回る公園大好き二歳児のあとを追いつつ少しハラハラ  
テレワークAIロボットと進化する世の有難し昭和を想う

休園の続く六月孫と過ごす時間を与えしコロナ禍の日日  
テレワークAIロボットと進化する世の有難し昭和を想う

## 塚田禮子 夏椿

・ 信

## 長岡知子

自粛の日々に

・ 湾

読むことに飽いて登りまし寺の庭、一日椿の清しさにあふ  
幾年ぶり白く散り敷く夏椿コロナ禍忘る寺の夕べは  
コロナ禍や豪雨のおそふ地球には梅雨の日続く盆といふのに  
曾孫が命名されて“玄弥”とぞ四ヶ月くらし良き名となじむ  
終活に“必読を乞ふ”とふ封書出づ若きころなる夫への挑戦  
半生をかけて築きし日本庭園を駐車場とす老いには勝てず  
嫁ぎきて米寿となりぬふるさとの亡き父母をおもふ麦秋

## 照井美枝子

・ ウィ尔斯

・ 湾

## 中川富美子

・ コーラス

・ 浜

ひとときはマスクに困りし日もありぬ今はマナーなど無く道に捨てられ  
不織布のマスクは水に溶けぬとか海に漂う凶器となるのか  
寒暖の差の大きさに追いつけず風邪を引いたのか体温は三十度  
コロナウイルスの広がるこの季の一瞬に過ぎる「コロナか」と夫は糞す  
一日に十三人の感染に明日はわが身かと氣を引き締める  
コロナ禍に花屋さんは店を閉めるとか行事の出番が少なくなりしと  
熱中症がデマに伝わり「コロナ」だと人の心の醜さ哀し

湿りたる部屋の空気も不快さも消え去りゆかん梅雨さえ去れば  
警戒の弛みしころを突かれしかコロナの第二波ジワジワ迫り  
夢うつな自粛の日々を有意義に過ごさん初の梅干し作りに  
パソコンを相手に朝から睨めっこ意志に反して眠気の方が  
豆入りの大福いかにも旨そうと求め味わうひとりの至福  
珈琲の深き香りのその中で友と語る幸、自粛の中にも  
雨あがりの枝に光れる雪かな水無月の景のなんと麗し

## 中澤みさ江

夏のひととき

・信

## 中須賀美佐子

のぞく

・昂

白や青あじさいの花咲く庭を草むしりする日毎の仕事  
鬼やんまきんぎらぎんの日が光る草ボーボーの野原は広く  
蟬の声森中ひびき夏はゆくあけびの若実もふくらみ初める  
みんなの声高らかに夏唄う雑草の中ぬけがら多し  
こだまする蟬の鳴き声止む時も一瞬にしてとだえるかとも  
手づくりのマスク幾つか作りおき忘れて来たと子は手を伸ばす  
水かえに下葉のいたみ気にしてつも紫めきし夏菊かおる

## 中島彰代

ズックの足音

・春

朝刊に岡井隆氏の計報あり穩しく見つむる遺影を添へて  
底ごもる声に解きるし岡井氏のわれらが茂樹の百人一首を  
三叉路の一つ桃花の咲く道に滑り転びて疵を負いたり  
病窓より見下ろす朝の駅を行くあの人背に濃き影動く  
夜深く小さきペルに呼ばれしかズックの足音また病室を過る  
ハイと応へサッと立ちゆきぬはしけやし淡きピンクのユニフォーム着て  
あの山のふもとの我が家悲しとも痛し苦しとも疾く帰りたし

## 中島阿津子

春待つ

・湾

診察の医師との会話がすれてゆく肝心なこと訊けぬままなり  
引き出しの鍵穴のぞく見えそうにて見えぬ暗がりばんやりひかる  
十六の息子にもとめし長袖シャツ今は私の散歩着となり  
明け方のある一瞬を鳴き出だす鳥の声を窓ごとにきく  
けだるさをかみしめているこの真昼ラジオの声が胸にしみいる  
夢のなかの水のつめたさしんとしてむすめと二人山道のぼる  
母の庭に迷い込んだ黒揚羽ききょうに止まりふわり去りゆく

## 永田進一

河原町

・凌

夕暮れの河原町ゆく雜踏にマスクの少女は髪垂らし立つ  
友は聞く聞いてますかとスマホ手に午後五時前の雜踏のなか  
案内さる狭き階段上り行く店主は角刈り割烹の老舗  
冷やされたグラスピールは鱗鱗なりゆるり飲み干す喉の渴きに  
次々と出される品はおばんざいさり気なく出さる手拭きの湿り  
第二次会は珈琲とせむ街角の小川喫茶に三密避ける  
ほろ酔いの手擦り代わりの欄干に君の衰えしばし見ておりぬ

## 永田多恵子

ウスユキソウ

・湾

青き花咲く散歩道に頬よぎる風にうれしき春のことぶれ  
雨の息けぶる夕べの庭の木も春待つ思いに潤んでいるよう  
街中の空を区切れるビルの群はあれやさしき春の夕暮れ  
ビルの間の空は果てなく暮れなずみその空を指す黒き櫻は  
刻々に色移りゆく夕映えに櫻は織き枝分かれ見せ  
織き枝を空に張りたる並木道小さき芽吹きのほっぽつと見ゆ  
野の香り山の香りのあふれたる今宵の夕食に家族の笑顔

## 中西淳子 夕風

・天

花の世話をすむ明るき夏至の空残照果つる十九時三十  
宵いまだ明るく縁に風通う幼きわれらの夕餉の座敷  
湯浴みさせ四人の子ども夕膳に母は生き生きたち働きて  
蟬の声朝顔鮮やか庭おもて母しつらえし机に絵日記  
門打ち水風鈴うちわ夏障子立つる思い出添う母のかげ  
夕されば家拭き清め父待ちて膳を囲みし遠き日の町  
薄れゆく残照の空風わたり遙かの夏の頬過ぎゆきぬ

## 長野美佐子

感謝状

・茨

自肅せる日がな一日コロナ禍に望みあらたなねじ花の咲く  
水中に浮かぶ人影目に教え救いたる猫に感謝状送る  
長雨の梅雨前線容赦なく流さるる家舟かと紛う  
声を出し助けを求める泥沼に押し流さるる人行方も知れず  
居座れる梅雨前線列島を襲う豪雨被害に胸を熱くす  
映像に術あらざらむ崩壊する家住みたる人の生命は如何に  
コロナ禍で血圧上がる吾にして注意深いと友に言わるる

## 中原陽

陽

鬼灯

・森

## 中村博子

籠もり日

・漣

雨の中しかと咲きたる初芙蓉一日の命白く輝く  
植ゑつけしゴーヤの苗の小さき一本はやばやと実を下げる居りたり  
洪水のさま痛ましく僅かなる募金をかきて郵便局へ  
洪水の被災地に老いの八十歳きびきび働くボランティアと  
あの世とは空かと問ひし末の孫よき手順にて迎へ火を焚く  
コロナ禍に自肅の家族みな揃ひ迎へ火闘み仏を思ふ  
送り火も済みし夕暮れそなへたる赤き鬼灯愛しみ遊ぶ

## 中村恭子 コロナと共に

・洛

だんだんとステイホームに慣れてきてまつたり暮らせば輪廓の緩む  
家に居てすべきことはめじろ押しすればいいのにまずは珈琲  
既往症の卵巣癌の死亡率三割強でコロナを超える  
萎縮せず無謀にならず怖がらず雨降れば傘晴れれば日傘  
バッテンのついた座席が両側に×と仲よく洋画鑑賞  
透明のアクリル板に囲われて目元美人に茄子カレー頼む  
忙しい日々に終止符コロナ機に生き方自体変わる予感が

## 中村志津

新型コロナ

・漣

黒縁の眼鏡と手製のマスク着け地下道歩めば友振り返る  
ガラス戸に映る姿には一っとする背中丸めて俯くわたし  
意識しておれどそのうち前屈みとなる私をガラス戸に見る  
ボーズとり三面鏡に全身を映せば正しく私は猫背  
コロナ禍に春の曙重ねたり意識、記憶がぼんやり霞む  
容赦なくわが身にも迫りくる気配 新型コロナウイルスの間  
長引けるコロナ騒ぎに食事会とりやめとなり溜まるストレス

再会のできる日はいつ経験のなき日常に慣れる他なし  
八十路の坂のぼりて辿るうつし身よ今日の予定を残し暮れゆく  
ふたり娘とわれら夫婦のしめやかな五十回忌の男の面影  
コロナ禍に翻弄されるるうつし世のふた月に友ら四人逝きます  
友の妻逝きて三七日コロナ禍を我が家の方舟に香を焚きしむ  
唇にやさしき焼餅茶碗赤茶白茶に茶筅を振りぬ  
会えるまま「時」は過ぎゆくばかりにてボロンボロンとアルトの練習

## 中山真弓 ふきん

・信

こだわりの一〇〇パーセント綿びわこふきん食器洗いに洗剤つかわぬ  
吸水に特化あり化織のふきん使いステンレスのピカピカを維持  
冷水にふきんの漂白せし夏日すすぐさらしのせいせいするかな  
通学路に小学生ら走る走るマスク見えねばコロナ禍れる  
つけてみてと手づくりマスクに凝る友がマスク美人を次々うみだす  
政治家が顔半分にマスクのせ政府の迷走コロナ禍をゆく  
片方の耳にマスクをぶらさげる見苦しきさまコロナ禍の夏

## 西田佐恵子 母

・湾

長生きをし過ぎたと嘆く母と居り昔語りは行きつ戻りつす

アルバムを飽かずに眺め終わなし問わず語りの母の遠い目

迷惑をかけたくないが口癖の母の矜持は少し緩まり

農村の真中にあれば忙しなし腰を休める暇なく母は

ふるさとの水張田減り蛙の大音響も今は昔に

重ねたる歳月ゆえか思い出のふるさとの景色今も褪せずに

運、不運コロナの感染広まれり祈るしかない子らの息災

## 西田江美子 夕涼み

・宙

更けるまで星よみながら夕涼みかの人たちは皆空の上

息つめて見入る落日ぐいぐいと肩ゆすること彼方に沈む

東の間の希望のごとき名月を雲はゆっくり奪いてゆきぬ  
南天が庇にかかるほど伸びて剪れば部屋内あかるくなれり  
やわらかく土を解しし一隅に雀の砂浴び椀型三つ

公報の朗読テープ吹き込みのボランティアなすは七十八歳  
携帯でケラケラ笑う娘あり夜もふけたる外灯の下

## 西畠陸子 玉子かけご飯

・大

シエバード犬オーブンカーの助手席に鎮座します注目あひて  
杖をつく老い人に場所を尋ねられ道案内を買って出でたり

整形のベッドに並ぶ高齢者これぞまさしく社会の縮図

黄の色は元気がでるよと父いいきオレンジジュームの水かえる朝

大山の山麓に育つ鶏の新しき黄味の玉子かけご飯

垣根越しに園児ら並びて見つめいるゴミ収集車に手をふりいたり

菓子類の目録めくりて見つけたり母の好みし「雀の卵」

## 新田とし子 雨期

・沖

大雨の特別警報鳴りつけしとどの雨は終夜止まさり

膝臥の眼中深くさまるる信じられる惨状の今

知る程に近隣慘禍すさまじき孫は教師宅の受難も知りぬ

若者ら黙々と日を追つてボランティアの汗を流せり

年毎に災害犠牲者ふえづけ地球の天気凶苦酷になりゆく

わが國も作業日程させまり空を見上げつつ農作業急ぐ

われもまた弱者のひとりと思うゆえきわどき災い人ごとならず

## 根岸亮 マスク

・湾

日本のよき風習などと譲えたるマスクの人らの強きまなざし  
言ひ難くいま届きたる一枚のマスクをつまむ。そういうことか

午後の雨などと言ひ訳がましく語り合い寄り添う核の傘など要らぬ  
南からたまた西から蛇行して偏西風のいざこざが来つ

矢面はやはり苦しえわれは今マスクの下の湿り氣のなか

この上なく口のさみしい日の続き誰かマスクを脱がしてくれぬか  
吹き出しの科白のように膨らめる君の言葉が今日の力だ

野 玉 幸

断捨離

・洛

来年の地中海全国大会は中止することに決定！

住みなれし家を息子にゆずること心に決めてひと月あまり父の思い詰まつたこの家ぞ外郭と庭は残せと条件つけて家具衣類退けねばならず断捨離はいらぬは捨てる今の時代と災害で人、家までも失いし捨てる物ある幸せ思う書画軸なんでも買うとこの時代ネットの利用も一つの手段大鉢の昨夜捨てると言いし物あれはいい焼きまた戻しおり着物など融通ききて茶の友にうまく配分うれしいの声

● 地中海社・実務委員 ●

編集部：久我田鶴子・関根和美・磯田ひさ子・市原志郎  
木村文子・高尾恭子・田土成彦・玉井綾子  
檜垣美保子・藤田美智子・三好聖二  
総務部：藤森巳行（名簿・発送）・小野雅子（庶務）  
茂木 廳（原稿用紙・九曜書林会計）  
永塚節子（会計）・大浪美雪（会計・副）  
実務顧問：椎名恒治・柏原宗一  
監査委員：佐久間晟・牧 雄彦

● 十二月号は自選号です。

十月十日締切の原稿は、この一年の自選作品をお送りください。  
A・B欄の方は、タイトルを「自選」以外でお願いします。

来年の地中海全国大会は、五月に奈良で開催の予定でしたが、新型コロナウイルスの感染が収まる見通しの立たない中、参加者の安全を第一に考え、中止することにしました。

1、中止して再来年の70回記念大会にすべてをかける

（先行き不透明で迷いが出る。この際、はつきりと方針を出すべき。）

2、五月開催は無理かと思われる所以、秋に延期する

（二年続けて中止でいいのか。ワクチンにある程度期待でき、オリンピックが開催されれば平常の暮らしに戻るのではないか・・・？）

という二つの案が提示され、実務委員会で意見を出し合いました。基本的には定期的に開催すべきで、中止の判断はギリギリまで待った方がいいという意見も出ましたが、それは参加者にも担当者にも迷いや負担が大きいだろうと、全員一致で「中止」という結論に至りました。

今年の全国大会が中止になり、来年こそと期待されていた方もいたと思います。残念でしょうが、安心して外出でき、笑顔で歌会や懇親会や話し合いができるような状態になるまで、今暫く我慢してください。再来年は70回の記念大会になります。それまではその準備期間。こういう記念大会をというご意見等お寄せください。皆さんと共に良い大会にしていきたいと思います。なんとかこの試練を乗り越えて。

〔地中海社〕

● 支社だより ●

**緊急事態宣言発出以降のグループの活動報告**

①歌会は?

②吟行会やグループの「通信」などは?

■ 新樹の会 ■

①二月までは、毎月一回郡山市で定例歌会を催していた。だが、新型コロナの感染が拡大するようになってからは中止を余儀なくされている。

②歌会で直接顔を合わせることができない状況のなかで、会員をつなぐ手立てとして通信を発行するように努めている。分量は気楽に続けられるよう A4一枚。七月号は、藤田宛に届いた近内静子さんのお便りの一部と高尾恭子歌集『裸足のステップ』の紹介を載せた。近内さんの便りには、「歌はよくできませんが、歌があるからどうにかこうして暮らしていられるのもなどと考えています。歌が生きる力になっているのだと思います。」とあった。八月号の記事は、寄贈歌集の紹介と「コロナ禍はどう詠まれているか」を考えている。(藤田 記)

■ 銚子支社 ■

①文化団体であっても集会その他に市の施設は貸せないと連絡が入り、三月の歌会は間近になって中止のやむなきに至りました。四月・五月は紙上歌会に切り替え、あらかじめ詠草集・会報を送るのは今まで通りでしたが、各人の選歌とコメントを返送してもらい、それを集計して、また送り返すという形で進

■ 森の会 ■

①七月より再開しました。広い会場に変更して。遠方の方も多いので、出席は三分の一くらいですが、再開できたことに感謝! 久しぶりに顔を合わせて話し合うことの充実感をしみじみ味わいました。何気ない会話の中に短歌の種があつたりヒントがあつたりで、あらためて感激しました。

②吟行会は計画していましたが、今のところ自粛しています。晴れて実行できる日をひらすら待っています。(磯田 記)

■ 天平グループ ■

①歌会はいつも「天平」と「やましろ」の二つに分かれて行っています。四月以降の歌会は、「天平」では六月と八月の第三日曜に実施しました。「やましろ」は会場の関係で行えませんでした。

②吟行はせず、グループの「通信」は隔月発行を続けています。(西堀 記)

■ 大阪支社 ■

①三月、四月の歌会は中止。五月は一週間遅らせて、第五週に実施。六月も実施。七月は、コロナの感染者が増えてきたので

めました。質問は随時電話かファックスかメールでやりとりし、幾つかは一方通行を免れました。六月からは再び会場の利用ができるようになったので、通常の歌会に戻しました。ただし、三密を避け、体温を計り、マスク着用、換気を充分に行うということを厳守しています。

(三浦 記)

直前に中止決定。すでに当番の方から詠草集が送られていたので選歌だけして、当番が集計し、支社長の牧さんの講評を添えて郵送してもらいました。八月はもともとありません。

②吟行会は行っていません。グループ誌は集まって作業をするわけではないので、コロナの影響なく発行しています。

(高尾 記)

■ 凌霜グループ ■

①三月は休会。四月・五月は紙上歌会として、十一名が参加しました。田土ご夫妻もいつも通りご出詠。選評を天平の坂上直美さんと大阪支社の高尾恭子さんにお願いし、結果を各自に送りました。ちなみに、四月はコロナウイルス詠と自由詠が課題でした。六月・七月は、通常通り開催。それぞれ十名出席。八月も開催のつもりで一首提出歌を配っていましたが、あまりの暑さ続々にメンバーの年齢も考えて、前日に紙上歌会に変更しました。四月・五月と同様に、各自四首選と一首好きな歌を挙げてその理由を提出してもらい、これをまとめてメールとファックスで皆さんにお届けしました。紙上歌会も楽しんでいただけたかな? 提出歌・選評・好きな歌とその理由、なかなか面白かったです。

(宮本 記)

■ 昇グループ ■

①「安芸歌会」(広島市) : 四月は、グループの総会開催月で、実施計画なし。五月は中止。六月・七月は実施。八月は、従来より計画なし。九月より平常通り実施予定。

「備後歌会」(福山市) : 五月より中止。九月より実施予定。

②グループの総会は中止。岩井久美子・高橋啓子の歌集出版お祝いの会も延期。少し人数の増える集会は、自粛している。

(檜垣 記)

## 地 (つち) グループ ■

①三月・四月は休会。五月からは「紙上歌会」として、作口品・批評を提出してもらい、批評集送付で各自鑑賞というかたちをとっています。八月は例年通り夏期休会。九月からは通常歌会を準備予定していましたが、しばらくは「紙上歌会」に。

②二月に新年会。七月に、グループの会報「あめつち」を発行しました。

(浜谷 記)

## 宙 (そら) の会 ■

①基本的に奇数月の第二日曜に行っています。メンバーは近隣の支社グループの方々も好意的に来ていただいて、おおむね十数名の集まりです。この三月は、コロナによる自粛要請の出る直前だったのでそのまま実施しました。ただ遠隔地の府外からの参加者は、家族の猛烈な反対にあって参加を取りやめた人もいました。七月は、コロナ禍の小康段階だったので予定通り実施しました。

②五月は全国大会が予定されていたので、歌会は予定していかなかったところに凌霜グループからのお誘いを受け、王子動物園吟行プランに乗りました。しかし、動物園が閉園となって中止のやむなきに至りました。

(田土 記)

\* \* \* \*

新型コロナウイルスのために、外出自粛、歌会をしようにも会場が確保できない等々、今年は通常の活動ができなくなっているようですが、集まれないならばと別の方法で工夫されているところもあるようですが、皆さんのグループはいかがですか? グループの様子をお知らせください。

(編集部)

# クリップ

書きください。支社・グループでまとめて納入していただけると幸いです。

(1)歌集名(未定の場合は仮題)も(2)発行時期(3)版元を記入して本社宛に。折り返し、登録した叢書番号と事務手続きの文書をお送りいたします。

00180・2・790055 九曜書林  
本社よりスマートレターにてお送りいたします。

## ■入会届・退会届について

葉書に、①氏名(ふりがな)  
②住所③電話番号④生年月  
日⑤性別⑥送本開始(停止)  
月を記入の上、本社に提出して  
ください。退会届の場合は、①  
②⑥の記入をお願いします。急  
な送本停止には対応しきれませ  
んので、ご了承ください。

## ■会費納入について

二〇二〇年度分の会費を未納  
の方は納入してください。会費  
は、半年分、または一年分を前  
納することになっています。

各欄の月額は次の通りです。  
・A欄 二〇〇〇円  
・B欄 一五〇〇円  
・C欄 一〇〇〇円  
・購読 一〇〇〇円

二十歳未満の学生は五〇〇円  
です。(若い人たちも是非ご勧  
説ください)

地中海叢書番号をご請求くだ  
さい。葉書に住所氏名の他に、  
00160・4・179569 地中海社

## ■原稿用紙の申し込みについて

一冊一五〇円。それに送料が  
かかりますので、まとめてのお  
申し込みがお勧めです。本社、  
または担当の茂木斌までご連絡  
ください。こちらから発送する  
際に振込用紙を同封いたします  
ので、代金はそれを使って振り  
込んでください。

## ■本誌の追加注文について

本社に葉書にてご連絡ください。  
代金は一冊一〇〇〇円。会  
費と同じ「地中海社」の口座に  
お願いします。

## ■見本誌について

勧誘用に見本誌をお求めにな  
る場合は、送料のみご負担いた  
だきます。二冊までなら二〇〇  
円分の切手を同封してお申し込  
みください。

歌集を出版する際には  
地中海叢書番号をご請求くだ  
さい。葉書に住所氏名の他に、

## ■九曜書林は、比較的安価な歌 集出版を考えていて、自分では どうしていいか分からず困って いる方のために立ち上げました。

印刷・製本は、本誌の印刷をし  
ている京成社にお願いしていま  
す。一、三〇万円くらいでも予  
算に応じた出版が可能です。ま  
ずは、編集部にご相談ください。

## ■本社の窓口は、いつでも開いて います。どんなことでも遠慮

なくご相談ください。歌集の出  
版につきましても、予算やご希  
望に応じてできる限りの対応を  
させていただきます。ご意見そ  
の他もどうぞお寄せください。  
『沖縄(新装版)』注文受付  
ご注文を受け付けています。  
一冊2000円(税と送料は桃  
原氏負担)です。六花書林から  
の出版ですが、代金の振り替え  
は九曜書林の口座を使わせて  
いただきます。口座への代金納入  
をもってご注文とさせていただ  
きます。冊数・氏名を明記の上、  
左の口座へお願いします。



## 神田通信

新型コロナウイルスの感染拡大は、未だ収束の気配が見られません。自粛の続く日々、皆様いかがお過ごしですか？

四月半ば以降、本社に集まつての作業は控えて、編集・総務とともに、それぞれの自宅で作業を行っています。今のところ発行が遅れることもなく、お手元にお届けできているのも、皆様の「ご協力のお蔭と感謝しております。現状から判断して、引き続き今年度中はこの形でやっていくことにしました。

本社に届く郵便物等は、定期的に見てもらうようにしていますが、月々の原稿は今年度中は久我宛にお送りください。

263-0031 千葉市稲毛区稲毛東  
6-10-2-1202  
閑谷方 久我田鶴子

よろしくお願ひいたします。

◆今年は春も夏もあるという間でした。今年の農産物の出来はどうでしょうか。日照不足や台風に負けずに実り豊かでありますように。

◆年をとると時の経つのが早いが、子どもの頃の一年は長かった。コロナ禍による自粛を子ども達は大人以上に長く感じながら我慢しているのだろう。

(高尾) ◆ユーチューブの「ばあばのおりがみチャンネル」にはまって

いる。キーブや万華鏡など、これまで馴染んできた折り紙とは違う楽しみがあるのだ。

(藤田)

◆三十数年前、香川先生の墨筆展を訪れた時「下の階の小川芋戻戻いいぞ」と言わわれ、観た。「いもせん」ではなく「うせん」と、先日知った。(檜垣)

◆息子の小学校は八月七日が終業式でした。八月六日は学校で原爆のビデオを観たそうです。コロナ禍の今年ならではの授業だと感じ入りました。(玉井)

◆連日の猛暑、41・1度の最高気温タイ記録も生まれました。そんな猛暑を喜んでいるのが百

度に暑さがお好みのようですが、子どもたちも暑さがお好みのようす。蝉の鳴き声の降る庭に咲いています。こちらは首タオルの熱中症対策万端じーさんとなつた。(木村)

◆映画館に映画を観に行かなくなつて何十年経つだろう。今は、テレビで一部カットの映画を観るのみ。今日は、『L・A・コン

フィデンシャル』だ。(三好)

◆コロナについて新聞テレビは

恐怖をあおり立てているがネット情報ではそれほどでもないよ

という記事もあり判断が難しい。

両方見ておく事か。(成彦)

◆ノーベル賞を受賞した大村智氏が、外出せず人とも会わない

と、脳が退化してしまうと。季節の感覚も薄れがち。詠草の締切が良薬かと思う。(磯田)

◆愛するクリスト者や懐かしい雨宮さんの心に分け入る思いで

読み進む三枝浩樹歌集『黄昏』

◆連日の猛暑、41・1度の最高気温タイ記録も生まれました。そんな猛暑を喜んでいるのが百

度に暑さがお好みのようす。蝉の鳴き声の降る庭に咲いています。こちらは首タオルの熱中症対策万端じーさんとなつた。(木村)

◆熊本をはじめ各所に豪雨災害をもたらした七月の、長い梅雨が終わったと思ったら、八月は

連日の猛暑。新型コロナウイルスに、熱中症の心配もという今

年も夏です。皆さん、なんとか凌いでください。

◆今号は、お盆の間に編集作業を行い、宅急便にて印刷所に十

七日着で入稿しています。

◆十月十三日は香川進の命日、九曜忌です。田土さんの「生き

ものの歌」に加えて、佐久間さ

んの「師つれづれ」も。

◆この四月以降、支社・グループの活動はどうされているのか、

歌会の様子などを伝えてもらいました。皆さんのところはいかがですか?

◆直接会って何かすることが難

しい状態が続いているが、今

だからできることもきっとある

はず。実りの秋へと転じていってください。

(久我)

「地中海」10月号・通巻749号・編集人 久我田鶴子・発行所「地中海社」  
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-5-9 神田カトランビル402号・振替 00160-4-179569  
電話・FAX 03-5280-8877 <http://www.tityukai.com/> 1000円 印刷・京成社